気仙沼市文化財調査報告書第10集　気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書1　二〇一七　気仙沼市教育委員会

気仙沼市文化財調査報告書第 10 集

気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書 1

平成 24 年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財
発掘調査事業に伴う個人住宅関連遺跡発掘調査

２０１７

気仙沼市教育委員会

気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書 1

平成 24 年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財
発掘調査事業に伴う個人住宅関連遺跡発掘調査

序　　文

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震が引き起こした巨大津波は、東日本の沿岸部を襲い、本市においても沿岸部を中心に壊滅的な被害をもたらしました。被災家屋約 26,000 棟、被災世帯約 9,500 世帯、1,300 人を超える尊い命が犠牲となりました。

未曾有の大震災からの一日も早い復旧・復興を目指し、個人での住宅再建をはじめ、高台への集団移転、各種産業施設やインフラ関係等で大規模な開発計画に伴い、埋蔵文化財とのかかわりが急増いたしました。

本市には、縄文時代の貝塚や集落跡、中世の城館跡など 180 カ所以上の遺跡が知られていますが、これらの多くは沿岸部の丘陵地帯に立地しているため、津波の浸水域を避けた土地を求める場合、必然的に埋蔵文化財とのかかわりが発生する可能性が増大するという地理的な状況にあります。

気仙沼市教育委員会では、復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護との両立を図るため、職員の再任用や任期付職員の採用に加え、宮城県や他自治体へ職員の派遣要請を行い、埋蔵文化財の発掘調査に対応する専門職員を確保するほか、宮城県教育委員会はじめ関係機関に調査支援を要請するなど調査体制を整備してまいりました。

本書は、平成 24 年度、本市が国の東日本大震災復興交付金事業として実施した、個人住宅建築等に関連する埋蔵文化財発掘調査成果を集成した報告書でありますが、収録した考古学的成果は、これまであまり知られていなかった当地域の歴史を解明する貴重な資料となるものです。太古から幾多の大津波や自然災害を克服しながら、手強い海と深くかかわる一方、豊かな海の恩恵を受け、この地に根差した文化を育んできた人びとの営みの一端を記録し伝えることが地域の再発見につながるとともに、大震災後の本市の復旧・復興に向けたまちづくりの一助となれば幸甚に存じます。

結びに、円滑な埋蔵文化財発掘調査にご協力をいただいた事業者の皆様、宮城県教育委員会、本市の埋蔵文化財発掘調査のため支援をいただきました全国からの自治法派遣職員の皆様並びに派遣元自治体の皆様など、ご支援を頂いた多くの関係者・関係機関の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成 29 年 12 月

気仙沼市教育委員会
教育長　齋藤　益男

例　　言

1　本書は、平成 24 年度に実施した東日本大震災の復興事業に伴う個人住宅建築等に係る埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　各遺跡の発掘調査は、気仙沼市教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の支援を受けて実施した。

3　各遺跡の整理・報告書作成作業は、平成 26 ～ 29 年度に気仙沼市教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の支援を受けて実施した。

4　使用した遺構略号は、SI：竪穴建物跡　SK：土坑　SD：溝跡　SX：土器埋設遺構　柱穴・ピット：P である。

5　平成 23 年度以降に発掘調査を実施した周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）には、アルファベット大文字の 3 文字で遺跡記号を付与した。磯草貝塚は「ISO」、高谷遺跡は「TKY」、古館貝塚は「KOD」、南最知貝塚は「MSK」、星谷遺跡は「HOS」である。各遺跡の調査字数は年度内において 1 次調査、2 次調査・・・とした。

6　発掘調査面積については、本書で記載するものを確定面積とする。

7　挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。

8　本書で使用した方位は磁北であるが、異なるものは方位を示した。

9　発掘作業における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。

10　発掘調査成果の内容や土層の色調等の表現については、原則として現場担当者による注記等を採用した。

11　整理・報告書作成作業における土器の注記及び接合・復元作業に係る業務は株式会社パスコへ委託し、森幸一郎が監理を行った。

12　遺物への注記は、各遺跡の記号を頭に、出土地点・出土層位・出土年月日を記入した。

13　整理・報告書作成作業における遺物の実測図・トレース図作成、写真撮影及び観察表作成に係る業務は、気仙沼市教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の支援を受けて実施した。業務の一部は株式会社四門及び国際文化財株式会社へ委託し、森・平木場秀男が監理した。

14　整理・報告書作成作業における遺構等のトレース及び報告書編集の支援に係る業務は、株式会社四門へ委託し、永濵功治が監理した。

15　磯草貝塚平成 24 年度 1 次調査で出土した自然遺物の分析については、山﨑健氏･松崎哲也氏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）に依頼し、玉稿（第 7 章）を頂いた。

16　骨角器の材質同定は山﨑氏・松崎氏が行った。

17　本書の執筆は、第 1 章を森･平木場が、第 2 ～ 6 章を西村力が行った。編集は、森･平木場･西村･古田和誠が行った。

18　出土遺物及び実測図・写真等の記録類は、気仙沼市教育委員会が保管し、展示・活用を図る予定である。

目　　次

序文
例言
目次

第１章　調査の経過 …… 1
　１．東日本大震災後の対応・予算措置等 …… 1
　（１）東日本大震災後の対応 …… 1
　（２）調査体制 …… 2
　（３）復興交付金事業にかかる予算措置 …… 2
　２．確認調査 …… 2
　３．本発掘調査 …… 5
　４．整理作業・報告書作成 …… 6
第２章　磯草貝塚 …… 7
　１．調査に至る経緯 …… 7
　２．調査の概要 …… 7
　（１）平成 24 年度１次調査 …… 7
　（２）平成 24 年度２次調査 …… 8
　３．調査の成果 …… 8
　４．まとめ …… 11
　（１）遺物 …… 11
　（２）貝層・遺物包含層について …… 28
第３章　高谷遺跡 …… 33
　１．調査に至る経緯 …… 33
　２．調査の概要 …… 33
　３．調査の成果 …… 33
　（１）３区 …… 33
　（２）４区 …… 41
　４．まとめ …… 45
　（１）土坑 …… 45
　（２）ピット …… 46
第４章　古館貝塚 …… 49
　１．調査に至る経緯 …… 49
　２．調査の概要 …… 49
　３．調査の成果 …… 49
　４．まとめ …… 53
第５章　南最知貝塚 …… 55
　１．遺跡の概要 …… 55
　２．調査に至る経緯 …… 55
　３．調査の概要 …… 55
　（１）平成 24 年度１次調査 …… 55
　（２）平成 24 年度２次調査 …… 56
　４．調査の成果 …… 56
　（１）平成 24 年度１次調査地点 …… 56
　（２）平成 24 年度２次調査地点 …… 58
　５．まとめ …… 60
第６章　星谷遺跡 …… 62
　１．調査に至る経緯 …… 62
　２．調査の概要 …… 63
　３．調査の成果 …… 63
　４．まとめ …… 65
第７章　磯草貝塚から出土した動物遺存体 …… 67
　１．整理対象遺物（分析資料）の限定 …… 67
　２．同定・記載 …… 67
　３．動物利用の時期的変遷 …… 69
　４．採貝活動 …… 69
　５．漁撈活動 …… 70
　６．まとめ …… 71
　７．今後の課題 …… 71
写真図版 …… 77
報告書抄録

挿　図　目　次

第 1 図　気仙沼市の位置と遺跡の分布 …… 3
第 2 図　磯草貝塚の位置 …… 7
第 3 図　磯草貝塚トレンチ配置図 …… 8
第 4 図　磯草貝塚包含層分布図・断面図（1） …… 9
第 5 図　磯草貝塚包含層分布図・断面図（2） …… 10
第 6 図　磯草貝塚 T3-7・8 層出土遺物 …… 11
第 7 図　磯草貝塚 T3-7・12 層出土遺物 …… 12
第 8 図　磯草貝塚 T3-13・A1 層出土遺物 …… 13
第 9 図　磯草貝塚 T3-A2 層出土遺物 …… 14
第10図　磯草貝塚 T3-A2'・C 層出土遺物 …… 15
第11図　磯草貝塚 T3-C 層出土遺物 …… 16
第12図　磯草貝塚 T3-17 層出土遺物 …… 17
第13図　磯草貝塚 T3-4 ～ 17 層出土遺物 …… 18
第14図　磯草貝塚 T3-A1 ～ 17 層出土遺物（1） …… 19
第15図　磯草貝塚 T3-A1 ～ 17 層出土遺物（2） …… 20
第16図　磯草貝塚 T1・2・4 ～ 8、2 次調査出土遺物 … 21
第17図　磯草貝塚出土土器分類図（1） …… 23
第18図　磯草貝塚出土土器分類図（2） …… 24

第19図　高谷遺跡の位置 …… 33
第20図　高谷遺跡調査範囲 …… 34
第21図　高谷遺跡遺構配置図 …… 34
第22図　高谷遺跡3区遺構平面図・断面図（1） …… 36
第23図　高谷遺跡3区遺構平面図・断面図（2） …… 37
第24図　高谷遺跡3区SK1･2･4･6･7出土遺物 …… 39
第25図　高谷遺跡3区SK9･10出土遺物 …… 40
第26図　高谷遺跡4区SK2出土遺物 …… 41
第27図　高谷遺跡4区遺構平面図・断面図 …… 42
第28図　高谷遺跡4区SK3･4出土遺物 …… 43
第29図　高谷遺跡4区SK5出土遺物 …… 44
第30図　高谷遺跡4区SK6出土遺物 …… 45
第31図　古館貝塚の位置 …… 49
第32図　古館貝塚トレンチ配置図 …… 50
第33図　古館貝塚T3遺構平面図・断面図 …… 51
第34図　古館貝塚SK1･2出土遺物 …… 52
第35図　古館貝塚SK4出土遺物 …… 53
第36図　南最知貝塚の位置 …… 55
第37図　南最知貝塚調査箇所 …… 56
第38図　南最知貝塚平成24年度1次調査遺構配置図 … 57
第39図　南最知貝塚平成24年度2次調査遺構配置図 … 58
第40図　南最知貝塚平成24年度2次調査SI1ほか …… 59
第41図　星谷遺跡の位置 …… 62
第42図　星谷遺跡調査箇所 …… 62
第43図　星谷遺跡包含層出土遺物 …… 63
第44図　星谷遺跡遺構平面図・断面図 …… 64
第45図　星谷遺跡SI1竪穴建物跡出土遺物 …… 65
第46図　質量の層位変化 …… 69
第47図　動物遺存体の層位変化 …… 69
第48図　貝類組成の層位変化 …… 70
第49図　魚類組成の層位変化 …… 70

表　目　次

第1表　平成24年度発掘調査一覧 …… 4
第2表　平成23年度発掘調査一覧 …… 5
第3表　磯草貝塚土器類型出土状況表 …… 26
第4表　磯草貝塚トレンチ層序対応表 …… 29
第5表　磯草貝塚出土縄文土器観察表（図示資料）…… 29
第6表　磯草貝塚出土縄文土器観察表（写真のみ掲載） 30
第7表　磯草貝塚出土土製品観察表 …… 32
第8表　磯草貝塚出土石器観察表（図示資料）…… 32
第9表　磯草貝塚出土石器観察表（写真のみ掲載）…… 32
第10表　磯草貝塚出土骨角器観察表 …… 32
第11表　高谷遺跡土坑一覧表 …… 46
第12表　高谷遺跡出土縄文土器観察表（図示資料）…… 46
第13表　高谷遺跡出土縄文土器観察表（写真のみ掲載） 47
第14表　高谷遺跡出土石器観察表（図示資料）…… 47
第15表　高谷遺跡出土石器観察表（写真のみ掲載）…… 47
第16表　古館貝塚土坑一覧表 …… 53
第17表　古館貝塚出土縄文土器観察表（図示資料）…… 54
第18表　古館貝塚出土縄文土器観察表（写真のみ掲載） 54
第19表　古館貝塚出土石器観察表（写真のみ掲載）…… 54
第20表　南最知貝塚出土土器観察表（図示資料）…… 61
第21表　南最知貝塚出土土器観察表（写真のみ掲載）… 61
第22表　南最知貝塚出土石器観察表（写真のみ掲載）… 61
第23表　星谷遺跡出土土器観察表（図示資料）…… 66
第24表　星谷遺跡出土石器観察表（図示資料）…… 66
第25表　星谷遺跡出土石器観察表（写真のみ掲載）…… 66
第26表　磯草貝塚から出土した動物遺存体の種名一覧 68
第27表　哺乳類・鳥類の観察表（現場採集資料）…… 72
第28表　哺乳類・鳥類の観察表（4㎜目フルイ資料） … 72
第29表　貝類の集計表（現場採集資料）…… 73
第30表　貝類の集計表（4㎜目フルイ資料） …… 73
第31表　フジツボ類・ウニ類の集計表（4㎜目フルイ資料） …… 73
第32表　フジツボ類・ウニ類の質量表（4㎜目フルイ資料） …… 73
第33表　魚類の集計表（現場採集資料）…… 74
第34表　魚類の集計表（4㎜目フルイ資料） …… 74

写真図版目次

写真図版1　磯草貝塚発掘現場（1）…… 77
写真図版2　磯草貝塚発掘現場（2）…… 78
写真図版3　磯草貝塚出土土器（1）…… 79
写真図版4　磯草貝塚出土土器（2）…… 80
写真図版5　磯草貝塚出土土器（3）…… 81
写真図版6　磯草貝塚出土土器（4）…… 82
写真図版7　磯草貝塚出土土器（5）…… 83
写真図版8　磯草貝塚出土土器（6）…… 84
写真図版9　磯草貝塚出土土器（7）…… 85
写真図版10　磯草貝塚出土土製品・石器・骨角器…… 86
写真図版11　磯草貝塚出土動物遺存体…… 87
写真図版12　高谷遺跡発掘現場（1）…… 88
写真図版13　高谷遺跡発掘現場（2）…… 89
写真図版14　高谷遺跡発掘現場（3）…… 90
写真図版15　高谷遺跡出土土器…… 91
写真図版16　高谷遺跡出土石器（1）…… 92
写真図版17　高谷遺跡出土石器（2）…… 93
写真図版18　古館貝塚発掘現場…… 94
写真図版19　古館貝塚出土遺物…… 95
写真図版20　南最知貝塚発掘現場…… 96
写真図版21　南最知貝塚出土遺物…… 97
写真図版22　星谷遺跡発掘現場・出土遺物…… 98

第１章　調査の経過

１．東日本大震災後の対応・予算措置等

（1）東日本大震災後の対応

①埋蔵文化財の取扱いについて

平成23年3月11日の東日本大震災の発生を受け、文化庁は、発災後の平成23年4月28日付け（23庁財第61号）で「東日本大震災の復旧･復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて（通知）」により、宮城県を含む1都7県1市の教育委員会教育長に対し、被災地の復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財の適切な保護との整合性を図るよう通知を行った。また、平成24年4月17日付け（24庁財第62号）で同名の通知を発し、宮城・岩手・福島・仙台市の3県1市の教育委員会教育長に対し、迅速な埋蔵文化財の発掘調査を実施するための留意点を示した。

宮城県教育委員会は、県内市町村に対し、平成23年6月3日付け（文第268号）で「東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて」を発出し、事業計画の早期把握による周知の埋蔵文化財包蔵地での開発事業の回避及び発掘調査に備えた埋蔵文化財包蔵地の早期の内容把握を求めるとともに、宮城県発掘調査基準の弾力的な運用、専門職員の確保や民間調査組織の導入を含めた調査体制の充実を図り、迅速な発掘調査に努め、設定した調査期間を厳守することなどの方針が示された。

気仙沼市教育委員会では、文化庁及び宮城県教育委員会の提示した方針に基づき宮城県教育委員会の協力を得ながら、迅速かつ適正な発掘調査を実施することとした。

※東日本大震災によって文化庁が発した埋蔵文化財関係の通知等

・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて（通知）（平成23年4月28日付け23庁財第61号）

・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて（通知）（平成24年4月17日付け24庁財第62号）

・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する平成23年4月28日付け文化庁次長通知（23庁財第61号）について（通知）（平成25年2月18日24庁財第691号）

・東日本大震災の復興に伴う防災集団移転促進事業における埋蔵文化財発掘調査の実施に関する取扱いについて（通知）（平成25年3月15日付け事務連絡）

・東日本大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する取扱いについて（回答）（平成25年3月15日付け事務連絡）

※東日本大震災によって宮城県教育委員会が発した埋蔵文化財関係の通知

・東日本大震災の復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについて（通知）（平成23年6月3日文第268号）

②調査主体

東日本大震災復興交付金事業の基幹事業に位置付けられた防災集団移転事業や土地区画整理事業等の大規模な事業については、分布・試掘調査を宮城県教育委員会が行い、確認調査及び本発掘調査を気仙沼市教育委員会が行うこととした。また，被災した個人住宅及び中小零細企業の店舗・工場等の再建に伴う発掘調査は、気仙沼市教育委員会が主体となり実施することとした。

気仙沼市教育委員会が主体となって行う調査については、調査内容・規模等必要に応じて随時宮城県教育委員会から専門職員の派遣を受けて実施することとした。

(2) 調査体制

気仙沼市では、震災復興計画が策定される中で、集団移転事業など多くの開発事業が、周知の埋蔵文化財包蔵地へ影響を及ぼす可能性が高くなることが予想され、震災以前の文化財保護体制では、発掘調査を行う専門職員の不足が見込まれた。

そこで、平成 24 年 4 月に専門職員 1 名を再任用するとともに、平成 25 年 1 月には鹿児島県教育委員会からの派遣職員 1 名と、宮城県が復興事業推進のため採用した任期付職員 2 名の派遣を受け、発掘調査体制の強化を図った。

平成 24 年度の磯草貝塚ほか 4 遺跡の調査体制及び宮城県教育庁文化財保護課の調査協力は以下のとおりである。

【調査担当】 生涯学習課文化振興係

生涯学習課長　千葉光広　　課長補佐　鈴木實夫　　主幹兼文化振興係長　昆野賢一

担当：主幹　幡野寛治　　主査　西園勝彦（鹿児島県派遣　1 月～）　　主査　千葉絢子

武部喜充・鹿島直樹（任期付　1 月～）

【調査協力】 宮城県教育庁文化財保護課（職名・敬称略、括弧内は派遣元等自治体）

豊村幸宏　　山中信宏（宮城県）　　三好秀樹（多賀城跡調査研究所）　　遠藤　武（愛媛県）

小淵忠司（岐阜県）

(3) 復興交付金事業にかかる予算措置

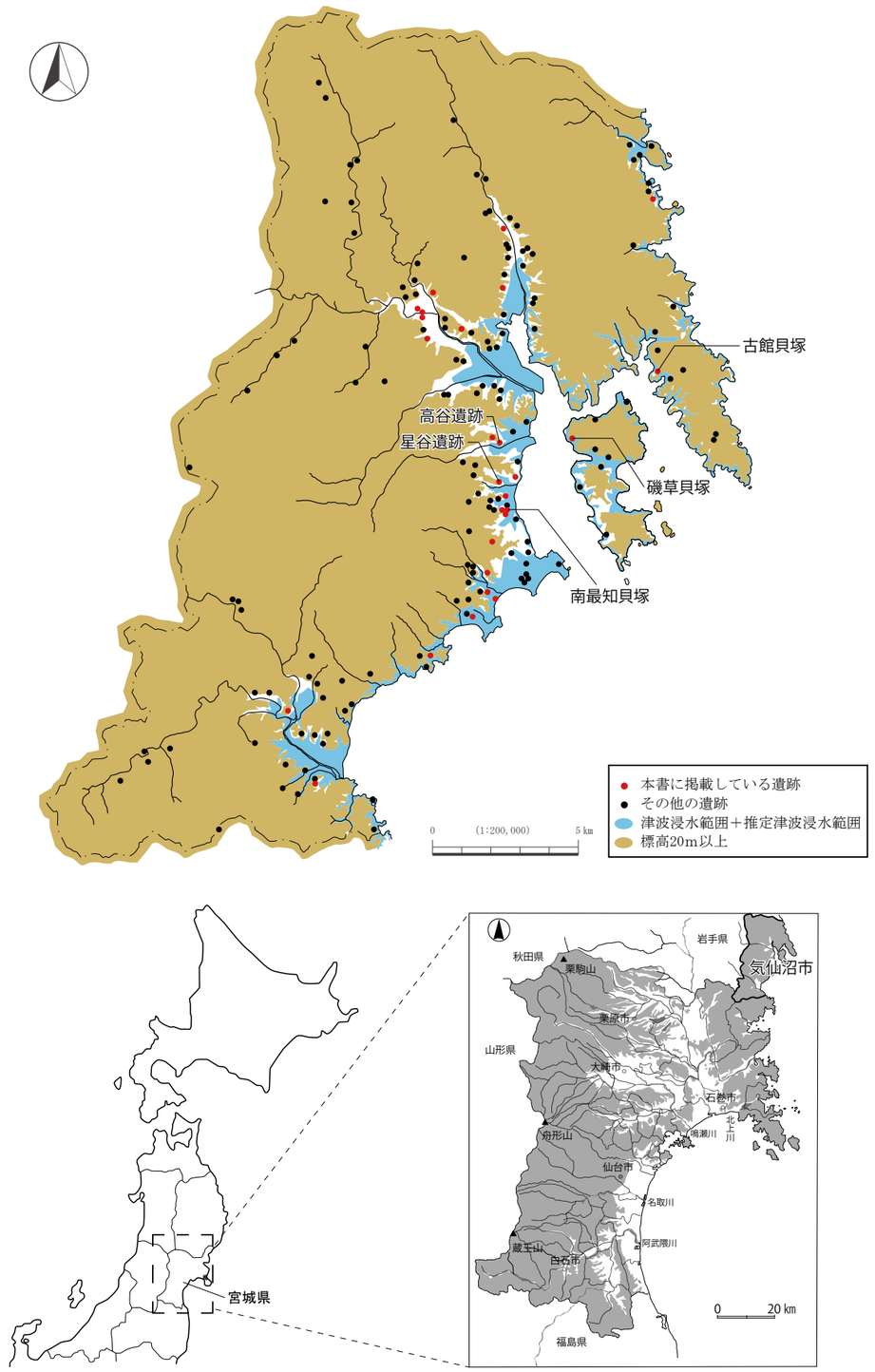
被災した個人住宅や中小零細企業の店舗・工場等の再建にかかる確認調査・本発掘調査は、東日本大震災復興交付金事業の埋蔵文化財発掘調査事業に位置付けられている。また、防災集団移転促進事業や土地区画整理事業等の復興交付金基幹事業については、確認調査を埋蔵文化財発掘調査事業で行い、本発掘調査については当該基幹事業の中で行うこととなっている。

埋蔵文化財発掘調査事業に該当する発掘調査費用については、国費の負担割合を 75%に引き上げた上で、市が負担する 25%は特別地方交付税措置により補てんされることになっており、財政負担の軽減が図られている。

2. 確認調査

気仙沼市では、平成 27 年 3 月時点で 180 箇所以上の周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、「遺跡」）が確認されているが、その多くが沖積地に隣接した丘陵や段丘上に所在する。第 1 図は気仙沼市の遺跡の分布と東日本大震災の津波浸水域を示したものである。ほとんどの遺跡が津波の浸水を逃れていることがわかるが、逆の見方をするならば、被災者の個人住宅再建や高台移転等の候補地に多くの遺跡が分布しているということになる。

平成 24 年 3 月 23 日に復興交付金事業の交付決定を受け、平成 24 年 4 月から発掘調査を実施することとなった。本市では過去に経験のない規模の発掘調査であり、多数の発掘調査を実施するための



第 1 図　気仙沼市の位置と遺跡の分布

作業員の確保や機材の調達等の契約に時間を要したが、事業者の協力もあり４月から確認調査を実施することができた。準備がほぼ整った５月下旬から最初の個人住宅再建に伴う本発掘調査を実施した。震災復興に係る遺跡の取り扱いは、現地保存を前提とし、やむを得ず本発掘調査を実施する場合も、掘削範囲を必要最小限に留めるよう調整している。

調査に際しては、復興事業にかかる調査の円滑化・迅速化を推進するため、宮城県発掘調査基準の弾力的な運用がなされた。

平成 24 年度に実施した確認調査は、41 件 23 遺跡（第１表）と急激に増加した。内訳は、個人住宅の再建に伴う調査 39 件、中小企業等の再建に伴う調査２件である。

確認調査の結果、遺構・遺物が確認され現地保存に至った例は２件である。南最知貝塚における個人住宅の建築においては、縄文時代の竪穴建物跡４棟、古代の竪穴建物跡２棟、中世城館に伴うと推定される溝跡２条のほか遺物包含層が確認され、事業者と協議し遺構面に掘削が及ばない厚さまで盛土して宅地を造成した上で住宅を建築した（南最知貝塚平成 24 年度１次調査）。

同じく、南最知貝塚における個人住宅建築では、古代の竪穴建物跡１棟が確認され、事業者と協議し、当初の計画位置を変更し、遺構を避けて住宅を建築した（南最知貝塚平成 24 年度２次調査）。

これらの調整により本調査を回避し、調査期間の短縮による住宅の早期再建と遺跡の現地保存の両立を図ることができた。

なお，東日本大震災直後の平成 23 年度にも確認調査を 10 件 11 遺跡（第２表）実施したが，いずれも遺構・遺物は確認されなかった。

第１表　平成 24 年度発掘調査一覧

No.	遺跡名	遺跡番号	遺跡記号	所在地	調査原因	対応	対象面積(㎡)	調査面積(㎡)	調査期間	発見された遺構・遺物	調査担当者		備考
											気仙沼市	宮城県支援	
1	三島古墳群	62001	ＭＩＳ	本吉町三島	個人住宅	確認調査	358.75	20	4 月 18 日	なし	幡野寛治		
2	三島古墳群	62001	ＭＩＳ	本吉町三島	個人住宅	確認調査	663.00	70	4 月 18 日	なし	幡野寛治		
3	最知中館跡	59041	ＳＡＮ	最知南最知	個人住宅	確認調査	675.29	6	5 月 15 日	なし	鈴木實夫		
4	高谷遺跡	59109	ＴＫＹ	松崎高谷	個人住宅	本発掘調査	915.42	235	5 月 23 日～6 月 12 日	貯蔵穴・土坑 縄文土器・石器	幡野寛治 鈴木實夫	豊村幸宏 三好秀樹 小淵忠司	本書掲載
5	南最知城跡	59043	ＭＳＪ	長磯鳥子沢	個人住宅	確認調査	691.82	8	5 月 28 日	なし	幡野寛治		
6	田柄貝塚	59013	ＴＧＫ	茗荷沢	個人住宅	確認調査	352.78	40	6 月 7 日	縄文土器	鈴木實夫	豊村幸宏 三好秀樹	
7	田柄貝塚	59013	ＴＧＫ	茗荷沢	個人住宅	確認調査	352.54	40	6 月 7 日	縄文土器	鈴木實夫	豊村幸宏 三好秀樹	
8	南最知貝塚	59035	ＭＳＫ	最知南最知	個人住宅	確認調査	2,043.00	400	6 月 13 日～6 月 22 日	竪穴建物跡・土坑・溝 縄文土器・須恵器・土師器	鈴木實夫 幡野寛治	豊村幸宏 小淵忠司	本書掲載
9	旭岡遺跡	62010	ＡＳＡ	本吉町津谷桜子	個人住宅	確認調査	608.98	8	6 月 29 日	なし	幡野寛治		
10	鳳京館跡	62032	ＨＯＫ	本吉町野々下	個人住宅	確認調査	971.71	70	7 月 2 日～7 月 3 日	なし	鈴木實夫		
11	赤岩城跡	59059	ＡＫＪ	松川	個人住宅	確認調査	330.00	6	7 月 6 日	なし	昆野賢一		
12	高谷貝塚	59094	ＴＡＫ	松崎高谷	個人住宅	確認調査	420.70	6	7 月 18 日	なし	昆野賢一		
13	星谷遺跡	59104	ＨＯＳ	岩月星谷	個人住宅	確認調査	381.14	60	7 月 19 日	なし	鈴木實夫 幡野寛治		
14	星谷遺跡	59104	ＨＯＳ	岩月星谷	個人住宅	確認調査	322.79	30	7 月 19 日	なし	幡野寛治		
15	古館貝塚	63017	ＫＯＤ	唐桑町鮪立	個人住宅	確認調査	1,243.85	40	7 月 20 日	なし	鈴木實夫 幡野寛治		
16	古館貝塚	63017	ＫＯＤ	唐桑町鮪立	個人住宅	確認調査	467.00	105	7 月 20 日～8 月 1 日	なし	鈴木實夫 幡野寛治		
17	古館貝塚	63017	ＫＯＤ	唐桑町鮪立	個人住宅	本発掘調査	467.34	51	7 月 30 日～8 月 1 日	貯蔵穴・土坑 縄文土器・石器	鈴木實夫 幡野寛治	豊村幸宏 小淵忠司	本書掲載
18	旭岡遺跡	62010	ＡＳＡ	本吉町津谷桜子	個人住宅	確認調査	824.77	60	7 月 30 日～7 月 31 日	縄文土器	幡野寛治 昆野賢一		
19	高谷貝塚	59094	ＴＡＫ	松崎高谷	個人住宅	確認調査	432.00	6	8 月 3 日	なし	幡野寛治		

No.	遺跡名	遺跡番号	遺跡記号	所在地	調査原因	対応	対象面積(㎡)	調査面積(㎡)	調査期間	発見された遺構・遺物	調査担当者		備考
											気仙沼市	宮城県支援	
20	南最知貝塚	59035	ＭＳＫ	最知南最知	個人住宅	確認調査	373.00	155	8 月 6 日～8 月 10 日	竪穴建物跡・土坑・溝 縄文土器・須恵器・土師器	幡野寛治	三好秀樹 遠藤　武 小淵忠司	本書掲載
21	猿喰東館跡	59045	ＳＡＲ	最知北最知	個人住宅	確認調査	765.91	226	9 月 12 日～9 月 14 日	なし	昆野賢一	三好秀樹 遠藤　武	
22	星谷遺跡	59104	ＨＯＳ	岩月星谷	個人住宅	本発掘調査	313.86	40	9 月 21 日～10 月 2 日	竪穴建物跡・土坑 縄文土器・石器	幡野寛治	三好秀樹 遠藤　武	本書掲載
23	長崎城跡	59064	ＮＳＪ	舘山	個人住宅	確認調査	280.39	50	10 月 4 日	なし	昆野賢一	三好秀樹 遠藤　武	
24	刈米館跡	59069	ＫＡＲ	蔵底	中小企業等	確認調査	656.34	50	10 月 9 日	なし	鈴木實夫	三好秀樹 遠藤　武	
25	猿喰東館跡	59045	ＳＡＲ	最知北最知	個人住宅	確認調査	1,161.82	184	10 月 10 日	なし	鈴木實夫	三好秀樹 遠藤　武	
26	相馬館跡	59046	ＳＯＭ	岩月台ノ沢	個人住宅	確認調査	500.00	50	10 月 11 日～10 月 12 日	なし	鈴木實夫	三好秀樹 遠藤　武	
27	磯草貝塚	59001	ＩＳＯ	磯草	個人住宅	確認調査	719.75	60	10 月 16 日～11 月 28 日	貝層・縄文土器・石器	幡野寛治 鈴木實夫	山中信宏 三好秀樹 遠藤　武	本書掲載
28	磯草貝塚	59001	ＩＳＯ	磯草	個人住宅	本発掘調査	719.75	24	10 月 17 日～10 月 25 日	貝層・縄文土器・土製品・石器・石製品・自然遺物	幡野寛治 昆野賢一	山中信宏 三好秀樹 遠藤　武	本書掲載
29	平貝遺跡	62044	ＨＩＲ	本吉町平貝	個人住宅	確認調査	633.00	150	10 月 17 日～10 月 22 日	ピット・溝・縄文土器 土師器・石器	鈴木實夫 昆野賢一		
30	最知中館跡	59041	ＳＡＮ	最知南最知	個人住宅	確認調査	581.05	90	10 月 31 日～11 月 2 日	なし	鈴木實夫 昆野賢一		
31	堀合館跡	59038	ＨＯＲ	波路上内田	中小企業等	確認調査	809.89	36	11 月 26 日	なし	鈴木實夫		
32	野々下遺跡	62042	ＮＯＮ	本吉町野々下	個人住宅	確認調査	991.76	125	11 月 29 日～11 月 30 日	縄文土器・石器	鈴木實夫		
33	川原崎遺跡	59105	ＫＡＷ	川原崎	個人住宅	確認調査	935.93	80	12 月 5 日	なし	鈴木實夫		
34	載鈎遺跡	63014	ＮＯＳ	唐桑町載鈎	個人住宅	確認調査	973.03	128	12 月 20 日～12 月 21 日	縄文土器・石器	鈴木實夫		
35	蔵内中館跡	62037	ＫＵＲ	本吉町蔵内	個人住宅	確認調査	1,156.00	144	1 月 8 日	なし	鈴木實夫		
36	高谷遺跡	59109	ＴＫＹ	松崎高谷	個人住宅	確認調査	426.08	36	1 月 17 日	なし	鈴木實夫		
37	三島古墳群	62001	ＭＩＳ	本吉町三島	個人住宅	確認調査	561.00	84	2 月 14 日	なし	鈴木實夫 幡野寛治		
38	三島古墳群	62001	ＭＩＳ	本吉町三島	個人住宅	確認調査	534.00	63	2 月 15 日～2 月 19 日	なし	鈴木實夫 幡野寛治		
39	南最知城跡	59043	ＭＳＪ	長磯鳥子沢	個人住宅	確認調査	90.50	52	2 月 21 日	なし	西園勝彦		
40	磯草貝塚	59001	ＩＳＯ	磯草	個人住宅	確認調査	978.59	110	3 月 7 日～3 月 8 日	縄文土器・石器	西園勝彦		本書掲載
41	高谷遺跡	59109	ＴＫＹ	松崎高谷	個人住宅	本発掘調査	141.23	141.23	3 月 21 日～3 月 26 日	縄文土器・石器	鈴木實夫 西園勝彦		本書掲載

第２表　平成 23 年度発掘調査一覧

No.	遺跡名	遺跡番号	遺跡記号	所在地	調査原因	対応	対象面積(㎡)	調査面積(㎡)	調査期間	発見された遺構・遺物	調査担当者
1	高谷遺跡	59109	ＴＫＹ	松崎高谷	個人住宅	確認調査	279.56	17	7 月 19 日	なし	幡野寛治
2	長磯高遺跡	59025	ＮＡＧ	最知南最知	個人住宅	確認調査	271.42	29	10 月 7 日	なし	幡野寛治
3	相馬館跡	59046	ＳＯＭ	岩月台ノ沢	個人住宅	確認調査	1,287.82	47	10 月 13 日～10 月 14 日	なし	幡野寛治
4	八幡館跡	59054	ＫＨＭ	川原崎	中小企業等	確認調査	1,012.44	10	10 月 21 日	なし	幡野寛治
5	猿喰東館跡	59045	ＳＡＲ	最知北最知	個人住宅	確認調査	276.92	69	10 月 25 日	なし	幡野寛治
6	西中才貝塚	59017	ＮＮＳ	西中才	個人住宅	確認調査	264.48	9	12 月 13 日	なし	幡野寛治
7	平館遺跡 平館跡	59027 59055	ＴＡＩ ＴＲＴ	松川前	中小企業等	確認調査	915.04	10	12 月 15 日	なし	幡野寛治
8	前浜貝塚	62040	ＭＡＥ	本吉町前浜	個人住宅	確認調査	691.78	35	1 月 10 日	なし	幡野寛治
9	古館貝塚	63017	ＫＯＤ	唐桑町鮪立	個人住宅	確認調査	1,683.66	20	3 月 26 日	なし	幡野寛治
10	三島古墳群	62001	ＭＩＳ	本吉町三島	個人住宅	確認調査	417.00	10	3 月 27 日	なし	幡野寛治

３．本発掘調査

平成 24 年度に本事業で実施した本発掘調査は５件４遺跡で、全て被災者が行う個人住宅再建に伴う調査である。

個人住宅は調査面積が狭いことから、確認調査で遺構や遺物包含層等が確認され、工事計画上、現地保存が不可能である場合は、そのまま本発掘調査に移行した。調査は、掘削が及ぶ範囲に保護層を

考慮した必要最小限の範囲を対象とした。

本書では、平成 24 年度に本発掘調査・確認調査を実施し、遺構・遺物が出土した 5 遺跡について報告する。

4．整理作業・報告書作成

本書に係る整理作業及び報告書作成作業は、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、平成 26 ～ 29 年度に気仙沼市文化財収納庫及び旧浦島小学校整理作業場で行った。

整理作業及び報告書作成作業の簡略化・効率化を図るため、以下の業務について民間調査組織への業務委託を行った。

・土器の注記及び接合作業（平成 26 年 7 月～ 8 月）

・遺物実測図等作成業務及び写真撮影等業務（平成 26 年 11 月～平成 27 年 2 月）

・埋蔵文化財発掘調査報告書作成業務（平成 27 年 4 月～平成 27 年 6 月・平成 29 年 3 月）

また、磯草貝塚平成 24 年度 1 次調査で出土した自然遺物の同定・分析については独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所へ業務委託した（平成 26 年 12 月～平成 27 年 4 月）。

整理作業・報告書作成の整理担当者は以下のとおりである。

平成 26 年度：森　幸一郎（鹿児島県派遣）

平成 27 年度：永濱功治（鹿児島県派遣）　　西村　力（宮城県支援）

平成 28 年度：平木場秀男（鹿児島県派遣）　　西村　力（宮城県支援）

平成 29 年度：平木場秀男（鹿児島県派遣）　　西村　力・古田和誠（宮城県支援）

第２章　磯草貝塚

遺 跡 名：磯草貝塚（宮城県遺跡地名表登載番号 59001）

所 在 地：気仙沼市磯草

調査原因：24 年度 1 次調査：個人住宅建設

24 年度 2 次調査：個人住宅建設

調査主体：気仙沼市教育委員会

調査協力：宮城県教育委員会

調査期間：1 次：平成 24 年 10 月 17 日～ 10 月 25 日

2 次：平成 25 年 3 月 7 日～ 3 月 8 日

対象面積：1 次：719.75㎡　2 次：978.59㎡

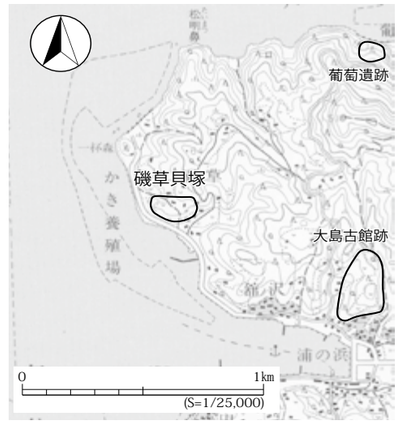
調査面積：1 次：24㎡　　2 次：110㎡

調 査 員：昆野賢一、鈴木實夫、幡野寛治、西園勝彦

山中信弘・三好秀樹・遠藤　武（宮城県支援）

整理協力：山﨑健・松崎哲也

（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）



第２図　磯草貝塚の位置

1．調査に至る経緯

市史跡である磯草貝塚は大島の北西部、気仙沼湾に面する標高 10 ～ 20m 程の南西斜面に立地し、遺跡の北西から中央に向かって谷が入る地形となっている（第 2 図）。縄文時代前期から晩期の貝塚で、西斜面と南斜面に貝層が分布することが知られている（東北歴史資料館 1989）。西斜面貝層は北西から入る谷の谷頭にある貝層で昭和 37 年に鼎が浦高校による調査が行われた。アサリ・レイシなどを主体とする前期末から中期初頭の貝層が確認され、周辺の包含層からは前期初頭から後葉、中期中葉、晩期末の遺物も出土した（宮城県鼎が浦高等学校社会班 1965）。

遺跡範囲の北側と西側の 2 ヵ所で個人住宅建築が行われることから確認調査および一部で本発掘調査を実施した（第 3 図）。北側が平成 24 年度 1 次調査、西側が平成 24 年度 2 次調査箇所である。

2．調査の概要

(1) 平成 24 年度 1 次調査

T1 ～ 7 の調査区を設定し確認調査を実施した。その結果、各調査区で遺物包含層及び貝層を検出し、T5 では遺物包含層の分布の東端を確認した。住宅建築範囲については盛土等による保存が決定したが、擁壁設置のために掘削がおよぶ T3 南西部については掘削深度まで本調査を実施した。この箇所では貝層が良好に残存しており、調査の際には貝層を中心に土壌サンプルを採取し、4mm 及び 1mm メッシュのフルイによる水洗選別を行った。なお、T3 内にサブトレンチ 2 ヵ所を設定し、地

山までの深さ及び堆積状況を確認した。また浄化槽設置箇所は T8 とし工事立会を行った。

遺物は土器・土製品・石器・石製品が整理用コンテナで 27 箱、自然遺物・骨角器が 13 箱出土した。自然遺物については、山﨑健氏・松崎哲也氏に分析を依頼した。土壌サンプル資料は、人工遺物、自然遺物ともにその一部についてのみ分析を行った。

(2) 平成 24 年度 2 次調査

T1 ～ 4 の調査区を設定し確認調査を実施した。その結果、T3・4 で遺物包含層が検出されたが、設計変更により現地保存することとなった。遺物は縄文土器・石器が 3 箱分出土した。

3. 調査成果

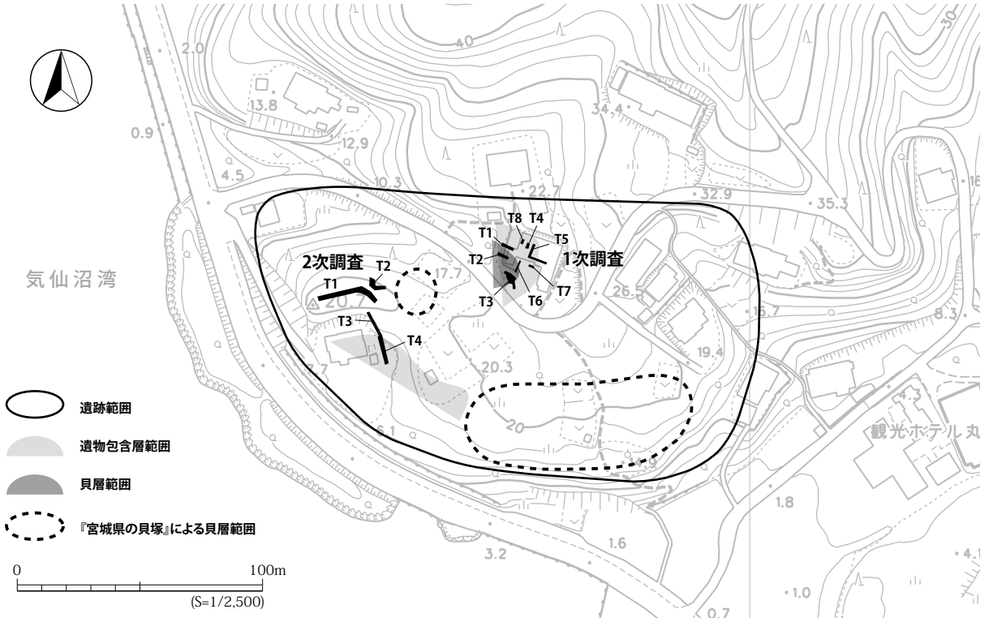
【1 次調査 -T1・2】

調査対象地西側、上方の宅地と下方の畑地の段差部分に設定したトレンチで、盛土・表土下から遺物包含層を検出した（第 4 図）。包含層は黒色を呈し、縄文時代前期後半～中期中葉の遺物を含む（第 16 図）。

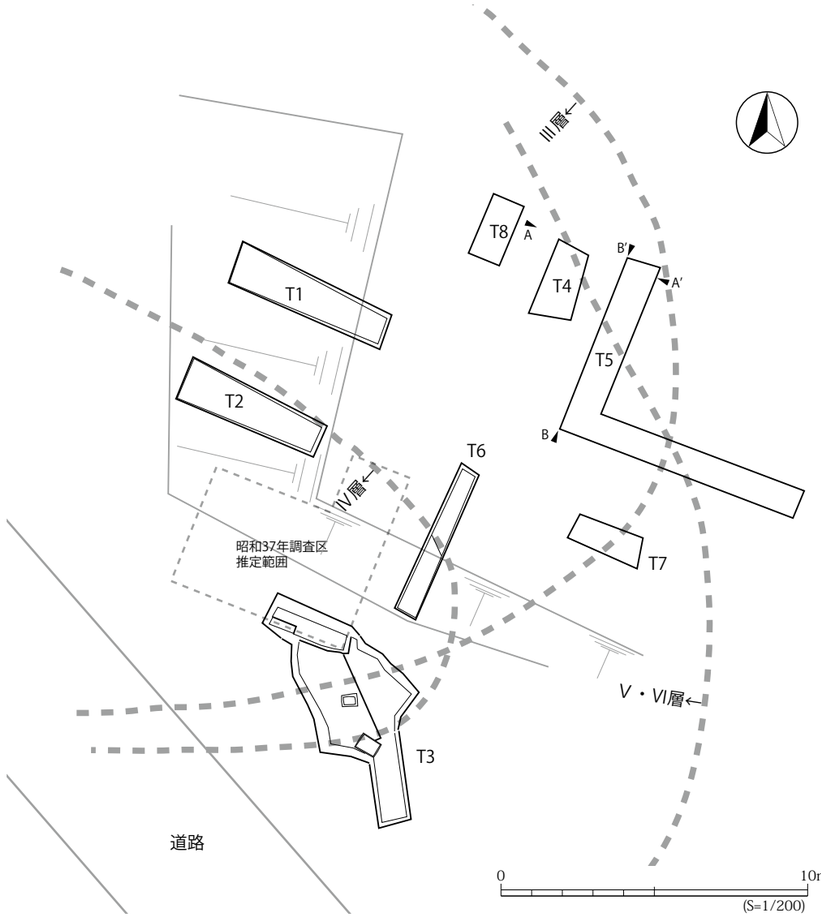
【1 次調査 -T3】（第 6 ～ 15 図）

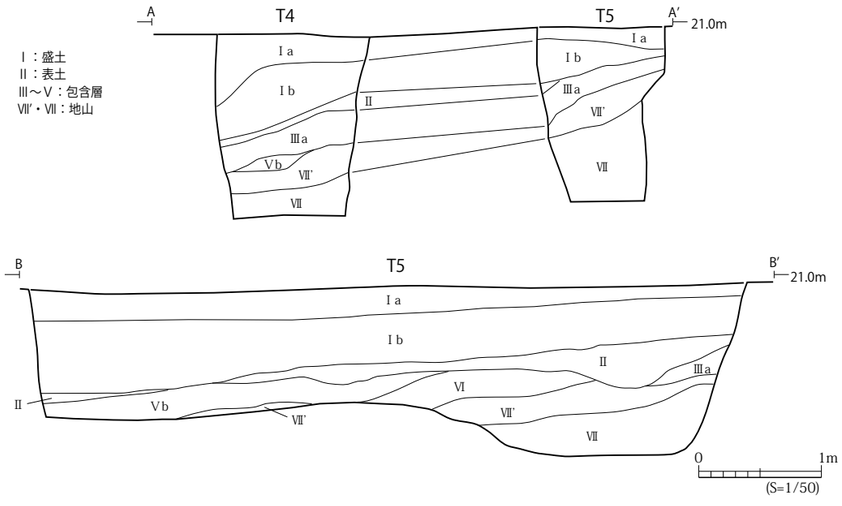
本発掘調査区である。地表面標高は約 19.5m で、本調査対象箇所における面的な掘削は 18.8 ～ 18.6m までおこなった（第 5 図）。旧地形は西に向かって下る。1 ～ 3 層は盛土・表土、4・5 層は包含層の二次堆積ないしその可能性のある層である。本来の堆積状況を保っているのは 7a 層以下で、層相と堆積範囲から大きく 3 つに大別できる。

7a ～ 12 層は主に貝層からなり調査区北側に分布する。縄文時代中期前葉を主体とする遺物を含む

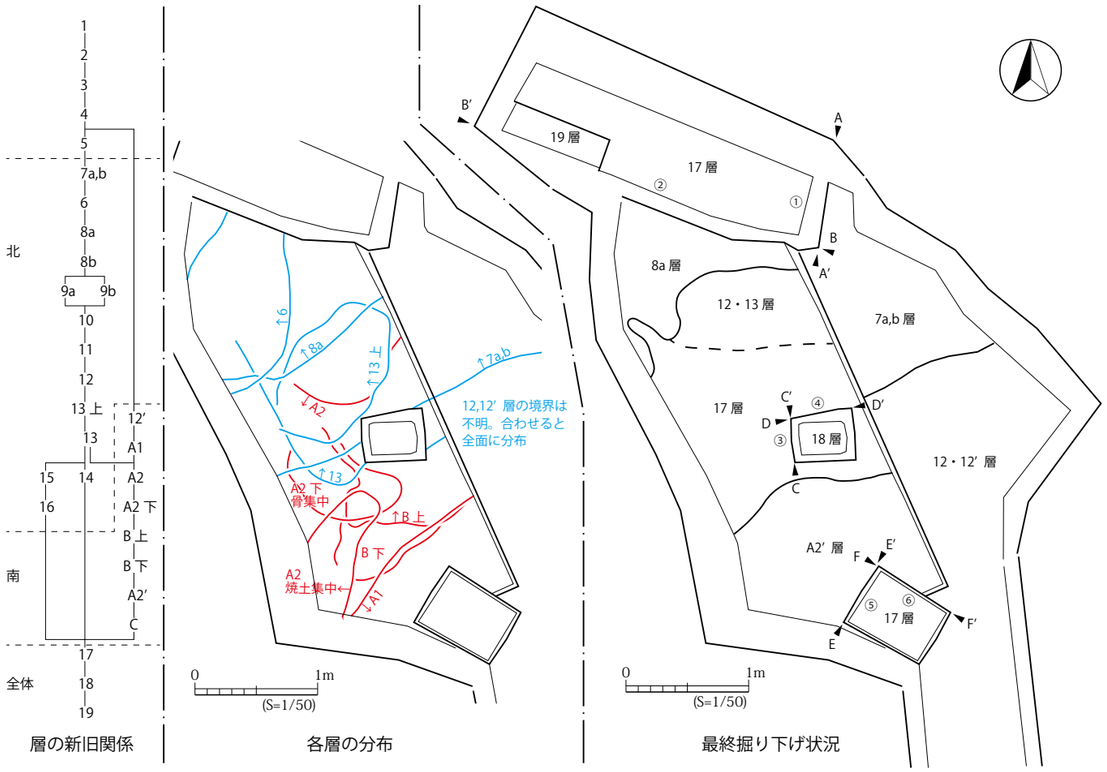


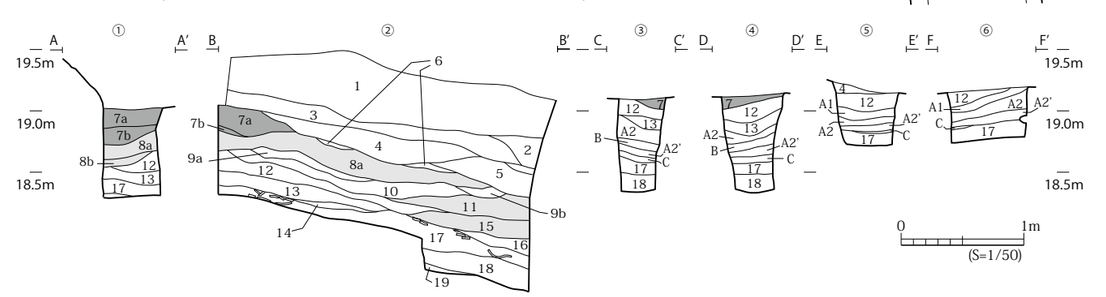
第 3 図　磯草貝塚トレンチ配置図





第 4 図　磯草貝塚包含層分布図・断面図（1）





1 層 : 盛土
2 層 : 撹乱
3 層 : 旧表土
4 層 : 黒褐色土 (10YR2/3) 、それ以前の堆積層の再堆積層
5 層 : 混貝土層、黒褐色土 (10YR3/2) 、破砕貝主体の貝が 30% 程度を占める、炭粒・焼土粒を含む、再堆積の可能性あり
6 層 : 土層、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 、破砕貝・炭粒・焼土粒を極少量含む
7a・a′・b 層 : 純貝層、暗褐色土 (10YR3/3) 、アサリを主体とする貝層で破砕されていない、a′ 層は a 層の末端で土の割合が高く破砕貝を含む、7b 層は炭粒と土が混じる
8a・b 層 : 破砕貝層、黒褐色粘質土 (10YR3/2) 、破砕貝が 70% 程度を占める、炭粒を比較的多く含む、8b 層では破砕貝の含有量がやや少なく、非破砕のものも含む
9 層 : 土層、灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) 、炭粒と破砕貝を少量含む
10 層 : 混貝土層、黒褐色粘質土 (10YR2/3)、破砕貝を主体とする貝類が 40% 程度を占める、炭粒を多く含む、焼土粒を含む
11 層 : 破砕貝層、黒褐色粘質土 (10YR3/2)、アサリを主体とするとみられる破砕貝が 70% 程度を占める、炭粒・非破砕貝を多く含む
12・12′ 層 : 土層、黒褐色粘質土 (10YR3/1) 、魚骨・獣骨・炭粒・焼土粒を多く含む、破砕貝を少量含む、地山ブロックを含む、層内に廃棄単位と考えられる魚獣骨や焼土ブロックの集中がある、12′ 層は粘性がより低く破砕貝をほとんど含まず骨・地山ブロックをより多く含む
13 層 : 混貝土層、暗褐色土 (10YR3/3)、アサリ・アズマニシキを主体とする破砕貝が 30% 程度を占める、炭粒・焼土粒・地山ブロックを含む
14 層 : 土層、にぶい黄褐色粘土 (10YR4/3) 、地山由来とみられる褐色粘土ブロックが主体
15 層 : 破砕貝層、暗褐色粘質土 (10YR3/3)、アサリを主体とするとみられる破砕貝が 70% 程度を占める、炭粒・焼土粒を含む
16 層 : 混貝土層、黒褐色粘質土 (10YR3/2) 、破砕貝を 20% 程度含む、炭粒・焼土粒を多く含む
17 層 : 土層、黒褐色粘質土～粘土 (10YR3/1)、マグロ椎骨など魚骨・獣骨・炭粒・焼土粒を多く含む、破砕貝をごく少量含む、土器片 (大木 6 式) を多量に含み、個体ごとにまとまって出土するものが多い。
18 層 : 旧表土、黒褐色粘質土 (10YR2/2)、小礫・風化礫を含む
19 層 : 地山、褐色粘質土～粘土 (10YR4/6) 、小礫・風化礫を含む
A1 層 : 土層、黒褐色粘質土 (10YR2/3) 炭粒を多量に含む、魚獣骨・焼土粒を多く含む、破砕貝を極少量含む
A2 層 : 土層、灰黄褐色土～粘質土 (10YR4/2) 魚獣骨・焼土粒・炭粒を多く含む、地山ブロックを含む、破砕貝を極少量含む
A2′ 層 : 暗褐色土～粘質土 (10YR3/4) 、魚獣骨・炭粒・焼土粒・地山ブロックを多く含む、破砕貝粒の薄層を多重に含む
B 層 : 暗褐色土～粘質土 (10YR3/3) 、破砕貝が集中する上層と魚獣骨が集中する下層に細分される、炭粒を多く含む、焼土粒・地山ブロックを含む。
C 層 : 黒褐色粘質土 (10YR3/2) 、魚獣骨集中層と破砕貝粒の薄層が互層をなす、炭粒・焼土粒を多く含む、地山粒を含む、褐色や黄褐色土ブロックが集中する箇所がある

第５図　磯草貝塚包含層分布図・断面図（2）

（第 6・7 図）。12′～ C 層は魚骨・獣骨を多く含む土層や破砕貝の薄層などからなり調査区南側に分布する。A2 層中には、廃棄単位と考えられる魚獣骨の集中や、焼土ブロックの集中が認められ、B 下層からはマグロの椎骨が連結したままの状態で出土している（写真図版 2 左上）。縄文時代前期～中期の遺物を含み、前期末～中期初頭を主体とする（第 8 ～ 11 図）。

17 層は魚骨・獣骨を多く含む土層で全体に分布する。土器一個体がまとまって出土する状況が見られた。縄文時代前期中葉～末の遺物を含む（第 12 図）。

T3 北端部では箱型の撹乱が 17 ～ 18 層まで及んでいた。撹乱部の南壁断面は昭和 37 年調査区の南西壁断面と酷似しており、当時の調査区の南角部を検出したものとみられる。

【1 次調査 -T4・5・7・8】

調査対象地北側宅地部分に設定したトレンチで、盛土・表土下から暗褐色を呈する 2 枚の包含層（Ⅲa、Ⅴb）を検出した（第 4 図）。縄文時代前期末～中期中葉の遺物を含む（第 16 図 3 ～ 6・12 ～ 17）。

【1 次調査 -T6】

調査対象地の中央部、宅地と畑地の段差部に設定したトレンチで、T3 の北に隣接する。盛土・表土下ににぶい黄褐色を呈する貝層とそれを挟む上下に、それぞれ暗褐色・褐色を呈する包含層を検出した。縄文時代中期前葉の遺物を含む（第 16 図 7 ～ 11）。

【2 次調査 -T1 ～ 3】

表土直下が地山で遺構・遺物は発見されなかった。

【2 次調査 -T4】

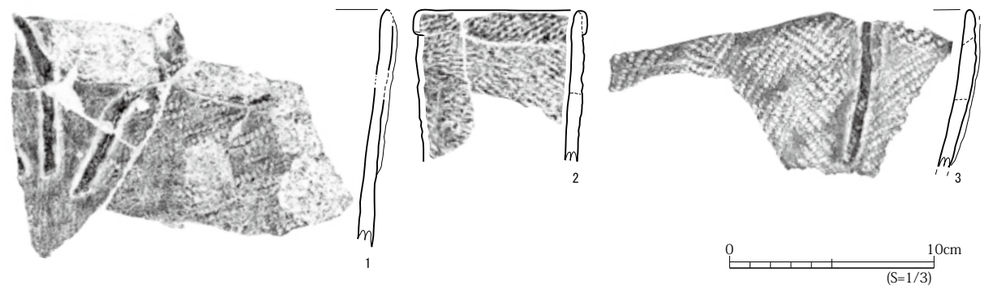
表土下に遺物包含層を検出した。検出面から縄文時代前期後半、中期中葉、晩期の遺物が出土した（第 16 図 18 ～ 23）。

4．まとめ

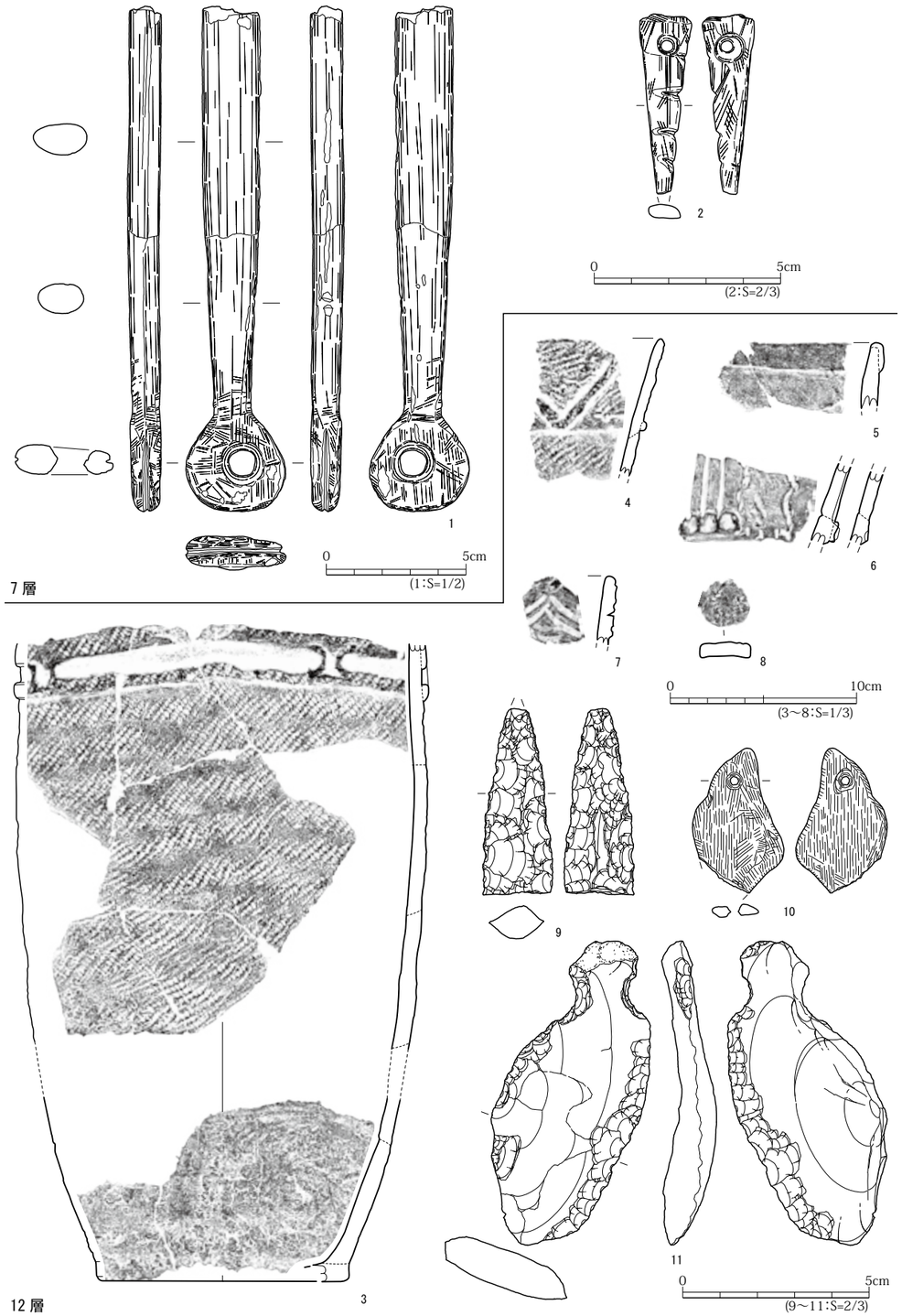
(1) 遺物

①縄文土器

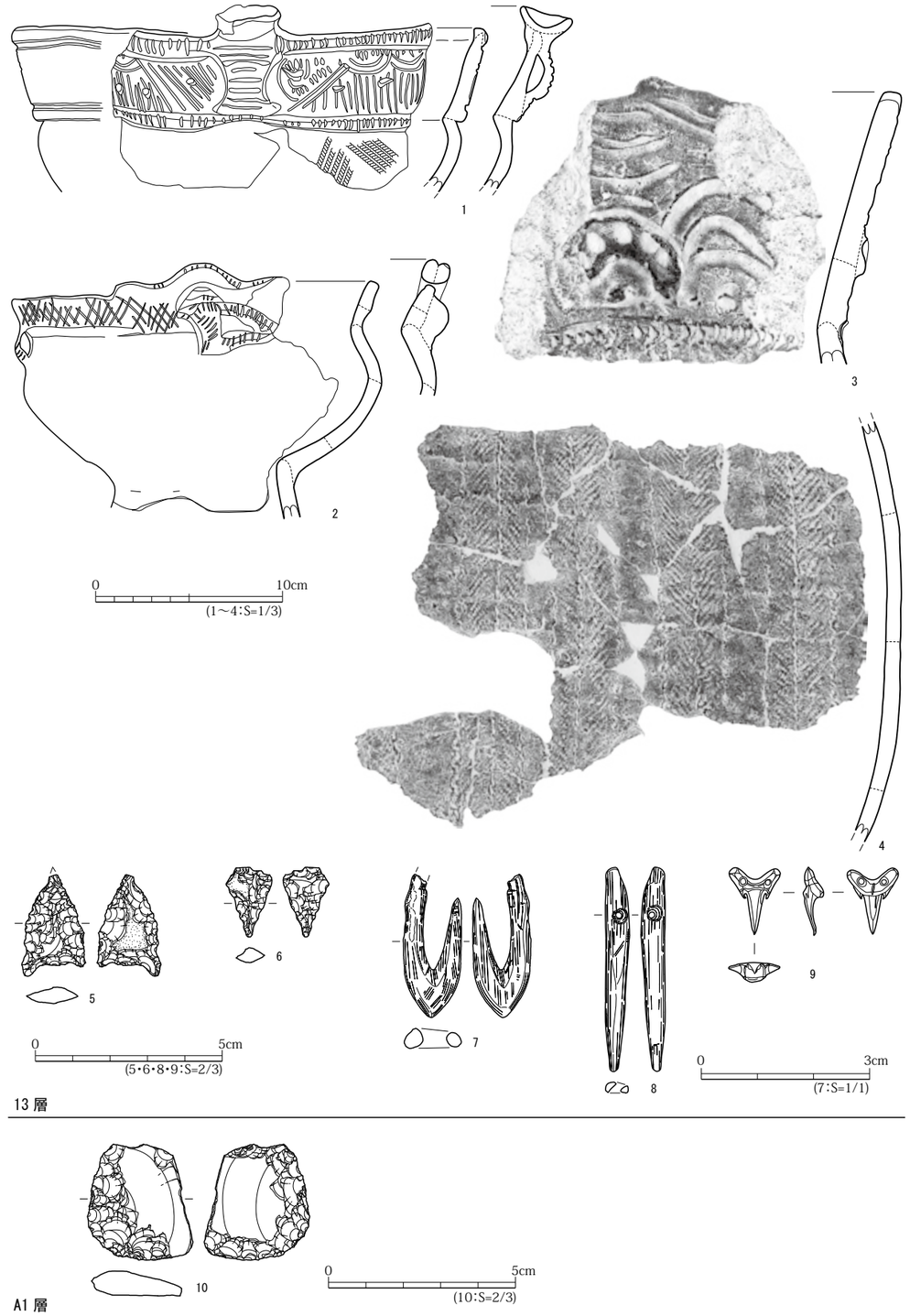
出土した土器の多くは前期～中期の土器で、ほとんどが深鉢である。これらの土器について器形と文様などから大まかな分類を行い、出土状況と年代を示す。



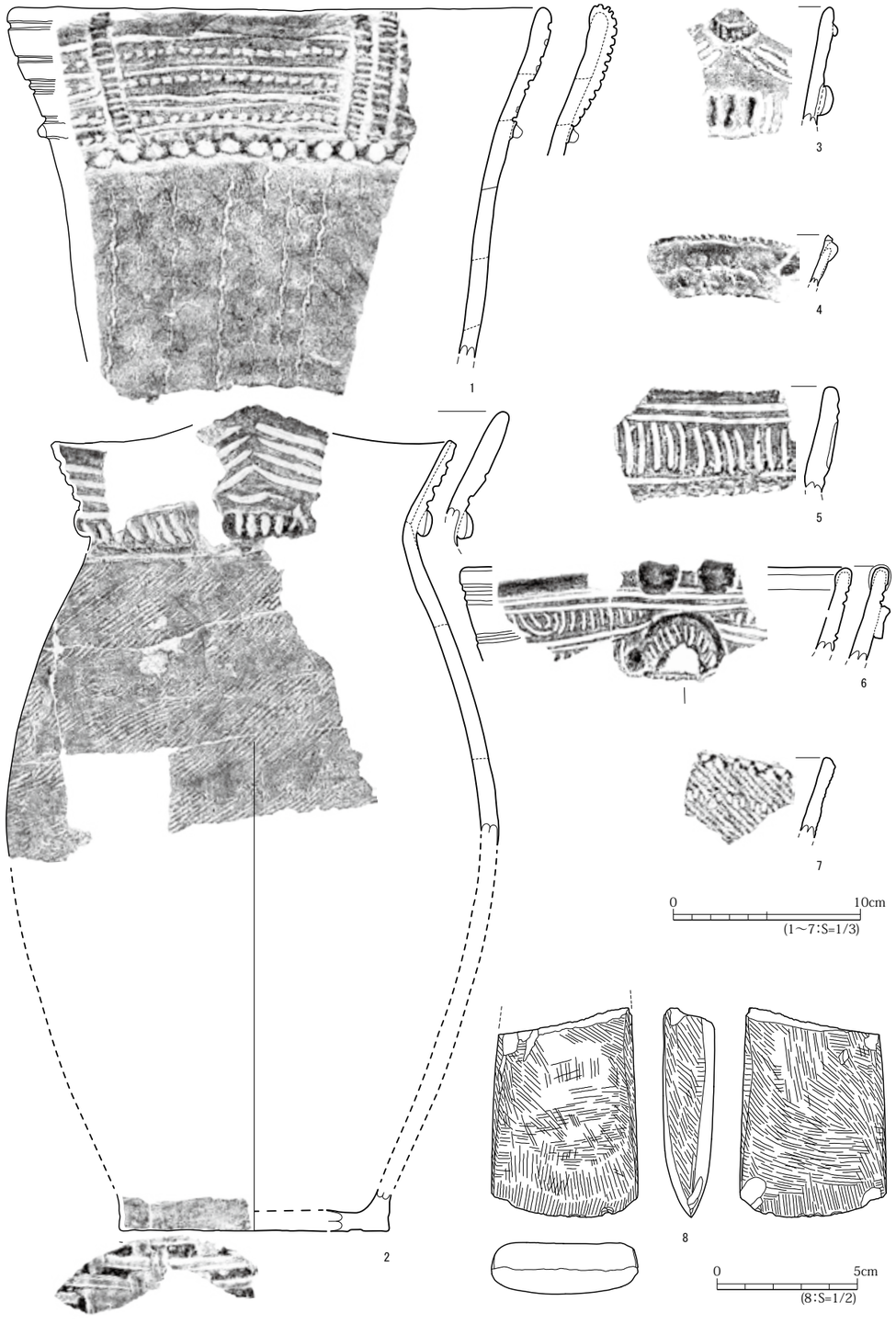
第６図　磯草貝塚 T3 － 7・8 層出土遺物



第７図　磯草貝塚 T3 － 7・12 層出土遺物

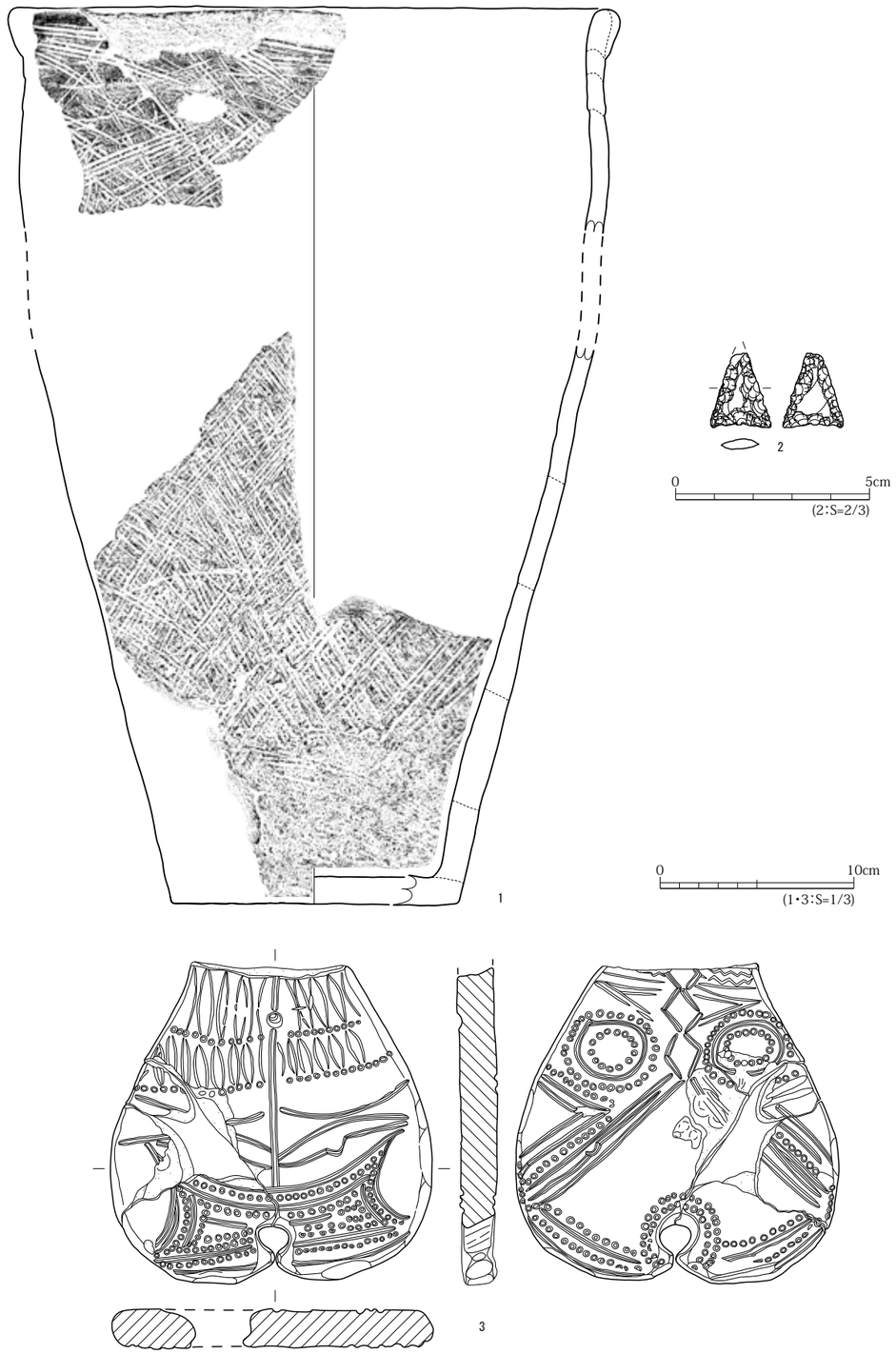


第８図　磯草貝塚 T3 － 13・A1 層出土遺物

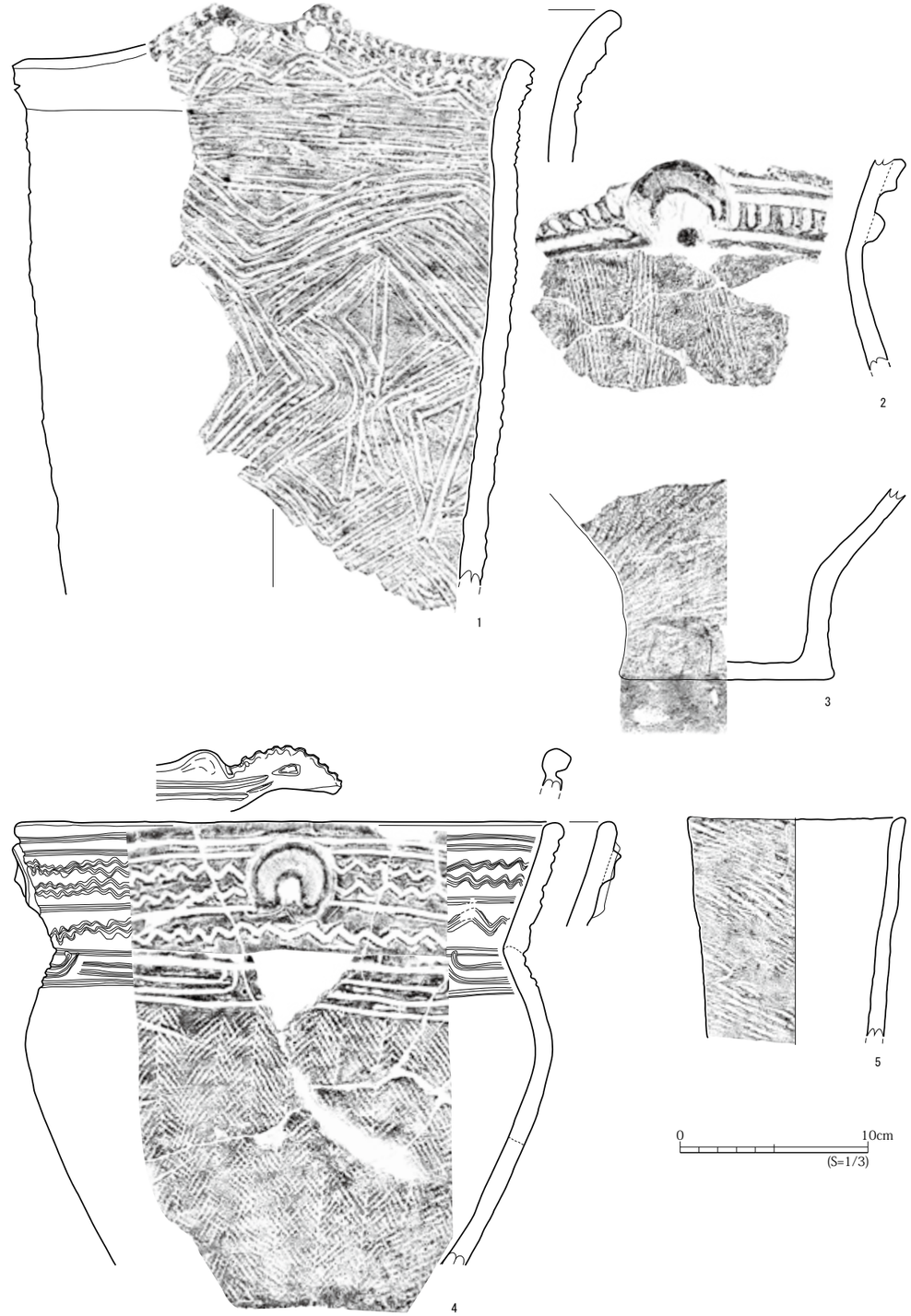


第９図　磯草貝塚 T3 － A2 層出土遺物

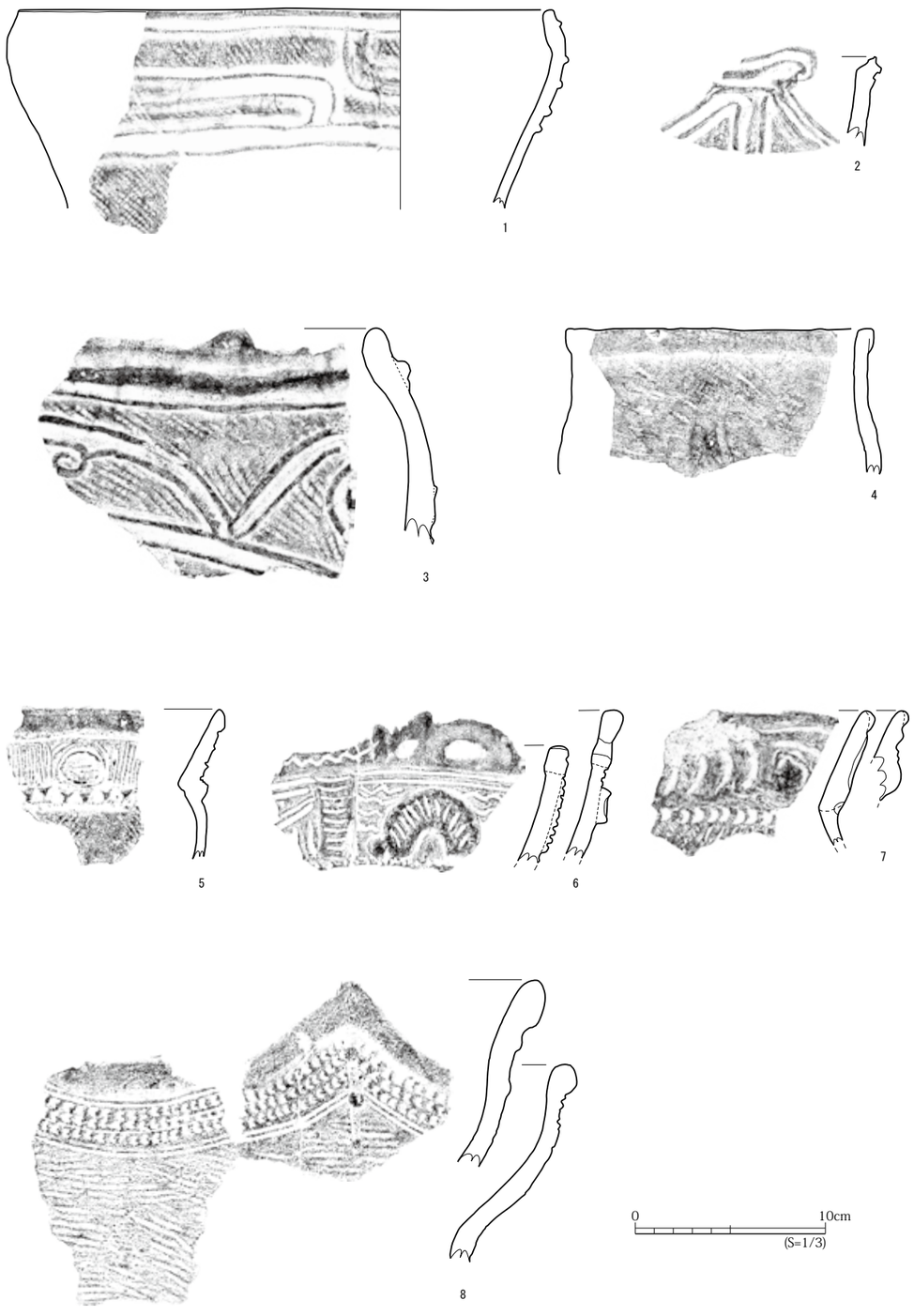
第 10 図　磯草貝塚 T3 － A2’・C 層出土遺物



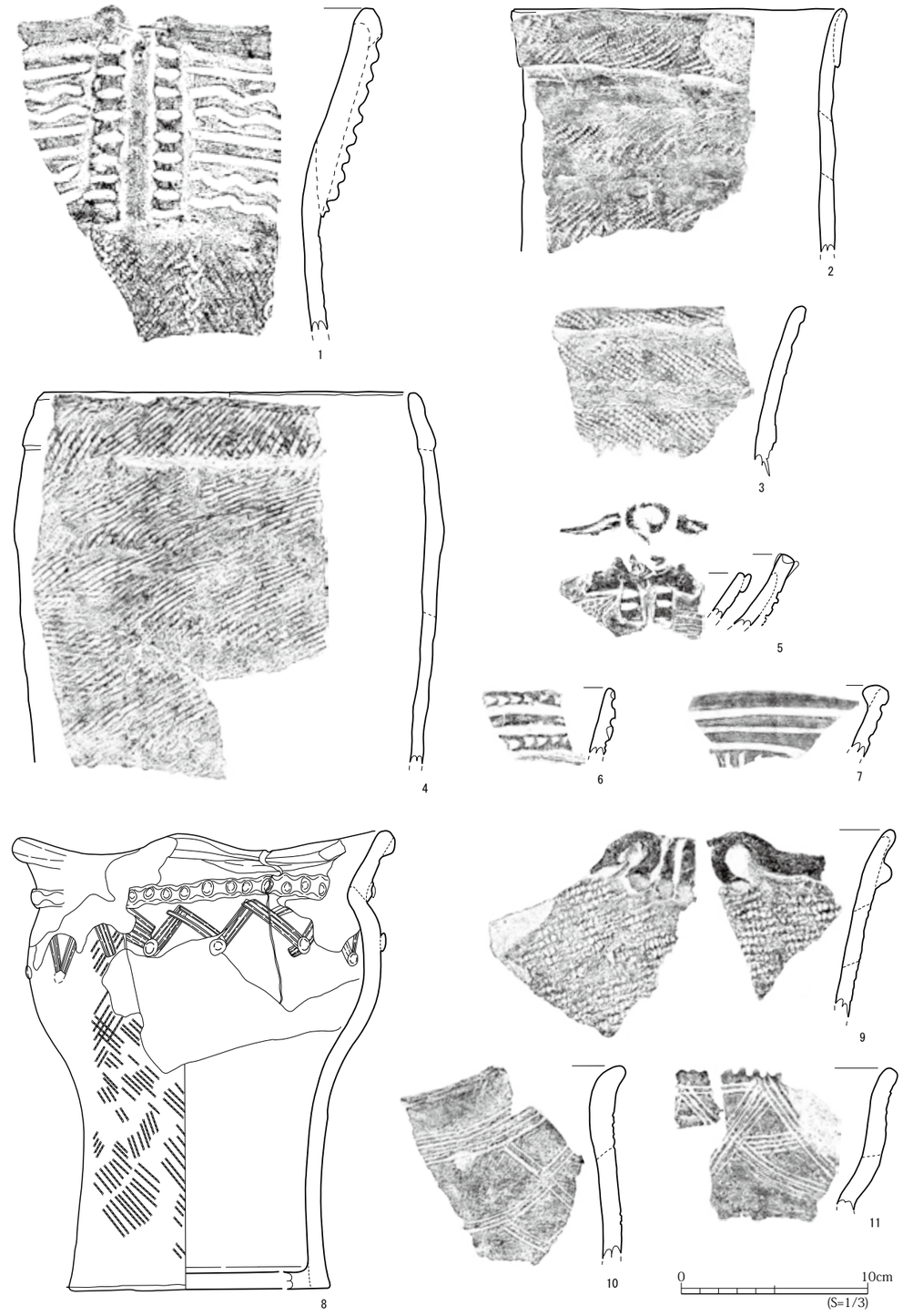
第 11 図　磯草貝塚 T3 － C 層出土遺物



第 12 図　磯草貝塚 T3 － 17 層出土遺物

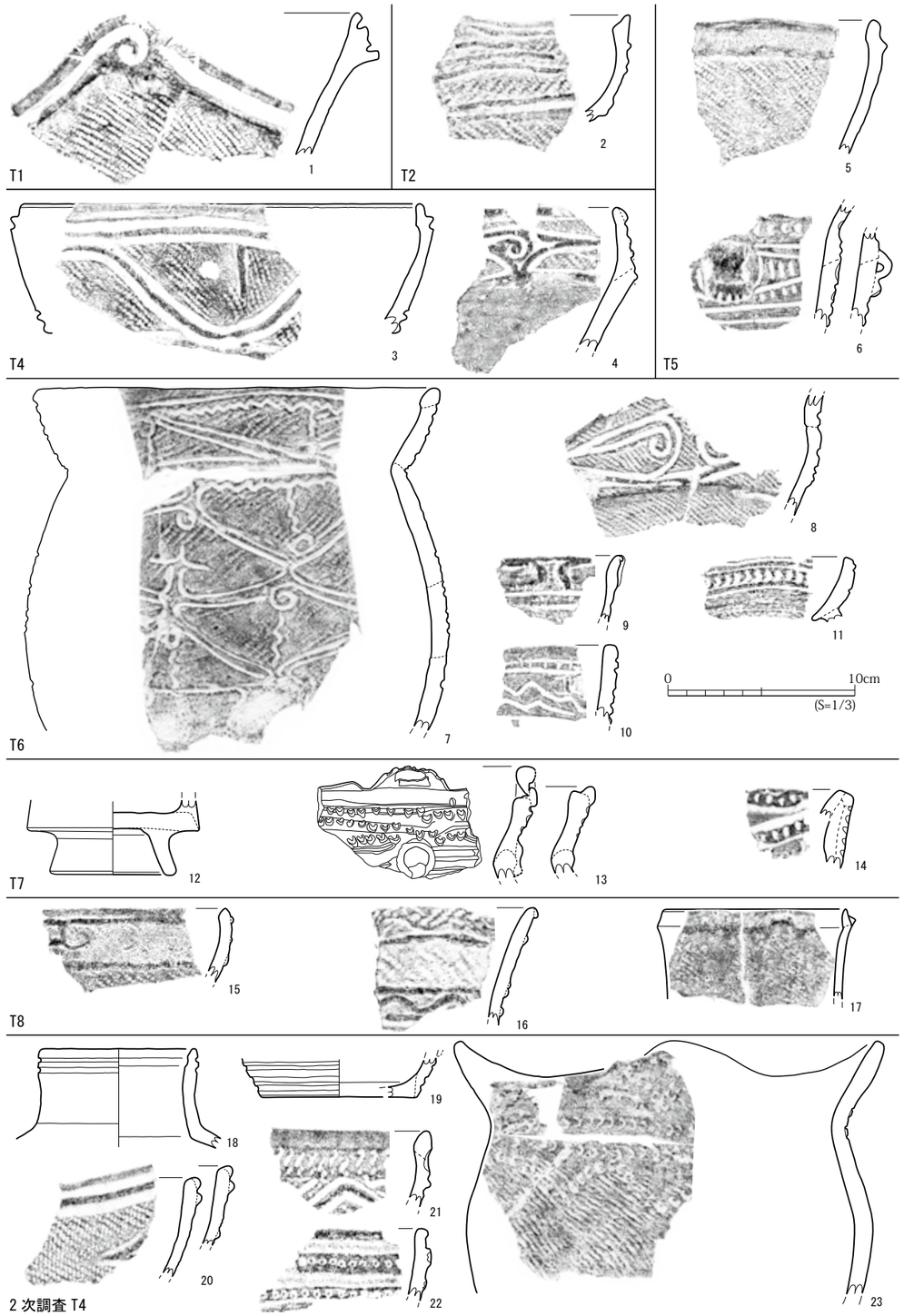


第 13 図　磯草貝塚 T3 － 4 ～ 17 層出土遺物



第 14 図　磯草貝塚 T3 － A1 ～ 17 層出土遺物（1）

第 15 図　磯草貝塚 T3 － A1 ～ 17 層出土遺物（2）



第 16 図　磯草貝塚 T1・2・4 ～ 8、2 次調査出土遺物

A．分類

1 類：胎土に繊維を含むもの。出土量は少なくいずれも小破片である。口縁が垂直ぎみに立ち上がる器形が認められ、地文に結束羽状縄文（第 17 図 1）や斜行縄文が施される。口縁端部に縄圧痕（第 17 図 2）・刺突（第 17 図 3）・押圧（第 17 図 4）が施されるものがある。

2 類：1 点のみ出土した（第 17 図 5）。体部から口縁にかけて大きく開き、口縁大波状の器形で、口頸部に短沈線充填平行沈線による木葉状文、頸部に刺突を伴う隆帯、体部に斜行結節縄文が施される。

3 類：細い粘土紐貼付による文様が施されるもので少量出土した。口縁が外傾ないし外反して開く器形が認められる。以下のように細分される。

3a 類：口縁端部や内面に粘土紐貼付による小波状文が施されものや（第 17 図 6・7）、体部に梯子状、格子状の文様が施されるもの（第 17 図 8）。

3b 類：体部に粘土紐貼付による鋸歯状や弧状の幾何学文様が施されるもので（第 17 図 9・10）、口縁に上下刻みにより鋸歯状を呈する肥厚帯が巡るものもある（第 17 図 11、写真図版 8-10・11）。

4 類：体上部で膨らみ口縁が短く外反する器形で、体部に半裁竹管状工具による格子状（第 17 図 13･14）、連続山形（第 17 図 12）の文様や、半裁竹管による刺突列（第 17 図 15･16）、撚糸文（第 17 図 14・17）が施されるもの。

5 類：頸部で括れ、外傾する口縁部に幅広の沈線文・刺突・盲孔などが施されるもの。以下のように細分される。

5a 類:肥厚した狭い口縁部に幅広の沈線による横位･弧状（第 17 図 18)･円文（第 17 図 19）や盲孔（第 17 図 20）が施される。頸部に半裁竹管による平行沈線や連続刺突が多重に施され、体部に縄文施文ののち半裁竹管による横位・従位・斜位平行沈線文が配され（第 17 図 21・22)、交点にボタン状の貼り付けが施される（第 17 図 23)。

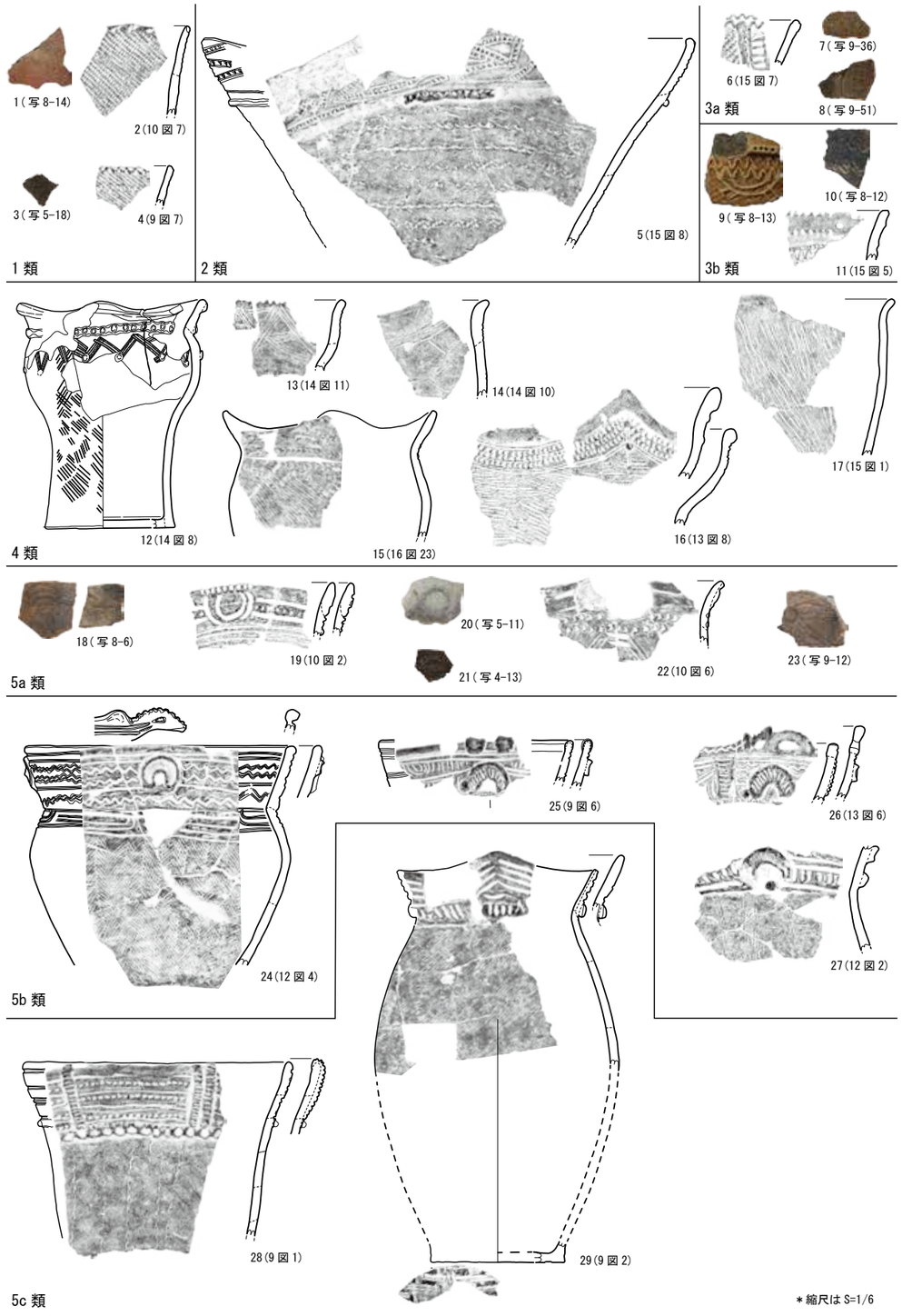
5b 類：5a 類よりも広い口縁部を口縁に沿う及び斜行する沈線で区画し、間に縦位（第 17 図 24・25)・鋸歯状（第 17 図 24・26）の沈線文が施されるもの。馬蹄形や玉状の貼付文（第 17 図 27）により全周を 4 単位に区画する（第 17 図 24)。4 単位の大波状縁と平縁があり、端部が丸く肥厚するものもある（第 17 図 24・25)。

5c 類：5b 類同様の広い口縁部に口縁に沿う沈線が多重に施され、沈線間に縦位の短沈線や刺突が充填されるもの（第 17 図 28・29)。平縁と 4 単位の波状縁があり、縦位や短い横位の貼り付けにより 4 単位に区画される。

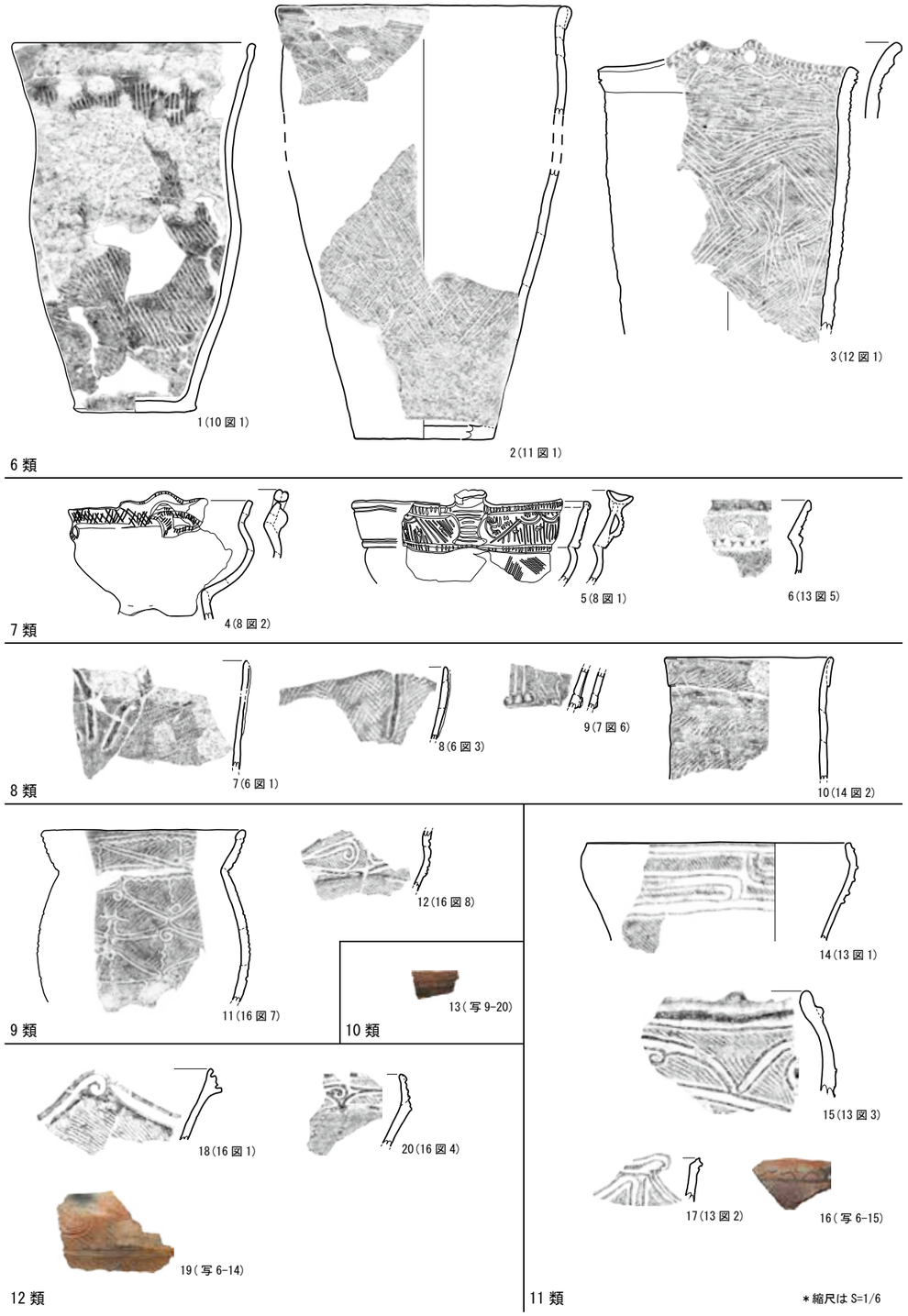
6 類：長胴型で頸部が垂直ないしやや外傾、口縁部が外傾する器形で、体部全体に半裁竹管や櫛歯状に見える半裁竹管による沈線文が（器面調整的に）施されるもの（第 18 図 1 ～ 3)。

7 類：体部は球胴状で頸部で括れ段をもち、口縁部が外傾する器形で、口縁部に細沈線による文様が施されるもの（第 18 図 4 ～ 6)。口縁突起や橋状突起で 4 単位に区画する。

8 類：体上部で屈曲して口縁部が開くか体部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に立ち上がる器形で、多くで折返し口縁の形状を呈するもの。口縁部文様帯に縦位・斜位の粘土紐貼付文（第 18 図 7・8）や結節縄文（第 18 図 9)、縦位の羽状縄文（第 18 図 8）が施されるもの、縄文を帯



第 17 図　磯草貝塚出土土器分類図（1）



第 18 図　磯草貝塚出土土器分類図（2）

状に施すもの（第 18 図 10）などがある。

9 類：頸部で括れ口縁が内湾しながら開く器形で、口縁内面に稜を持ち、沈線による横位・弧状・渦巻状・棘状の文様が施されるもの（第 18 図 11・12）。

10 類：口縁部に横位の押圧縄文が施されるもの（第 18 図 13）。

11 類：口縁が内湾する器形で、口縁部文様帯を中心に粘土紐貼付による横位・弧状・クランク状の文様が配されるもの（第 18 図 14・15）。2 本 1 組で施される場合が多い。口縁端部には波状（第 18 図 16）・横 S 字粘土紐貼付文が施される（第 18 図 17）。

12 類：口縁部が外傾し、端部が肥厚する器形や口縁が強く内湾する器形で、主に隆沈線による弧状・渦巻などの文様が施されるもの（第 18 図 18 ～ 20）。

B. 出土状況と年代

各類型の出土状況と年代について述べる。なお、1 ～ 8 類は 1 次調査 T3 から主体的に出土し、他の調査区からの出土は少量であることから、T3 での状況のみを記す。第 3 表に各類型の各層における出土状況を示す。

【1 ～ 3a 類】

少量が層位的まとまりを持たずに出土している。1 類は柴田町上川名貝塚（加藤 1951）・名取市宇賀崎貝塚（小井川・阿部 1980）に類例があり、前期初頭の上川名Ⅱ式に位置付けられる。2 類は類例に乏しいが、諸磯 a 式に類似した木葉状文が施されること、登米市糠塚貝塚（興野 1968）に類似するものが認められることから前期中葉の大木 3 式に位置付けられると推定される。3a 類は七ヶ浜町大木囲貝塚（八巻 1979）などに類例があり前期後葉大木 4 式に位置付けられる。

【3b・4 類】

3b・4 類は細分せずに深掘りを行った際の 12 ～ 18 層相当の資料中に多く含まれ、4 類については残存率の高い個体も存在する。これらは糠塚貝塚（興野 1969）・栗原市嘉倉貝塚（宮城県教育委員会 2003）などに類例があり大木 5 式に位置付けられる。大木 5 式は前半の 5a 式と後半の 5b 式とに細分されて（興野 1970）おり、3b・4 類の多くは 5b 式に相当する。また、4 類は 5b 式中の半裁竹管による文様が施される一群に相当するもので、県内の他遺跡と比べこれらの比率が高いことが指摘できる。

【5a 類】

5a 類は A1 層以下を中心に一定量出土しているが、いずれも小破片である。涌谷町長根貝塚（藤沼ほか 1969）・七ヶ宿町小梁川遺跡（宮城県教育委員会 1986）・嘉倉貝塚（前掲）などに類例があり前期末葉の大木 6 式に位置付けられる。

【5b・6 類】

5b 類は 17 層以上に認められ 17 層に残存率の高い個体が存在する。6 類は A2’ 層～ 17 層上面からいずれも残存率が高い個体が出土している。

5b 類はおおよそ長根貝塚第二群土器（藤沼ほか前掲）に相当し、大木 6 式の中でも新しい段階に位置付けられる。ただし 5b 類には、上記の土器群に含まれない、横位沈線区画間に鋸歯状の沈線文

第３表　磯草貝塚土器類型出土状況表

地点	区	層位	類型・形式	1 前期初頭	2 大木3	3a 大木4	3b 大木5	3b? 大木5	4 大木5	4? 大木5	小型4? 大木5	5? 大木6	5a 大木6	5a? 大木6	5b 大木6新	5b? 大木6新	6 大木6新	6? 大木6新	5c 大木7a古	5c? 大木7a古	7 大木7a新	8 大木7a新	8? 大木7a新	9 大木7ab	10 大木7b	11 大木8a	11? 大木8a	12 大木8b	晩期	不明 小型	不明	計
1次	T1	包含層							2				1													2		2				7
	T2	包含層																								1						1
	T3	4層		1																												1
		7a層																				1										1
		7a・b層																				2								2		4
		8a層																				1										1
		12層					1	1											1			5	1									10
		13層													1					1	2									1		5
		15層																												1		1
		A1層																											1			1
		A2層		1						1			1	1	2				6													4	16
		A2下層													1																	2
		A2′層		1									1			1	1													1		7
		C層		2			1	2					4				1													1		12
		17層上面															1															1
		17層						1	1		2				2	1																7
		2～13層																				1				1						2
		2～17層							1				1		1						1	1				3		1				9
		7a′～17層																				2										2
		8a～17層											1		1																	2
		（最終掘削面）																														
		12～18層		1	1	1	5		10			1	4						3		1	3								1	31
	T4	2・3層								2			3													1				1	7
	T5南	2層					1		1					1	1					1		1		1		1						8
	T7	2層							1				1		1							1			1					1		6
	T8	包含層				1								1										1		7				2		12
	T6	包含層													1						1	2	1	4	1							10
2次	T4	包含層				1	2		1				1			2	3	1						1			1	4	2		3	16
計				6	1	3	10	4	17	3	2	1	18	3	11	2	3	1	10	2	5	20	2	7	2	15	1	8	2	2	21	182

■は残存率の高い個体が出土していることを示す

が施されるものがあるなど違いも見られる。

6類は類例に乏しいが、岩手県北上市滝ノ沢遺跡（稲野ほか1983）に長胴形で口縁部以下に半裁竹管による粗雑な格子状文が施される例が若干報告されている。層位的出土状況を持たずに大木5～7b式が出土する状況で大木5～6に対応するものとされており、詳しい位置付けは不明である。ここでは、第12図1が17層上面出土で大木6式の頸部・体部の幾何学文様が粗雑化したものと捉えられること、第10図1・第11図1もこれに類すると見ることも可能なことから、5b類同様、大木6式の中でも新しい段階のものと捉えておく。6類は17層からは出土していないことから5b類より新しい可能性がある。

これらは層位的なまとまりを持ち、大木6式の新しい段階の土器群と捉えることができる。

【5c・7・8類】

これらは長根貝塚、川崎町中ノ内A遺跡（宮城県教育委員会1987）、小梁川遺跡（宮城県教育委員会1986）などに類例があり中期初頭の大木7a式に位置付けられる。7a式は小梁川遺跡において2段階の変遷が層位的に確認されている（前掲）。

5c類は、長根貝塚第三群土器（藤沼ほか前掲）・大崎市東要害貝塚第Ⅳ群土器（大崎市教育委員会2008）などに相当し、7類も上記土器群に類似するものがあることから、これらは古段階に位置付けられる。8類は中ノ内A遺跡第Ⅰ群土器（宮城県教育委員会1987）、東要害貝塚第Ⅴ・Ⅵ群土器（大

崎市教育委員会前掲）などに類例があり大木7a式新段階に位置付けられる。

5c類はA2層に集中しており、それより下層からは出土しない。7類は13層から出土し残存率の高い個体が見られる。8類は7a層～12層にかけて出土し12層に集中、それより下層からは出土しない。上記の変遷はこのような層位的出土状況からも認められる。

【9・10類】

1次調査-T5～8、2次調査-T4の包含層から出土しており、T6の包含層中からは9類の残存率の高いものが認められる。

9類は中ノ内A遺跡などに類例があり大木7式に位置付けられる。10類は、小梁川遺跡第Ⅳ群土器・中ノ内A遺跡第Ⅱ群土器（宮城県教育委員会1987）などに類例があり中期前葉の大木7b式に位置付けられる。

【11・12類】

1次調査-T1・2・5・8の包含層、T3の上層を含む層位不明の資料中、2次調査-T4の包含層に認められる。

11類は登米市長者原貝塚1号住居址（阿部・遊佐1978）などに類例があり大木8a式に位置付けられる。12類は大郷町大松沢貝塚（加藤1956）・中ノ内B遺跡（宮城県教育委員会1987）などに類例があり大木8b式に位置付けられる。

②土製品

1次調査-T3から出土した。土偶はC層から1点出土した（第11図3）。大型の板状土偶で胸部より上方が欠損している。平面形は下膨れで表裏に沈線文・平行沈線文・刺突列が施され、表面には正中線や臍を表現したとみられる盲孔が配される。県内における類例は嘉倉貝塚（宮城県教育委員会2003）に認められ、製作技法的にも層位的にも前期末の大木6式期のものと捉えられる。土製円盤は1点出土した（第7図8）。結節縄文が施文された土器の破片を円形に整形したもので、大木7式期のものである。

③石器・石製品

ほとんどが1次調査-T3から出土し、他の調査区からは磨石がT1から1点（写真図版10-19）、T8から3点（写真図版10-20～22）出土したのみである。

T3からは石器はチップを含め44点出土した。そのうち剥片石器類が36点、礫石器類が7点、石製品が1点である。剥片石器類は12層以下のみから出土した。

石鏃：3点出土した（第8図5、第11図2、写真図版10-4）。いずれも凹基無茎で頁岩製である。

石錐：13層から1点出土した（第8図6）。石鏃に似た形態である。

尖頭器:12層から1点出土した（第7図9）。柳葉状を呈し、基部は折損、先端に衝撃剥離が認められる。

石匙：12層から1点出土した（第7図11）。縦型で刃部に摩滅がみられる。

両面加工石器：17層から1点出土した（写真図版10-11）。石篦の基部側の折損品とみられる。

不定形石器：A1層から1点出土した（第8図10）。剥片の2辺にスクレイパー状の刃部をもつものである。

磨製石斧：A2 層から 1 点出土した（第 9 図 8）。長方形を呈し基部側が折損している。

磨石：円礫を利用したものは 7a・b 層から 3 点出土した（写真図版 10-16 ～ 18）。いずれも両面に磨面をもつものである。四角柱状で片面に磨面をもつものが 12 ～ 18 層相当から 1 点出土した。

垂飾品：12 層から 1 点出土した（第 7 図 10）。扁平な礫の一端に穿孔したものである。

④骨角器

1 次調査 -T3 の 13 上層より上の層から 5 点出土した。棒状骨製品（第 7 図 1）は、クジラ骨製で端部に環状の装飾が付くもので、骨刀の柄部分と推定される。釣針・骨針は 1 点ずつ出土した（第 8 図 7・8）。垂飾品は鹿角製のもの（第 7 図 2）と小型のネズミザメ科歯製のもの（第 8 図 9）が 1 点ずつ出土した。

(2) 貝層・遺物包含層について

各調査区における層の検出状況と遺物の出土状況から、包含層の時期を検討する。

〔1 次調査 -T1・2〕大木 8a・b 式の土器が出土しており、この時期と考えられる。

〔1 次調査 -T3〕出土土器の検討結果から、主たる貝層を含む 7a ～ 12 層が大木 7a 式新段階、一部貝層を含む 13 ～ A2 下層が大木 7a 式古段階、A2' ～ 17 層が大木 6 式新段階の時期と考えられる。

〔1 次調査 -T4・5・7・8〕分層して取り上げた遺物はないが、大木 7a 式古段階の土器がほとんどなく、大木 6 式以前と大木 7a 式以降の遺物が主体となり、T8 では大木 8a 式が多く出土している。このことから上下の層が各々の時期に相当するとみられ、上層が大木 8a 式期、下層が大木 6 式期以前の層と考えられる。

〔1 次調査 -T6〕分層して取り上げた遺物はないが、大木 7a ～ 7b 式の土器が出土し、大木 7a ないし 7b 式と見られるものが多いことから、貝層は T3 の貝層に相当し、貝層上部の包含層は大木 7a ～ b 式期と考えられる。

1 次調査対象地区における層の対応関係を第 4 表、各層の分布範囲を第 4 図に示す。Ⅰ～Ⅶ層に大別できる。Ⅰ層は盛土で宅地部分に分布、Ⅱ層は旧耕作土や表土で広い範囲に分布し、この地区が本来は北東から南西に下る緩斜面であったことがわかる。Ⅲ層は T3 の貝層より新しい包含層で中期中葉に形成され、北寄りの広い範囲に分布する。T3 の 4・5 層はこれが再堆積したものと考えられる。Ⅳ層は純貝層を含む貝層を主体とする層で中期前葉に形成され、地区の西寄りの限定的な範囲に分布する。当時の谷頭の低くなった場所に貝を集中的に廃棄することにより形成されたと考えられる。Ⅴ層は T3 においては破砕貝の薄層や魚骨・獣骨を多く含む層からなる層群、これ以外の調査区では土層となる層である。前期末に形成され、残存率の高い土器を多く含む。Ⅵ層は前期後葉の表土ないしそれ以前の遺物包含層で、地区の広い範囲に分布する。Ⅶ層は地山である。

T3 ではⅣ・Ⅴ層が細やかな単位で堆積している。様相の異なる貝層や、獣骨・魚骨層、焼土ブロックの集中などが認識でき、個体でまとまった土器、連結したマグロの椎骨などが出土し、当時の廃棄活動がよく保存されている。今回の調査ではごく狭い面積の調査ながら、土器の時期的変遷がよく捉えられており、本遺跡では、土器・石器のほか土偶や多種類の骨角器など多様な遺物が層位を保って埋存していることが確認された。

第 4 表　磯草貝塚トレンチ層序対応表

	区分	時期	土質	T1	T2	T4	T5 西	T5 南	T7	T6	T3	昭和 37 年調査
盛土 (地山由来)	Ⅰa	現代		+	+	1 層	1 層	1 層	+	1 層	1 層	
盛土 (耕作土由来)	Ⅰb	現代		-	-	1 層	1 層	1 層	+	-	-	
撹乱 (旧調査区)	Ⅰc	現代		-	-	-	-	-	-	-	2 層	
表土 / 耕作土	Ⅱ	現代		+	+	-	-	+	+	-	3 層	
包含層	Ⅲa	大木 8a ～ b	暗褐色シルト	包含層	包含層	2 層	2 層	2 層	-	-	4 層？(再堆積)	
包含層 / 混貝土層	Ⅲb	大木 7a ～ b	暗褐色粘土質シルト	?	?	-	-	-	2 層	2 層	5 層？(再堆積)	第一・二貝層
貝層	Ⅳb	大木 7a	暗褐色～黒褐色 , シルト～粘土質シルト	?	?	-	-	-	-	3 層	7 ～ 12 層	第三貝層
破砕貝 + 骨層	Ⅴa	大木 7a 古	暗褐色～黒褐色 , シルト～粘土質シルト	?	?	-	-	-	-	-	13 ～ A2 層	第三 / 四貝層
包含層 / 破砕貝 + 骨層	Ⅴb	大木 6 新	暗褐色～黒褐色 , シルト～粘土質シルト	?	?	3 層	3 層	3 層	?	4 層	A2' ～ 17 層	第四貝層
旧表土	Ⅵ	前期初頭～大木 6?	黒褐色 , 粘土質シルト	?	?	-	-	?	?	?	18 層	
漸移層	Ⅶ'			?	?	+	+	?	?	?	19 層	
地山	Ⅶ		褐色粘質シルト～粘土	?	?	+	+	+	?	?	19 層	

第 5 表　磯草貝塚出土縄文土器観察表（図示資料）

遺物図版		写真図版	調査区	層位	器種	型式	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特　　徴
6	1	3-1	T3	7a・b 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	折返し口縁形状，口縁に段状の突起・突起部に下垂 or 斜行する粘土紐貼付文，突起部以外の口縁部付近に LR 横回転
	2	3-2	T3	7a 層	深鉢	大木 7a	8.4	—	—	折返し口縁形状 , 縄文 : 無節 L 横回転口縁端部まで
	3	3-6	T3	8a 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	波状口縁 , 波頂部から垂下する粘土紐貼付文 , 縄文 :LR の横回転と縦回転による縦縞表現 , 平坦化した折返し口縁形状
7	3	3-7	T3	12 層	深鉢	大木 7a?	—	13.6	—	縄文 :LR 横回転，頸部に「)(」状の隆帯貼付文 (4 単位 ?)
	4	3-8	T3	12 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	頸部に段，縄文 : 結節 LR 横回転，V 字状粘土紐貼付文
	5	3-9	T3	12 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	折返し口縁形状，無文
	6	3-10	T3	12 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	口縁部文様帯に縦位平行沈線文，下端に貼付文・結節 L 縦回転，頸部に刻み・段
	7	3-11	T3	12 層	深鉢	大木 7a 古	—	—	—	波状口縁，波頂部に粘土紐貼付文，口縁部文様帯に口縁に沿う平行沈線文・充填弧状沈線文
8	1	3-18	T3	13 層	深鉢	大木 7a 古	25.4	—	—	口縁部内面に弱い段，口縁部にラッパ状突起と下部に横位沈線付き橋状把手，口縁部文様帯に平行沈線による弧状・斜行文・縦位沈線充填，盲孔，頸部に段，体部に結節 LR 縦回転
	2	3-19	T3	13 層	深鉢	大木 7a 古	19.0	—	—	口縁部肥厚・格子状細沈線文・半環状突起，貫通しない橋状把手，体部無文
	3	3-20	T3	13 層	深鉢	大木 6 新	—	—	—	波状口縁，口縁部文様帯に平行沈線文，指頭圧痕を伴う馬蹄形貼付文，頸部に刺突列
	4	3-17	T3	13 層	深鉢	大木 7a 古？	—	—	—	頸部に横位沈線文，体部に縄文 : 結節 LR+RL 縦回転
9	1	4-1	T3	A2 層	深鉢	大木 7a 古	29.4	—	—	口縁部文様帯に刻みを伴う縦位隆帯 (6 単位？正面と背面が 2 本一対か)・平行沈線間に刺突列，頸部に指頭圧痕を伴う隆帯，体部に 3 本 1 単位の結節縄文縦回転，取上 No.2
	2	4-4	T3	A2 層	深鉢	大木 7a 古	23.0	12.4	—	波状口縁 (4 単位 ?)，口縁部文様帯に口縁に沿う平行沈線文・斜行沈線充填，波頂部下頸部に刻みを伴う貼付文，頸部に区画沈線，体部縄文 :L 横回転，取上 No.1
	3	4-2	T3	A2 層	深鉢	大木 7a 古	—	—	—	波状口縁・波頂部に刻みを伴う帯状貼付文，口縁部文様帯に口縁に沿う平行沈線文・波頂部下に貼付文・弧状沈線充填
	4	4-3	T3	A2 層	小型深鉢	?	—	—	—	口縁部肥厚・端部に刻み・外面から内面にかけて隆帯貼付 ,
	5	4-6	T3	A2 下層	深鉢	大木 6 新	—	—	—	平行沈線文・「)(」状沈線充填，頸部に刺突列
	6	4-5	T3	A2 層	深鉢	大木 6 新	23.6	—	—	口縁端部玉縁状 2 本一対の隆帯貼付，口縁部文様帯に平行沈線文・弧状沈線充填・短沈線充填馬蹄形貼付文・玉状貼付文 ,
	7	4-7	T3	A2 層	深鉢	前期初頭	—	—	—	繊維含む，口縁端部外側に上下交互押圧，結束縄文 (RL 前段多条横回転)
10	1	4-19	T3	A2' 層	深鉢	大木 6 新	26.5	13.2	40.5	口縁端部肥厚 (端部角張る)・上端部に刺突列，体部全体に縦位・斜位半裁竹管文
	2	5-1	T3	A2' 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	頸部括れ口縁外傾，口縁部肥厚，口縁部に円形・横位平行沈線文・刺突列・円文部口縁端部に刻み，頸部に半截竹管による多段の平行沈線
	3	5-2	T3	A2' 層	深鉢	大木 6 新？	—	13.2	—	縄文 :LR ℓ 斜め回転，底面網代痕
	4	5-3	T3	A2' 層	小型深鉢	?	—	—	—	縄文 :R 横回転
	5	5-9	T3	C 層	深鉢	大木 6 新？	23.4	—	—	体中部やや張り頸部括れ口縁外傾，口縁部肥厚，口縁～体下部に L? 横回転，内面にハケ目のような調整痕明瞭，取上 No.5
	6	5-10	T3	C 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	波状口縁 (4 単位 ?), 口縁部肥厚・口縁に沿う沈線，頸部に丸棒状工具による 2 条の刺突列，体部に半裁竹管による横位・斜位・従位平行沈線文，縄文 : RL 縄文？
	7	5-7	T3	C 層	深鉢	前期初頭	—	—	—	繊維含む，口唇に縄圧痕 , 縄文 (RL 横回転)
11	1	5-8	T3	C 層	深鉢	大木 6 新	31.6	14.8	—	体上部僅かに張り口縁短くやや外反，口縁部肥厚，口縁～体下部に半截竹管による不整格子状文，取上 No.3(口縁部 A2' 層)+ 取上 No.5(体部・底部 C 層)
12	1	5-21	T3	17 層上面	深鉢	大木 6 新	—	—	—	波状口縁 , 口縁部やや肥厚 (波頂部は肥厚しない) 口縁端部上面と外面に半截竹管刺突列 , 狭い口縁部に半截竹管による鋸歯状文，頸部に重層する半截竹管文，体部全面に半截竹管による粗雑な幾何学文
	2	5-20	T3	17 層	深鉢	大木 6 新	—	—	—	口縁端部剥落 (玉縁状 ?)，肥厚する狭い口縁部に平行沈線・短沈線充填・馬蹄形状貼付・玉状貼付，体部に隙間を空けて撚糸文 (L) を縦位帯状に
	3	5-19	T3	17 層	深鉢	大木 6 新？	—	11.4	—	LR 横回転
	4	6-1	T3	17 層	深鉢	大木 6 新	29.2	—	—	口縁端部玉縁状，半円状突起 (正面のみ)，口縁部文様帯に口縁に沿う平行沈線文・鋸歯状沈線文・馬蹄形貼付文 (4 単位)，頸部に平行沈線文，体部に結束 RL+LR 縦回転
	5	6-2	T3	17 層	小型深	大木 5 新？	—	—	—	撚糸文 (R)
13	1	6-7	T3	4 ～ 17 層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁内湾，口縁部文様帯に 2 本一単位の粘土紐貼付によるクランク文，縄文 (RL 横回転)
	2	6-6	T3	4 ～ 17 層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁突起部，横 S 字状文，口縁に沿う沈線，粘土紐による垂下文
	3	6-8	T3	4 ～ 17 層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁内湾，波状口縁，突起，口縁部文様帯に 2 本一単位の粘土紐貼付による弧状・渦巻文，縄文 (RL 横回転)

遺物図版		写真図版	調査区	層位	器種	型式	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特　　徴
13	4	6-9	T3	4 ～ 17 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	折返し口縁形状，口縁端部上面に縄文，縄文 : 撚糸 R?
	5	6-10	T3	4 ～ 17 層	深鉢	大木 7a 古	—	—	—	口縁部肥厚，口縁部文様帯に円文・縦位沈線充填，頭部に三角刻みを施した隆帯，体部に結節 RL 縦回転
	6	6-11	T3	4 ～ 17 層	深鉢	大木 6 新	—	—	—	突起部，口縁端部上面に刻み・外面に鋸歯状沈線・内面に段，口縁部文様帯に平行沈線文・縦位沈線充填・刻みを伴う馬蹄形や縦位隆帯，馬蹄形隆帯の片方の脇に小玉状貼付，頭部に刻み
	7	6-12	T3	4 ～ 17 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	口縁端部肥厚，口縁部文様帯に玉状貼付・弧状沈線充填，頭部に半截竹管による刺突列，体部に半截竹管文，縄文 :LR 横回転？
	8	6-13	T3	4 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	—	—	波状口縁，口縁端部肥厚，口縁に沿う半截竹管による多重刺突列・半截竹管文・ボタン状貼付，体部に L? 斜め回転
14	1	7-1	T3	A1 ～ 17 層？	深鉢	大木 7a	—	—	—	口縁端部肥厚，肥厚部から連続する刻みを伴う縦位隆帯，口縁部文様帯に平行沈線文，LR+RL 結節縄文縦回転
	2	7-2	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 7a	18.0	—	—	折返し口縁形状，口縁部突起 (貼付け) 剥落 ?(向って左端)，LR 横回転を隙間の空けて帯状に施す
	3	7-4	T3	A1 ～ 17 層 (旧調査区部か)	深鉢	大木 7a	—	—	—	折返し口縁形状，口縁部文様帯に RL 横回転を帯状に，頭部に段・刻み
	4	7-3	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 7a?	—	—	—	頭部に区画沈線（折り返し口縁形状 ?），L 横回転
	5	7-5	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 7a 古	—	—	—	突起部 (上面に渦巻文)，折返し口縁形状，刻みのある縦位隆帯，内側に刻みを伴う細い平行沈線文
	6	7-6	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 7a 古	—	—	—	口縁部肥厚，口縁に沿う平行沈線，刺突列
	7	7-7	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 7a 古	—	—	—	口縁端部玉縁状 (内面の張りだし強い)，口縁に沿う平行沈線，縦位沈線充填
	8	7-11	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	20.5	14.2	14.5	口縁部肥厚，狭い口縁，頭部に刺突を伴う隆帯，体上部に半截竹管に近似する工具 (角棒状工具 ?) による鋸歯状文・谷部にボタン状貼付，体上半は撚糸 L を格子状に，体下半は斜行に施す
	9	7-9	T3	A1 ～ 17 層 (旧調査区部か)	深鉢	大木 5	—	—	—	突起部，口縁端部肥厚，突起部に隆帯貼付による文様縄文 :LR 横回転
	10	7-10	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	—	—	体部が膨らみ頸部でくびれ短い口縁部外反，波状口縁，口縁内側やや肥厚，頭部に口縁に沿う半截竹管による平行沈線，体部に半截竹管による山形ないし格子状文
	11	7-12	T3	A1 ～ 17 層 +7a・b 層	深鉢	大木 5	—	—	—	体上部が膨らみ口縁短く外反，口唇部に刻み，口縁～体上部文に半截竹管による幾何学文
15	1	7-13	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	—	—	口縁部短く外反，撚糸文 (r)，写真 22-16 と同一個体か？
	2	7-15	T3	A1 ～ 17 層？	深鉢	大木 5	28.4	—	—	体部がわずかに膨らみ短い口縁部が外反，縄文：横位撚糸文 r
	3	8-1	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	11.6	—	縦位撚糸文 ℓ
	4	7-16	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	12.0	—	網目状に重複する撚糸文
	5	7-14	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	—	—	口縁部肥厚・上下刻み・貫通孔 (この箇所上下刻みなし)，頭部に刺突のある隆帯，折返し粘土紐貼付による鋸歯状文，縄文 : 縄文
	6	7-17	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	15.0	—	太い撚糸文 R
	7	8-2	T3	A1 ～ 17 層 (旧調査区部か)	深鉢	大木 4	—	—	—	口縁端部外側と上面に小波状粘土紐貼付，梯子状粘土紐貼付文，縄文 (LR/Lr 横回転)
	8	8-3	T3	A1 ～ 17 層 (旧調査区部か)	深鉢	大木 3	53.2	—	—	短沈線充填平行沈線による木葉状文 (諸磯 a)，頭部に刺突を伴う隆帯，体部に両端と中間に結節をもつ斜行結節縄文
16	1	8-15	T1	包含層	深鉢	大木 8b	—	—	—	口縁外反して開く，波状口縁，口縁部に沈線による渦巻文，縄文 :RL 横回転
	2	8-16	T1	包含層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁部内湾，波状口縁，粘土紐貼付文，縄文 :LR 横回転
	3	8-17	T2	包含層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁内湾，，隆沈線による波状・横線・垂下文，縄文 :LR 縦回転
	4	8-18	T4	2・3 層	深鉢	大木 8b	—	—	—	頭部外反・口縁屈曲して短く内傾，縄文 :RL 横回転？口縁部 : 隆沈線による渦巻文，頭部 : 無文帯
	5	8-19	T5 南	2 層	深鉢	大木 8a	—	—	—	縄文 :LR 縦回転，口縁に沿う粘土紐貼付，口縁部無文帯・内側に稜
	6	8-20	T5 南	2 層	深鉢	大木 6 新	—	—	—	橋状突起，貼付け文，沈線間に沈線充填，頭部に刺突列
	7	8-22	T6	包含層	深鉢	大木 7a ～ b	19.1	—	—	口縁内側に稜，口縁に沿う沈線，平行沈線による弧状文，鋸歯状・波状渦巻状・菱形沈線文，縄文 :LR 横回転？
	8	8-21	T6	包含層	深鉢	大木 7a ～ b	—	—	—	縄文 (LR 縦回転)，平行沈線による弧状文，渦巻沈線文，口縁内側に稜
	9	8-23	T6	包含層	深鉢	大木 7a ～ b	—	—	—	縄文 (潰れ)，口縁部に隆帯，頭部に平行沈線，口縁内側に稜
	10	8-24	T6	包含層	深鉢	大木 7a 古	—	—	—	内側に刻みを伴う平行沈線文，波状文
	11	8-25	T6	包含層	深鉢	大木 6 新	—	—	—	口縁に沿う沈線文，刺突列 < 頭部に段なし，口縁部内面に稜なし >
	12	8-26	T7	2 層	台付深鉢	?	—	7.2	—	
	13	8-27	T7	2 層	深鉢	大木 6 新	—	—	—	口縁端部肥厚・内面に弱い段，突起端部上面に刻み，口縁部文様帯に半截竹管による多重刺突列，突起下頸部にボタン状貼付文
	14	8-28	T7	2 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	狭い口縁部・刺突のある隆帯，頭部に竹管状工具による円形刺突列
	15	8-29	T8	包含層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁内湾，粘土紐貼付，RL 横回転？
	16	9-1	T8	包含層	深鉢	大木 8a	—	—	—	横位・波状粘土紐貼付 (口縁端部の粘土紐上には縄文)，LR 横回転？
	17	9-2	T8	包含層	小型深鉢	大木 7a	—	—	—	小突起 , 体部無文
	18	9-37	2 次	包含層	壺	大洞 C2 ～ A	—	—	—	口縁端部に平行沈線文、頸部無文，頸部に沈線状の段
	19	9-38	2 次	包含層	深鉢	大洞 C2 ～ A	—	8.4	—	体部下端に平行沈線文
	20	9-39	2 次	包含層	深鉢	大木 8b	—	—	—	口縁内湾，波状口縁，隆沈線，剣先状文，RL 横回転
	21	9-40	2 次	包含層	深鉢	大木 7a ～ b	—	—	—	口縁部内面に稜あり，頸部に凹線→結節縄文 (R) 充填，体部に隆沈線
	22	9-41	2 次	包含層	深鉢	大木 5	—	—	—	竹管状工具による円形刺突列を施した隆帯
	23	9-42	2 次	包含層	深鉢	大木 5	—	—	—	口縁突起 4 単位，頸部に半截竹管による横線とそれに沿う半截竹管による刺突列，口縁突起部と体上部に半截竹管の両端部による山形文，縄文 :L 縦回転？

第 6 表　磯草貝塚出土縄文土器観察表（写真のみ掲載）

写真図版		調査区	層位	器種	型式	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特　　徴
3	3	T3	7a・b 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	折返し口縁形状，縄文 :LR 横回転
	4	T3	7a・b 層	深鉢	?	—	—	—	縄文 : 口縁端部まで RL 横回転
	5	T3	7a・b 層	深鉢	?	—	9.2	—	底面網代痕

写真図版		調査区	層位	器種	型式	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特　　徴
3	12	T3	12 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	折返し口縁形状，口縁部に縦位沈線充填，縄文 : 結束 LR+RL 横回転
	13	T3	12 層	深鉢	大木 5?	—	—	—	口縁端部に横位沈線，横位沈線下に竹管刺突
	14	T3	12 層	深鉢	大木 5	—	—	—	口縁部肥厚・下方からの刻み
	15	T3	12 層	深鉢	大木 5?	—	—	—	口縁端部に刻み，縄文 :LR 横回転
	16	T3	12 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	縄文 : 結節 LR 縦回転
	21	T3	13 層	深鉢	?	—	—	—	口縁部に突起？と刻み，横位押圧縄文 R 撚糸？
	22	T3	15 層	深鉢	?	—	—	—	折返し口縁形状 , 体部ケズリ
	23	T3	A1 層	小型土器	?	—	5.4	—	体部無文 , 底面と体部の繋ぎ目明瞭
4	8	T3	A2 層	深鉢	大木 7a 古	—	—	—	波状口縁，口縁に沿う平行沈線文
	9	T3	A2 層	深鉢	大木 7a 古	—	—	—	波状口縁，口縁部文様帯に口縁に沿う平行沈線文・縦位短沈線充填
	10	T3	A2 層	深鉢	大木 6 新	—	—	—	波状口縁，口縁に沿う平行沈線文・弧状沈線充填
	11	T3	A2 層	深鉢	大木 7a 古	—	—	—	貼付文
	12	T3	A2 層	深鉢	大木 6 古？	—	—	—	波状口縁，口縁部は狭くわずかに肥厚，RL 横回転
	13	T3	A2 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	口縁部肥厚，弧状・斜行沈線文，半裁竹管による刺突列充填 , 頸部に横位半裁竹管文
	14	T3	A2 層	深鉢	大木 5?	—	—	—	波状口縁，口縁端部肥厚，波頂部に盲孔，LR 横回転 (口縁端部にも施文)
	15	T3	A2 層	深鉢	大木 5?	—	—	—	口縁端部に刻み , 無文
	16	T3	A2 層	鉢？	大木 7a?	—	—	—	口縁端部剥落 , 無文
	17	T3	A2 層	鉢？	?	—	—	—	半截竹管文，盲孔のあるボタン状貼付文
	18	T3	A2 下層	深鉢	?	—	—	—	底面網代痕
5	4	T3	A2′ 層	深鉢	?	—	—	—	短く外反する口縁，無文
	5	T3	A2′ 層	深鉢	大木 5?	—	—	—	口縁端部に交互刺突
	6	T3	A2′ 層	深鉢	前期初頭	—	—	—	繊維含む，口縁端部薄く剥落？，縄文 :LR 横回転
	11	T3	C 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	口縁部肥厚，盲孔 (円形凹み) ・幅広い溝状の沈線
	12	T3	C 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	口縁部肥厚，狭い口縁部，斜行平行沈線文，盲孔
	13	T3	C 層	小型深鉢	?	—	—	—	口縁端部角張る , 無文
	14	T3	C 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	半裁竹管による従位・斜位平行沈線文　縄文 : LR
	15	T3	C 層	深鉢	大木 5?	—	—	—	口縁端部に刻み，口縁部やや肥厚 (薄い貼付け，端部角張る)
	16	T3	C 層	深鉢	大木 5?	—	—	—	口縁端部外側に刻み
	17	T3	C 層	深鉢	大木 5	—	—	—	粘土紐貼付による鋸歯状文，縄文 :LR 斜行回転 (粗い縄)
	18	T3	C 層	深鉢	前期初頭	—	—	—	繊維含む，口縁端部に前後爪剥突，縄文 (RL 横回転)
6	3	T3	17 層	深鉢	大木 5?	—	—	—	外面剥落，端部に刻み 中に窓が空く円形装飾が退化し窓が空かなくなりつつあるもの 大木 5 後半？
	4	T3	17 層	深鉢	大木 5	—	—	—	口縁端部丸く肥厚，撚糸文 (L)
	5	T3	17 層	小型深鉢	大木 5 新？	—	—	—	口縁部に突起，撚糸文 (R)
	14	T3	4 ～ 17 層	深鉢	大木 8b	—	—	—	頸部外反・口縁内湾，口縁端部剥落，口縁部文様帯に隆沈線による渦巻文，縄文 (LR 縦回転 ?)
	15	T3	7 ～ 13 層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁内湾，口縁部内面に稜，粘土紐貼付による横位・波状文，縄文 (LR 横回転 ?)
	16	T3	7 ～ 13 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	折返し口縁形状，口縁部に突起，突起部に垂下する短い粘土紐貼付文
	17	T3	7a′ ～ 17 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	大型，口縁大波状，半截竹管の背面を使った平行沈線間半截竹管による刺突列，頸部に段，口縁端部形状四角
	18	T3	7a′ ～ 17 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	底面付近まで結節縄文 (LR 縦回転)
	19	T3	8a ～ 17 層 (最終掘り下げ面)	深鉢	大木 6 新	—	—	—	口縁端部角張る，口縁部文様帯に平行沈線，縦位沈線充填
	20	T3	8a ～ 17 層 (最終掘り下げ面)	深鉢	大木 6 古	—	—	—	半截竹管による平行沈線間に半裁竹管による刻み（横位・斜位），三角形彫去
7	8	T3	A1 ～ 17 層 (旧調査区部か)	深鉢	大木 7a 古	—	—	—	波状口縁，口縁部肥厚し狭い (要チェック)，口縁に沿う平行沈線，頸部に刺突列と沈線
8	4	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	突起部，口縁部肥厚し狭い，縦位沈線，頸部に横沈線
	5	T3	A1 ～ 17 層 (旧調査区部か)	深鉢	大木 6 古	—	—	—	口縁部肥厚し狭い，盲孔・縦位沈線充填
	6	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	狭い口縁部文様帯に重弧沈線文
	7	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 6?	—	—	—	縦位波状平行沈線文，縄文 :LR 横回転？
	8	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	半截竹管による横位波状文・斜行文 , 縄文 :LR 横回転
	9	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	—	—	肩が膨らみ口縁部短く強く外反，口縁端部肥厚，縦位撚糸文 R
	10	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	—	—	口縁部肥厚・上下刻み，頸部に細い粘土紐貼付横線
	11	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	—	—	口縁部肥厚・上下刻み，頸部無文
	12	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	—	—	縄文 (LR? 横回転), 細い折返し粘土紐による鋸歯状文
	13	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	大木 5	—	—	—	刺突を伴う横位隆帯，細い粘土紐による折返し鋸歯状文・弧状文，縄文 (LR?)
	14	T3	A1 ～ 17 層	深鉢	前期初頭	—	—	—	繊維含む，結束羽状縄文 (LR+RL 横回転)
9	3	T1	包含層	深鉢	大木 8b	—	—	—	縄文 : 縄文，口縁部に隆沈線による渦巻文
	4	T1	包含層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁内湾，口縁部に S 字状隆帯，内側に稜
	5	T1	包含層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	半裁竹管による従位・横位平行沈線文　縄文 (LR 縦回転)
	6	T1	包含層	深鉢	大木 5	—	—	—	口縁部肥厚（もしくは口縁外反）, 半裁竹管文 101 と同類か
	7	T1	包含層	深鉢	大木 5	—	—	—	短い口縁外反，撚糸文 (L 縦回転), 口縁部内面に竹管による円形刺突列
	8	T4	2・3 層	深鉢	大木 8a?	—	—	—	口縁内湾しながら開く，口縁部無文，縄文 (摩滅)
	9	T4	2・3 層	深鉢	大木 5?	—	—	—	頸部に斜行刻みのある隆帯
	10	T4	2・3 層	深鉢	大木 5?	—	—	—	半截竹管刺突列，弧状沈線
	11	T4	2・3 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	従位・横位沈線文 (太い)，従位半裁竹管文
	12	T4	2・3 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	縄文 (LR 横回転)，半裁竹管文・ボタン状貼付文
	13	T4	2・3 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	縄文 (不明)，半裁竹管文・ボタン状貼付文
	14	T5 南	2 層	深鉢	大木 7a ～ b	—	—	—	沈線文
	15	T5 南	2 層	深鉢	大木 7a 古？	—	—	—	口縁に沿う平行沈線
	16	T5 南	2 層	深鉢	大木 7a	—	—	—	折返し口縁形状
	17	T5 南	2 層	深鉢	大木 6 古？	—	—	—	斜行沈線 (太い)
	18	T5 南	2 層	深鉢	大木 5	—	—	—	口縁端部に指頭押圧による刻み，撚糸文 (L 縦回転)
	19	T5 南	2 層	深鉢	大木 5	—	—	—	半裁竹管による山形文，縄文 (摩滅)

写真図版		調査区	層位	器種	型式	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特　　徴
9	20	T6	包含層	深鉢	大木 7b	—	—	—	横位押圧縄文 (LR)，口縁部内面に稜
	21	T6	包含層	深鉢	大木 7a ～ b	—	—	—	平行沈線文，口縁部内面に稜あり
	22	T6	包含層	深鉢	大木 7a	—	—	—	縄文 :LR 横回転，刻みのある隆帯，口縁内側に稜
	23	T6	包含層	深鉢	大木 7a	—	—	—	縄文 :LR 縦回転？縦位隆帯，口縁部内面に稜あり
	24	T6	包含層	深鉢	大木 7a?	—	—	—	縄文 :LR 縦回転，口縁部内面に稜あり
	25	T7	2 層	深鉢	大木 7b	—	—	—	横位押圧縄文 (RL)
	26	T7	2 層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	突起部，円文，沈線文
	27	T7	2 層	深鉢	大木 5	—	—	—	半裁竹管による斜行沈線文
	28	T8	包含層	深鉢	大木 8a?	—	—	—	口縁部無文
	29	T8	包含層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁内湾，横位粘土紐貼付，縄文：摩滅
	30	T8	包含層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁内湾，横位粘土紐貼付，LR 横回転
	31	T8	包含層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁内湾，横位粘土紐貼付，RL 縦回転？
	32	T8	包含層	深鉢	大木 8a	—	—	—	口縁内湾，口縁端部に S 字状粘土紐貼付文
	33	T8	包含層	深鉢	大木 8a	—	—	—	粘土紐貼付，縄文 (摩滅)
	34	T8	包含層	深鉢	大木 7a ～ b	—	—	—	横位・連続弧状沈線文，縄文 (LR 縦回転)
	35	T8	包含層	深鉢	大木 6 古？	—	—	—	横位・弧状沈線文 , 縄文 (LR 縦回転)
	36	T8	包含層	深鉢	大木 4	—	—	—	口縁内側に粘土紐貼付による小波状文
	43	T4	包含層	深鉢	?	—	11.0	—	
	44	T4	包含層	深鉢	大木 8b	—	—	—	口縁内湾，波状口縁，隆沈線，RL 横回転
	45	T4	包含層	深鉢	大木 8b	—	—	—	隆沈線，沈線
	46	T4	包含層	深鉢	大木 8b?	—	—	—	口縁内湾，粘土紐貼付，渦巻文 , 縄文 (摩滅)
	47	T4	包含層	深鉢	大木 8a?	—	—	—	粘土紐貼付
	48	T4	包含層	深鉢	大木 6 古	—	—	—	口縁部肥厚，狭い口縁部，頸部に刻みのある隆帯
	49	T4	包含層	深鉢	?	—	—	—	口縁端部に内外交互押圧，縄文 (Lr 縦回転)
	50	T4	包含層	深鉢	大木 5	—	—	—	折返し粘土紐貼付と沈線による鋸歯状文，縄文 (LR 横)
	51	T4	包含層	深鉢	大木 4	—	—	—	粘土紐貼付による格子状文，縄文 (LR/Lr 横回転)
	52	T4	包含層	深鉢	?	—	—	—	口縁端部角張る，縄文 (LR 横回転・斜め回転)

第 7 表　磯草貝塚出土土製品観察表

遺物図版		写真図版	調査区	層位	器種	型式	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	特　　徴
7	8	10-1	T3	12 層	土製円盤	大木 7a	2.9	2.6	0.8	7.6	体部破片利用、円形に成形、結節縄文 LR
11	3	10-2	T3	C 層	板状土偶	大木 6	16.7	16.9	2.1	720	胸部から脚部のみ、表面に正中線＋盲孔、表裏面に沈線文と刺突列

第 8 表　磯草貝塚出土石器観察表（図示資料）

遺物図版		写真図版	調査区	層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特　　徴
7	9	10-8	T3	12 層	尖頭器	4.95	1.86	1.1	10.6	頁岩	柳葉状　基部折損？先端衝撃剥離？
	10	10-15	T3	12 層	垂飾品	3.86	2.34	0.44	3.8	ホルンフェルス	
	11	10-9	T3	12 層	石匙	7.3	4	1.16	36.5	ホルンフェルス	縦長、先端磨滅
8	5	10-3	T3	13 層	石鏃	2.41	1.68	0.57	2	頁岩	貝層サンプル No.45 で確認
	6	10-6	T3	13 層	石錐	1.85	1.19	0.49	0.7	頁岩	石鏃に類似、貝層サンプル No.40 で確認
	10	10-10	T3	A1 層	不定形石器	3.08	2.69	0.73	6.4	頁岩	スクレイパー状 (破損品 ?)
9	8	10-12	T3	A2 層	磨製石斧	7.26	5.2	1.81	130	ホルンフェルス	基部折れ
11	2	10-5	T3	C 層	石鏃	1.81	1.54	0.28	0.7	頁岩	先端欠、貝層サンプル No.39 で確認

第 9 表　磯草貝塚出土石器観察表（写真のみ掲載）

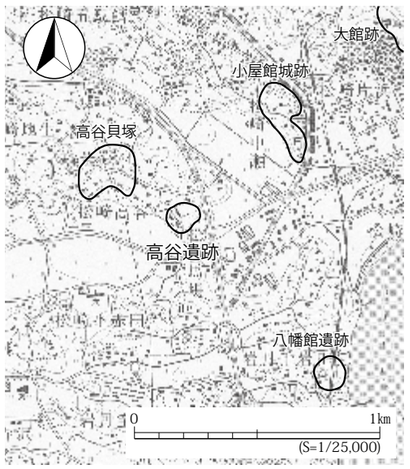
写真図版		調査区	層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特　　徴
10	4	T3	B 下層	石鏃	2.7	1.7	0.48	1.7	黒色頁岩	
	7	T3	12 層	微細剥離痕剥片	4.51	2.16	0.66	4.9	頁岩	両側刃こぼれ状
	11	T3	17 層	両面加工石器	3.6	5.6	1.8	36.9	珪質頁岩	石錐の折損品
	13	T3	包含層	磨石・敲石・凹石	14.53	4.1	2.61	191.7	デイサイト	棒状の石を素材、全面磨り、片側中心に敲打分布
	14	T3	貝層下包含層	砥石	13.4	3.7	4.2	365	砂岩？	角柱状、一面に磨面
	16	T3	7a・b 層 (貝層上層)	磨石	10.1	9.3	3.5	450	砂岩	両面に磨面→割れ
	17	T3 (T1)	7a 層 (貝層上層)	磨石	10.0	8.6	6.8	795	火成岩	両面に磨石 火熱赤変→ハジケ・割れ
	18	T3 (T1)	7a 層 (貝層上層)	磨石	7.6	6.0	3.5	252	砂岩	両面に磨面
	19	T1	包含層	磨石	13.9	7.2	4.7	705	砂岩	片面に磨面
	20	T8	包含層	磨石	9.8	7.7	3.2	380	< 未同定 >	
	21	T8	包含層	磨石	7.33	5.88	2.47	205.7	砂岩	長小判形、扁平、両面に磨面
	22	T8	包含層	磨石	6.12	6.7	3.9	235.2	砂岩	被熱→割れ、平らな面に磨面

第 10 表　磯草貝塚出土骨角器観察表

挿図番号		写真図版	調査区	層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	素材・材質	特　　徴
7	1	10-23	T3	貝層 (7 ～ 11 層)	鯨骨製品	17.99	3.56	1.14	42.5	鯨骨	先端部欠損、柄部の中心に貫通孔 1 ・側面に溝状の刻線
	2	10-24	T3	7a・b 層	垂飾品	4.84	1.39	0.6	2.4	ニホンジカ・角	両端部欠損、貫通孔 1 、抉り 3
8	7	10-26	T3	13 上層	釣針	3.53	1.54	0.72	2.2	ニホンジカ・角	チモト部欠損、カエシなし
	8	10-27	T3	13 上層	骨針	5.45	0.63	0.44	1.4	哺乳類種不明・部位不明	貫通孔 1
	9	10-25	T3	13 層	垂飾品	1.18	0.85	0.34	0.1	ネズミザメ科・歯	貫通孔 2

第 3 章　高谷遺跡

遺 跡 名：高谷遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59109）
所 在 地：気仙沼市松崎高谷 58-10
調査原因：24 年度 3 次調査：個人住宅建設
　　24 年度 4 次調査：個人住宅建設（道路）
調査主体：気仙沼市教育委員会
調査協力：宮城県教育委員会
調査期間：3 次　平成 24 年 5 月 23 日～ 6 月 12 日
　　：4 次　平成 25 年 3 月 21 日～ 3 月 26 日
対象面積：3 次　915.42㎡　　4 次　141.23㎡
調査面積：3 次　235㎡　　4 次　141㎡
調 査 員：3 次　鈴木實夫、幡野寛治、豊村幸宏・
　　三好秀樹・小淵忠司（宮城県支援）
　　4 次　鈴木實夫・西園勝彦



第 19 図　高谷遺跡の位置

1．調査に至る経緯

高谷遺跡は、気仙沼湾に向かって東流する面瀬川の北側にある東西方向に延びる丘陵端部南斜面、南東へ向かって張り出す箇所に位置する（第 19 図）。縄文時代の散布地として登録されている。遺跡範囲の南西部ではこれまで 5 次に渡る調査が行われ、丘陵尾根上に縄文時代中期末～後期初頭の土坑群が、北東斜面を中心に遺物包含層が分布することが分かっている。

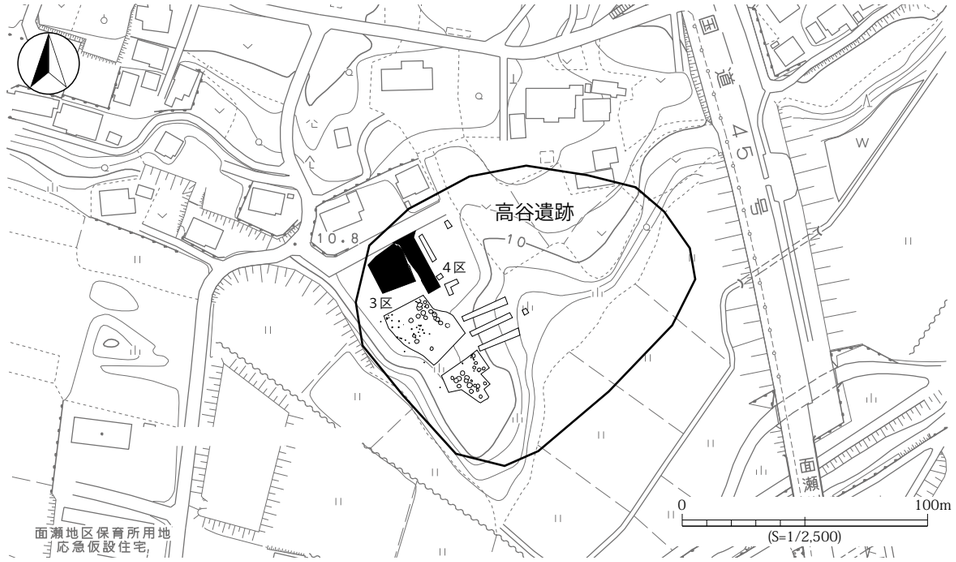
今回の報告は 24 年度 3・4 次調査についてである。個人住宅建築及び私道建設に伴うもので、対象地は遺跡範囲の北東部、南東へ向かって張り出す枝丘陵の付け根に当たる箇所である（第 20 図）。確認調査を行ったところ、土坑及びピットを検出した。工法上、遺構の現状保存は難しいため、本発掘調査を実施した。

2．調査の概要

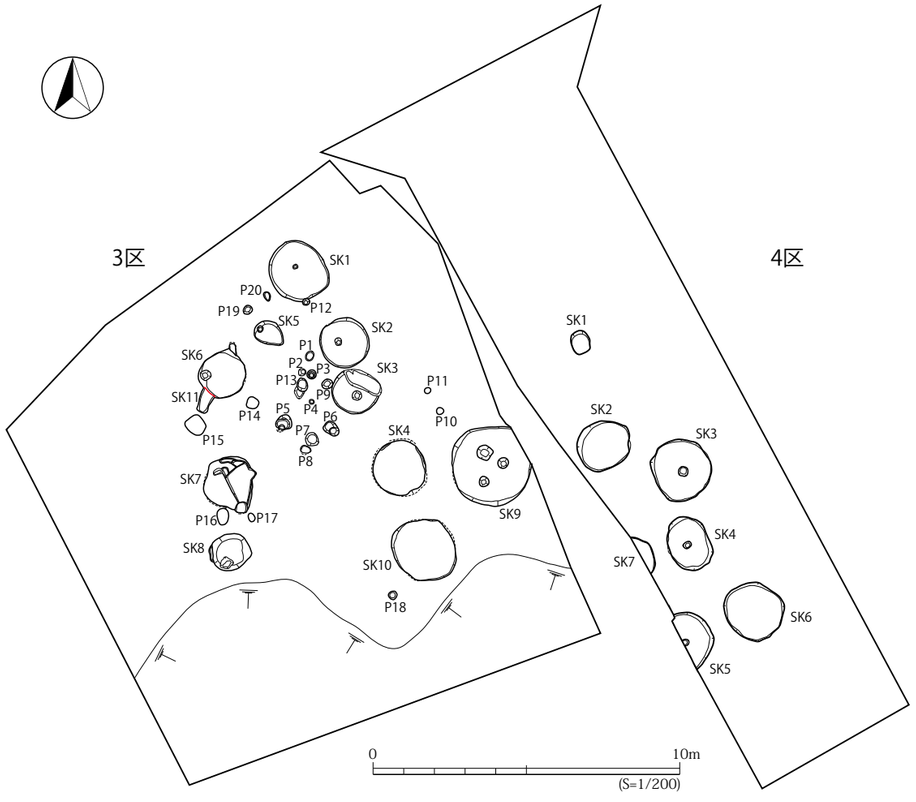
住宅部分に 3 区、私道部分に 4 区を設定した（第 21 図）。遺構はいずれも地山面で検出した。3 区では土坑 10 基、ピット 22 基を検出し、縄文土器 14 箱、石器 35 箱が出土した。3 区の南側は撹乱が及んでいた。4 区では土坑 7 基、ピット 3 基を検出し、縄文土器 8 箱、石器 11 箱が出土した。 なお、遺構番号は区ごとに付している。

3．調査の成果

(1)　3 区



第 20 図　高谷遺跡調査範囲



第 21 図　高谷遺跡遺構配置図

【SK1 土坑】

平面形は長軸 2.1m、短軸 1.9m の楕円形、底面は平坦で中心寄りに断面皿状の深さ 5cm のピットをもつ。残存深さは 24cm で壁は直角気味に立ち上がる。堆積土は自然堆積で上層の 1・3 層に遺物を多く含む。土器は堆積土中から小破片が出土した。石器は堆積土中から石鏃 1 点（第 24 図 1）、剥片 1 点、磨石 3 点（写真図版 16-49）、棒状の敲石 1 点が出土した。

【SK2 土坑】

平面形は直径 1.6m の円形、底面は平坦で中心付近にピットをもつ。残存深さは 30cm で壁は直角気味に立ち上がる。堆積土は地山土を主体とする層を挟んでおり崩落土を含む自然堆積とみられる。底面～底面直上（5 ～ 6 層）から礫や礫石器が 40 点以上出土した（写真図版 12 右上）。明確な使用痕をもつものは 15 点で、石皿（写真図版 17-6）ないし台石が 2 点、砥石（第 24 図 5）が 1 点、磨･敲･凹石類（写真図版 16-50・53・55・56）が 12 点である。ほかに石鏃（第 24 図 4）と剥片が 1 点ずつ出土した。土器は深鉢（第 24 図 3）と壺（第 24 図 2）が堆積土中から出土した。第 24 図 2 は頸部と体下部に橋状の把手が付き体部に曲線的な磨消縄文が施されるもの、第 24 図 3 は頸部に区画沈線文が巡るもので、いずれも縄文時代中期末の大木 10 式の特徴をもつ。

【SK3 土坑・P21】

平面形は直径 1.6m の不整円形､底面は平坦である。残存深さは 20cm で壁は直角気味に立ち上がる。堆積土は地山土を主体とする層が広範囲に厚みをもって堆積しており崩落土を含む自然堆積とみられる。より新しいピット P21 が底面以下まで達している。遺物は縄文土器小破片、剥片が出土した。

【SK4 土坑】

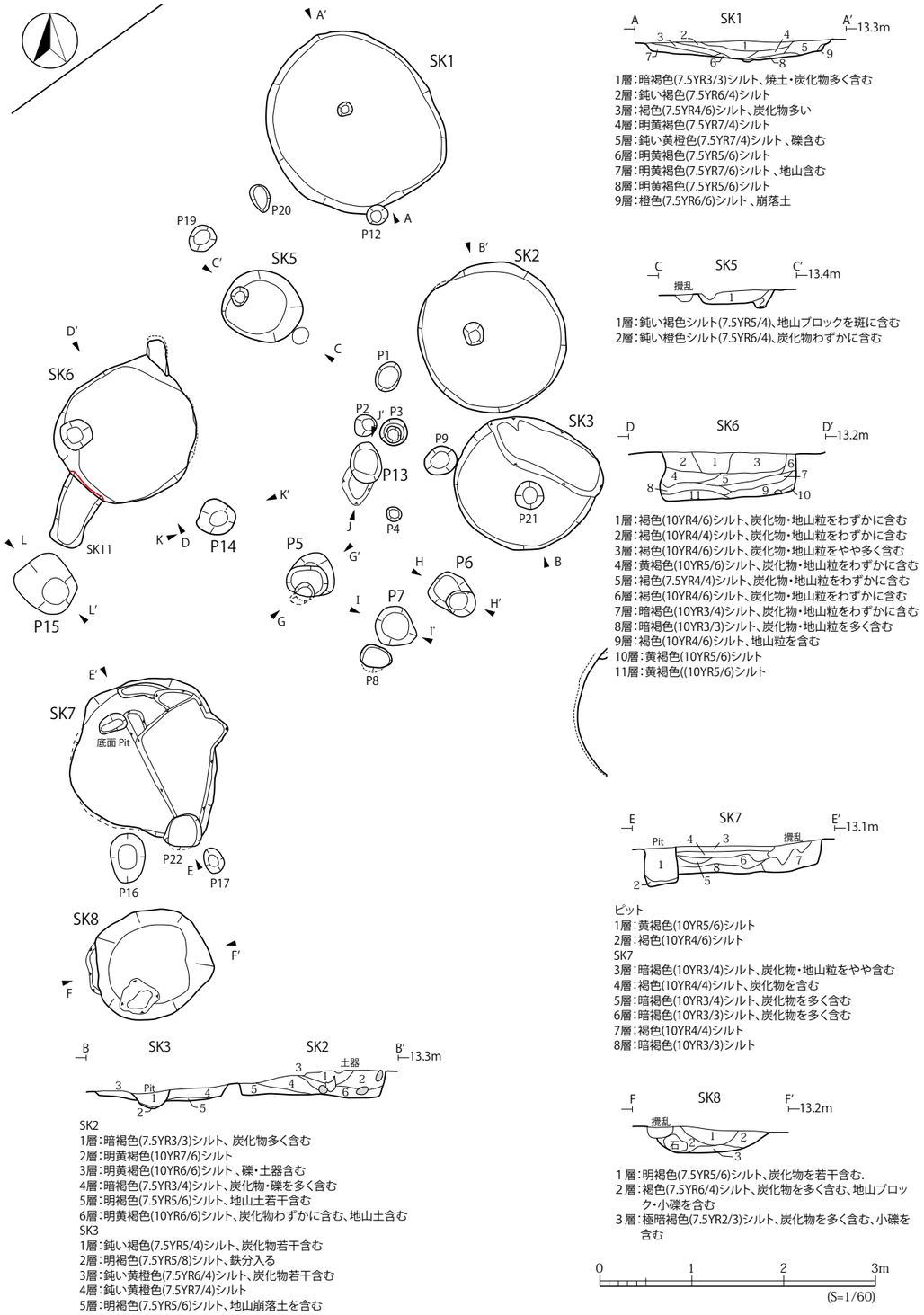
平面形は直径 1.8m の円形、底面は平坦で壁際の一部に溝が巡る。残存深さは 75cm と最も深く、壁は鋭角に立ち上がりオーバーハングしフラスコ状を呈する。堆積土は壁崩落土を含む自然堆積で、大半の層で炭化物を含む。1 ～ 4 層からは土器が多く出土した。縄文時代中期中葉の大木 8b ～中期末の大木 10 式の特徴をもつものがあり､大木 10 式の特徴をもつものを主体とする（第 24 図 6 ～ 8）。第 24 図 9 は大木 10 式の深鉢の下半部で隆帯区画の磨消縄文が施されている。石器は堆積土中から石鏃破損品 2 点、石匙 1 点（第 24 図 10）、剥片･チップ 20 点以上、石皿 2 点（写真図版 17-7）、磨石･敲石類 19 点（写真図版 16-57）が出土した。石皿には被熱が認められる。また 7 層中から径 30cm の球状礫が出土した。

【SK5 土坑】

小型、平面形は直軸 0.9m、短軸 0.8m の楕円形、底面は皿状で北西壁際にピットをもつ。残存深さは 20cm である。堆積土は地山ブロックを斑らに含む一様な土で、埋め戻されているとみられる。遺物は 2 層（底面ピット）から石鏃、二次加工ある剥片、剥片が 1 点ずつ出土した。

【SK6・SK11 土坑】

SK6 は平面形は直径 1.6m の円形、底面は平坦でやや傾斜し、西壁際に径 35cm、深さ 10cm のピットをもつ。残存深さは 54cm で、壁は直角に立ち上がり、一部オーバーハングする。堆積土は崩落土を含む自然堆積である。縄文土器破片が多く出土しているものの残存状況が悪く、詳細のわかるも



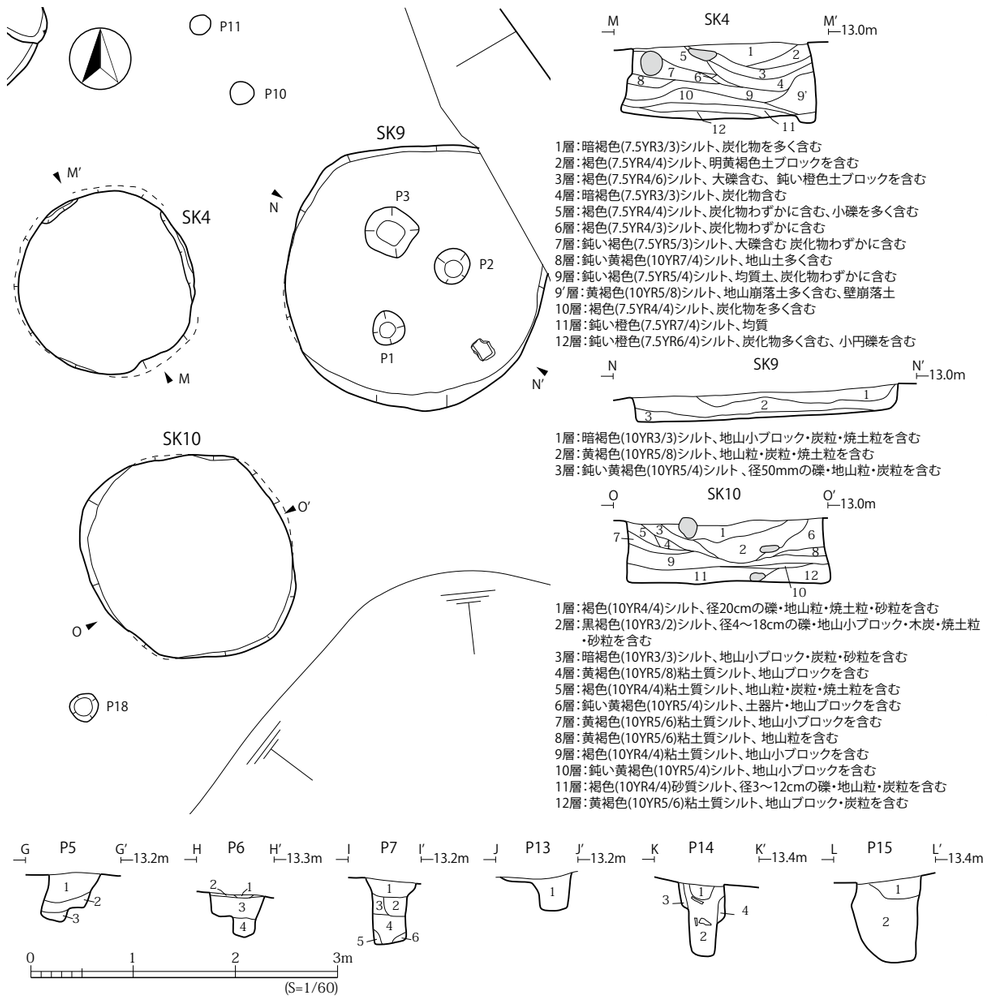
第 22 図　高谷遺跡 3 区遺構平面図・断面図（1）

のはない。石器は石鏃 3 点（第 24 図 11・12）、石錐 1 点（写真図版 16-19）、両面加工石器 1 点、二次加工剝片 1 点、微細剝離痕のある剝片 1 点（第 24 図 13）、石核 1 点、剝片・チップ 30 ～ 40 点、磨石・敲石 5 点、石棒 1 点（第 24 図 14）が堆積土中から出土した。

SK11 は SK6 より古く、溝状を呈する土坑で落とし穴の可能性がある。

【SK7 土坑・P22】

SK7 は平面形は直径 1.8m の不整円形、残存深さは 30cm で壁は直角に立ち上がり、一部オーバーハングする。底面は平坦で、一部壁際に溝が巡り、北寄りに長軸 30cm、深さ 18cm のピットをもつ。堆積土は炭化物を多く含む暗褐色土で、壁崩落土を含む自然堆積である。遺物は堆積土中から、壺型の縄文土器で大木 10 式とみられるもの（第 24 図 15）、石器は石鏃（破損品を含む）4 点（第 24 図 16）、石皿 2 点（写真図版 17-8）、磨石 3 点のほか二次加工剝片、剝片・チップが、底面から棒状石



第 23 図　高谷遺跡 3 区遺構平面図・断面図（2）

製品（第 24 図 17）が出土した。

P22 は SK7 より新しいピットである。垂直に掘り込まれ、残存深さは 40cm で土坑底面以下に達する。堆積土中から剥片・チップが出土した。

【SK8 土坑】

小型で、平面形は直径 1.3m の不整円形、壁の立ち上がり緩く、底面は丸みを帯びる。残存深さは 30cm で。堆積土は炭化物や地山ブロック・小礫を含む明～極暗褐色土で自然堆積である。底面西壁際から径 25cm 程の円礫が出土した。

【SK9 土坑】

平面形は直径 2.6m の円形、残存深さは 25cm で、堆積土は自然堆積である。壁は垂直に立ち上がり一部オーバーハングする。底面は平坦でわずかに傾斜し、P1 ～ 3 のピット 3 基が検出された。本土坑にともなうことが確認できたのは P1 である。P2 は P1 と規模・堆積土が近似し伴う可能性がある。P3 は堆積土中に土坑堆積土 1 層と同様の黒色土がやや混じり、規模も大きいことから土坑よりも新しいピットの可能性がある。

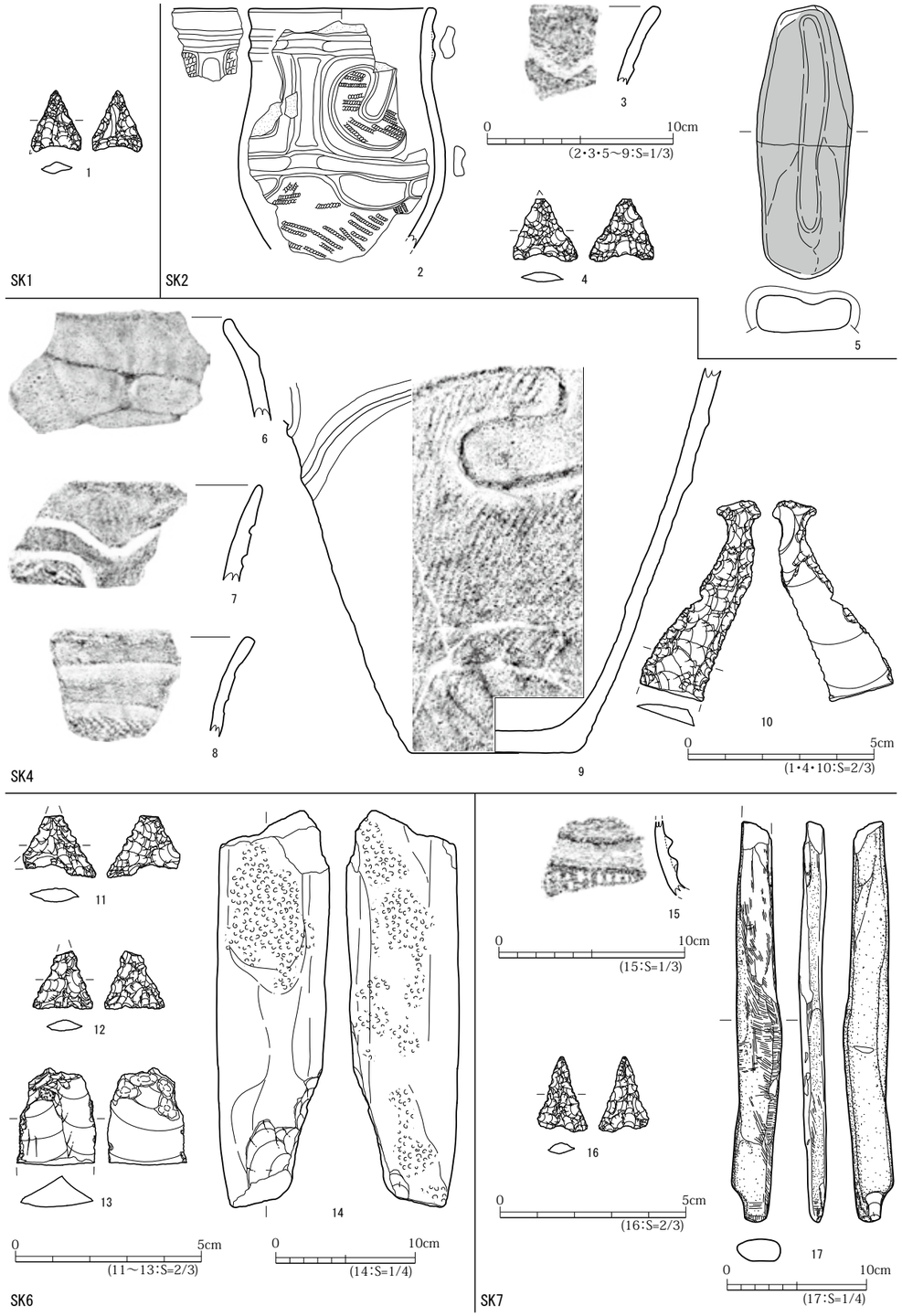
遺物は主に堆積土中から出土した。比較的多くの縄文土器片が出土したが残存状況が悪く詳細がわかるものは少ない。大木 10 式～後期初頭の門前式の特徴を持つものがみられ、第 25 図 1 は頸部に鎖状隆帯が巡り体部に O 字状とみられる沈線区画文が配されるもので門前式の特徴をもつ深鉢である。石器は、堆積土中から剥片石器を中心に多く出土し、石鏃 14 点（第 25 図 2 ～ 6、写真図版 16-12）、石鏃未製品とみられる小型両面加工石器 3 点、石錐 5 点（第 25 図 7・8、写真図版 16-22・23）、尖頭器 2 点（写真図版 16-28・29）、石篦（?）1 点、二次加工のある剥片 7 点（第 25 図 9）、微細剥離痕のある剥片 7 点（第 25 図 10）、剥片・チップ約 300 点、磨石類 5 点（写真図版 16-51・54）が出土した。また、底面直上からは方形で四脚の付く石皿 1 点（第 25 図 11）が出土した。

【SK10 土坑】

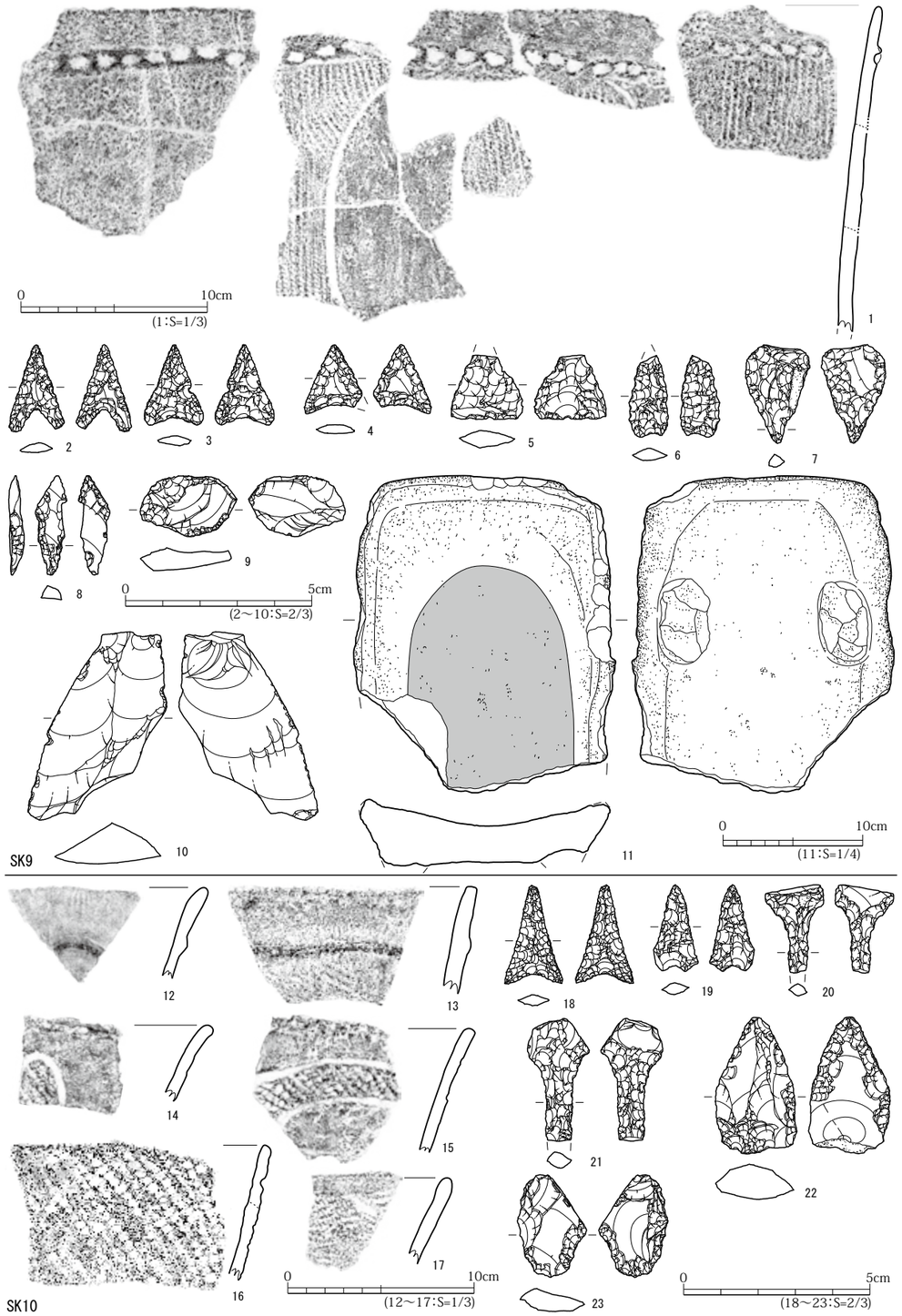
平面形は長軸 2.3m、短軸 2.0m の楕円形、残存深さは 68cm である。壁は直角～鋭角に立ち上がり、一部オーバーハングする。堆積土は壁崩落土を含む自然堆積である。底面は平坦でほぼ水平である。遺物は堆積土中から多く出土し、黒色土層の 2 層出土の割合が高い（第 25 図 12 ～ 17）。土器はいずれも深鉢である。第 25 図 12 ～ 15 は隆帯や沈線区画の曲線的な磨消縄文が施され、大木 10 式の特徴をもつものである。石器は石鏃 4 点（第 25 図 18・19、写真図版 16-15）、石錐 2 点（第 25 図 20・21）、尖頭器 1 点（第 25 図 22）、楔形石器 1 点（第 25 図 23）、小型両面加工石器 1 点、二次加工剥片 1 点、石核 1 点（写真図版 16-34）、石皿 4 点、磨石類 15 点（写真図版 16-52）、剥片・チップ約 30 点が出土した。

【ピット】

22 基検出した。SK3-6 間周辺に集中しており、深さ 10 ～ 70cm のものがある。これらのうち P5・6・7・13・14・15 は垂直に掘り込まれ柱穴の可能性が高いと考えられる。柱痕跡は確認できず、いずれも柱が抜き取られたものと考えられる。建物としての組み合わせ、時期などは不明である。遺物は石鏃や凹石など少量の石器が出土した。



第 24 図　高谷遺跡 3 区 SK1・2・4・6・7 出土遺物



第 25 図　高谷遺跡 3 区 SK9・10 出土遺物

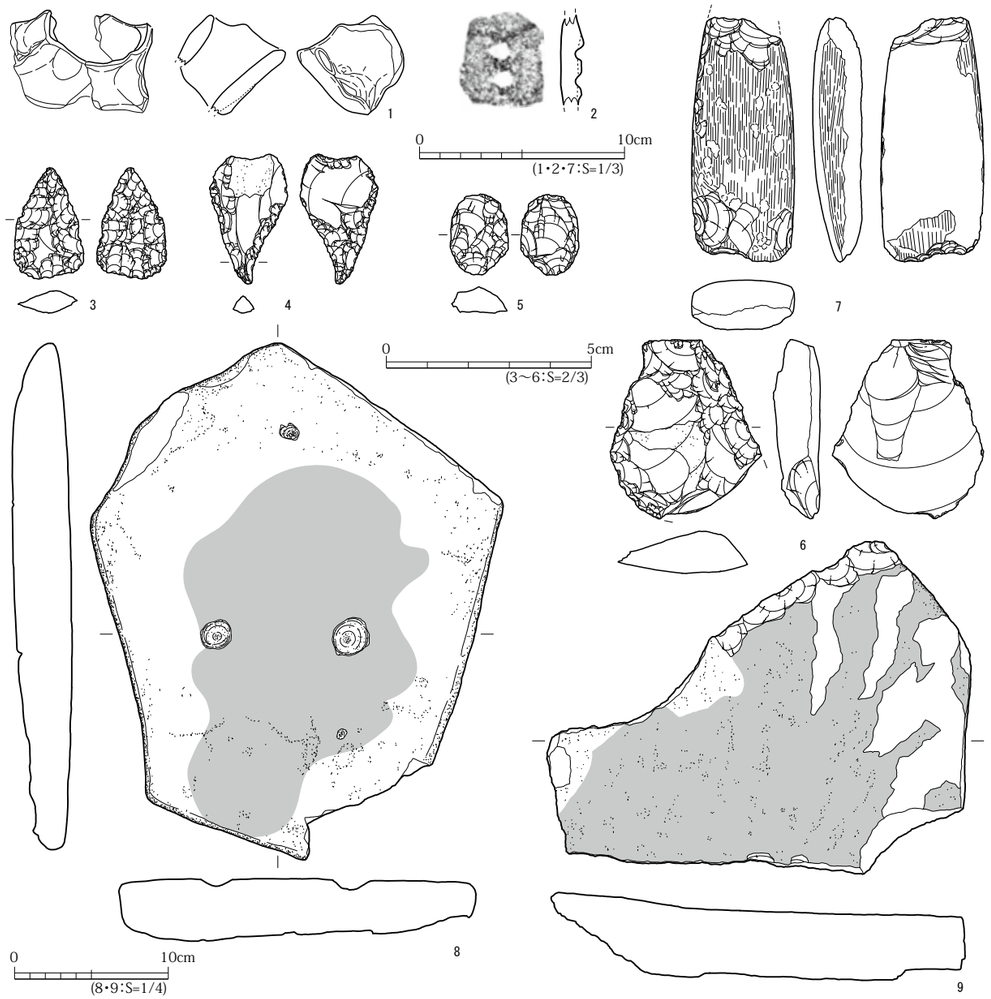
(2) 4 区

【SK1 土坑】

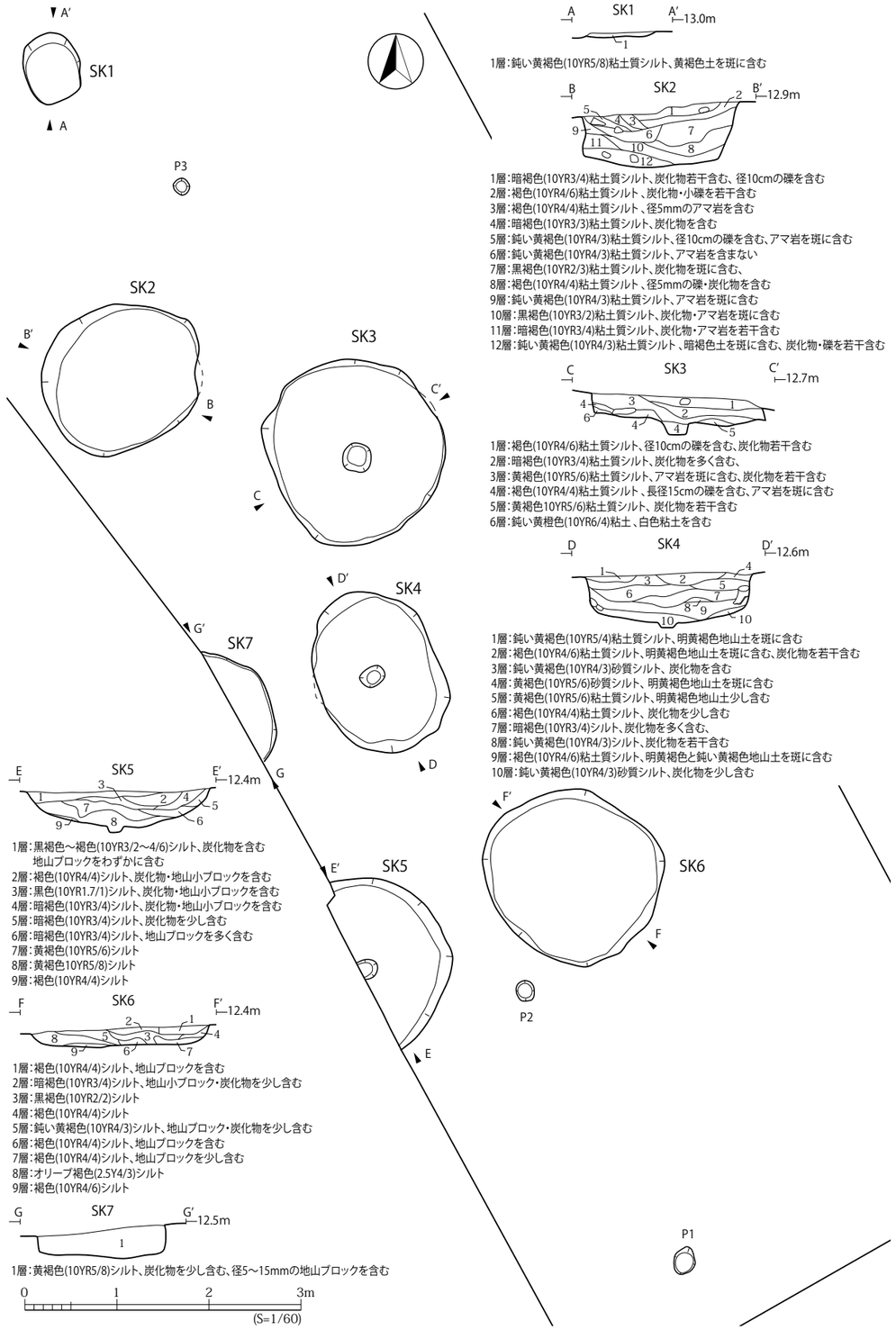
小型の土坑で底面付近のみ残存している。底面は平坦である。遺物は出土していない。

【SK2 土坑】

平面形は長軸 1.9m、短軸 1.6m の楕円形、底面は平坦で中央が若干くぼむ。残存深さは 70cm で、壁は直角に立ち上がり一部オーバーハングする。堆積土は自然堆積である。遺物は堆積土中から縄文土器と石器が出土した。第 26 図 1 は注口の付く深鉢の注口部で鎖状隆帯が施される。第 26 図 2 は深鉢の体部で、区画隆帯の一部に 2 個 1 対の刻みをもつ。ともに門前式の特徴をもつものである。石器は石鏃 2 点（第 26 図 3）、石錐 2 点（第 26 図 4、写真図版 16-27）、尖頭器 1 点（写真図版 16-31）、削器 1 点（第 26 図 6）、楔形石器 1 点（第 26 図 5）、二次加工剥片 1 点、磨製石斧 1 点（第 26 図 7）、



第 26 図　高谷遺跡 4 区 SK2 出土遺物



第 27 図　高谷遺跡 4 区遺構平面図・断面図

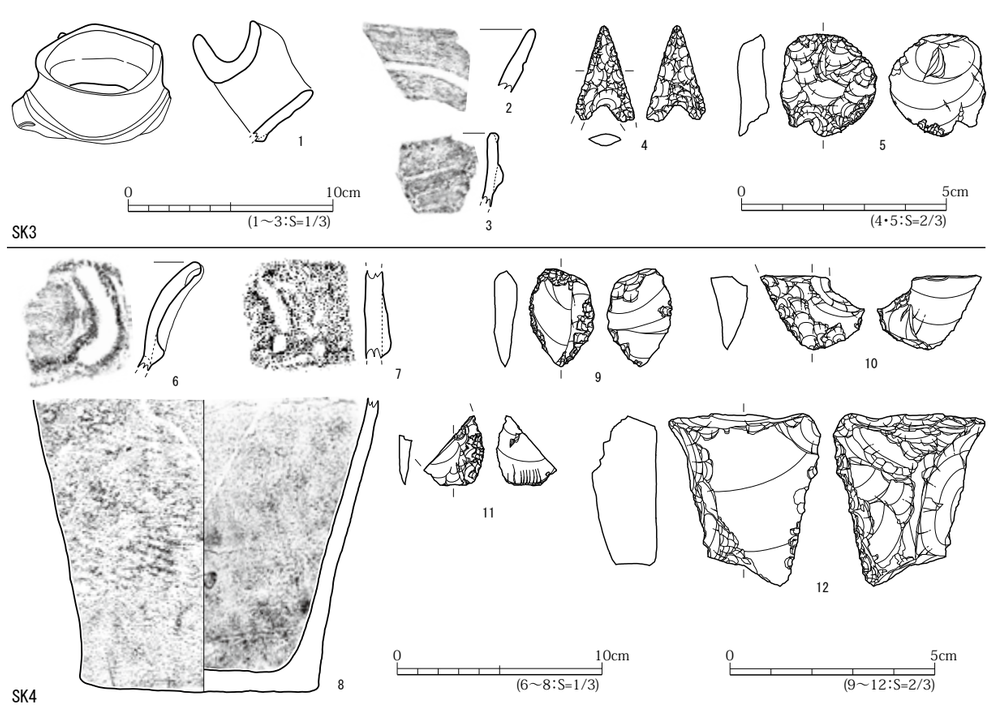
石皿 2 点（第 26 図 8・9）、磨石 3 点（写真図版 16-58・59）、剥片・チップが出土した。また、炭化した堅果類が 1 ～ 5 層から 4 点、10・11 層から 8 点出土した。

【SK3 土坑】

平面形は直径 2.0m の円形である。残存深さは 40cm で、壁は直角に立ち上がり一部オーバーハングする。底面は平坦で若干傾斜する。中央に径 35cm、深さ 15cm で垂直に掘り込まれたピットをもち、堆積土中に大きめの土器破片が入る。堆積土は締まりのある粘土質シルトや粘土で、上層は暗褐色～褐色土で土器片を多く含み、下層は褐色～鈍い黄橙色でアマ岩を含んでおり、自然堆積である。遺物は堆積土中から縄文土器と石器が出土した。土器は 1 層から多く出土し、注口付き深鉢（第 28 図 1）や沈線・隆帯区画の磨消縄文が施されるもの（第 28 図 2・3）が認められ、大木 10 式の特徴をもつ。石器は石鏃 2 点（第 28 図 4）、石篦破損品 1 点、二次加工剥片 5 点（第 28 図 5）、石棒破損品 1 点、剥片・チップである。また底面から円礫数点が出土した。

【SK4 土坑】

平面形は 1.8m、短軸 1.4m の楕円形である。残存深さは 60cm で、壁は下端で丸みを帯びながら垂直に立ち上がり一部オーバーハングする。底面は中央にむかってやや窪み、中央に長径 30cm の楕円形で深さ 5cm の浅いピットをもつ。堆積土は締まりのある褐色～黄褐色の粘土質～砂質シルトで自然堆積である。遺物は堆積土中から縄文土器と石器が出土した。土器は深鉢で、口縁部に中央に沈線をもつ隆帯が施されるもの（第 28 図 6）、また隆帯の交点に刺突が施されるもの（第 28 図 7）で、



第 28 図　高谷遺跡 4 区 SK3・4 出土遺物

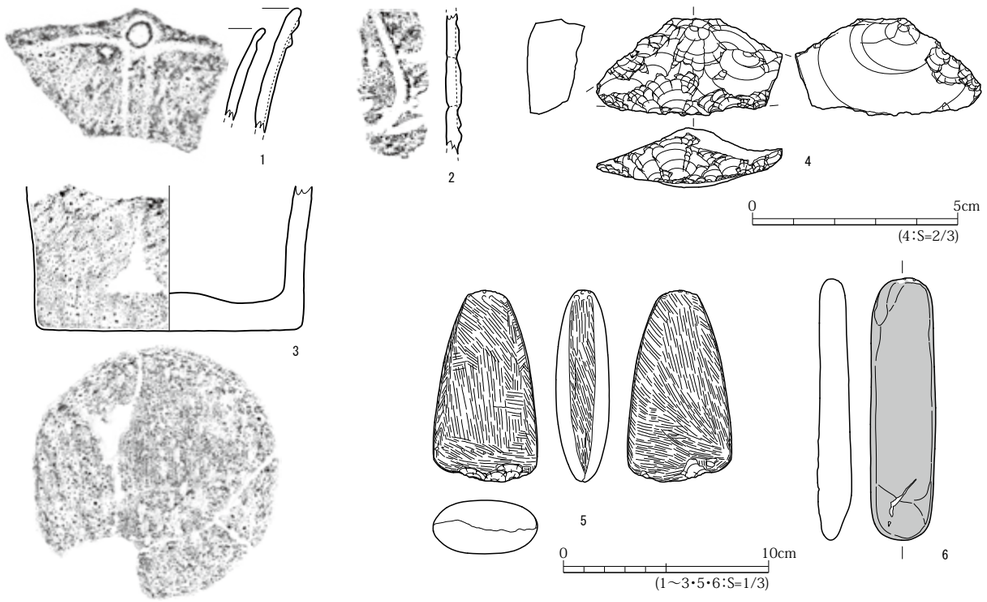
門前式の特徴をもつ。石器は二次加工剥片 6 点（第 28 図 9 ～ 12）、磨石 3 点である。底面付近の 9・10 層からは炭化した堅果類が 1 点出土した。また底面西壁際からは 20 点以上の礫が出土した。

【SK5 土坑】

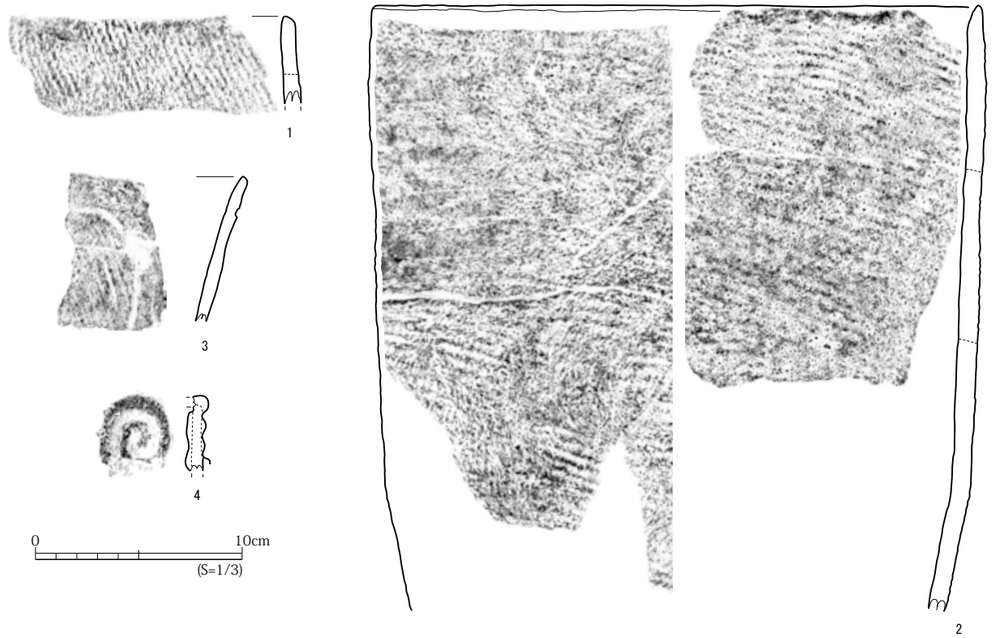
西半部が調査区外にあり平面形は直径 1.9m の円形ないし楕円形である。残存深さは 50cm で、壁の立ち上がりは緩く、底面は中央にむかってやや窪み、中央に長径 20cm 以上の楕円形で深さ 5cm の浅いピットをもつ。堆積土は黒色～黄褐色の粘性のあるシルトで自然堆積である。遺物は堆積土中から縄文土器と石器が出土した。土器は深鉢で（第 29 図 1 ～ 3）、口縁部突起直下にボタン状貼付文、口縁部以下に沈線による直線的区画文が配されるもの（第 29 図 1）、円文と内部に刺突充填されるもの（第 29 図 2）があり、門前式の特徴を持つ。石器は石鏃（写真図版 16-18）、スクレイパー（第 29 図 4）、磨製石斧（第 29 図 5）、磨石、敲石（第 29 図 6）が 1 点ずつ、ほかに剥片・チップがある。

【SK6 土坑】

平面形は長軸 2.0m、短軸 1.7m の楕円形である。残存深さは 20cm で、壁は下端で丸みを帯びながら垂直に立ち上がる。底面は水平で、北西の壁際からは深鉢の口縁～体部の大破片（第 30 図 2）が出土した。また堆積土中から出土した土器は（第 30 図 1 ～ 4）、体上部に沈線区画の曲線的な磨消縄文（撚糸文）が配され大木 10 式の特徴をもつ深鉢（第 30 図 3）、渦巻文が施された深鉢の口縁突起部で大木 8b 式の特徴をもつもの（第 30 図 4）などである。石器としてはスクレイパー破損品、二次加工剥片、微細剥離痕剥片（写真図版 16-45）、磨石（写真図版 17-5）が 1 点ずつ、他に剥片・チップが出土した。



第 29 図　高谷遺跡 4 区 SK5 出土遺物



第 30 図　高谷遺跡 4 区 SK6 出土遺物

【SK7 土坑】

大部分が調査区外で平面形は円形ないし楕円形と見られる。残存深さは 34cm で、壁は直角に立ち上がる。底面は水平である。堆積土は地山ブロックを含む一様な土で、埋め戻されているとみられる。堆積土中から磨石 1 点が出土した。

【ピット】

3 基検出した。いずれも、径が 20 ～ 30cm、深さ 10cm ほどの小規模なもので調査区内に散在する。遺物は出土していない。

4．まとめ

（1）土坑

小型のもの（3 区 SK5、SK8、4 区 SK1）と大型のもの（それら以外）にわかれる。大型のものは、平面形は円形ないし円形に近い楕円形で、長軸 1.6 ～ 2.7m で多くは 2.0m 以下である。壁は垂直ないし鋭角に立ち上がり、オーバーハングするものも多く、底面は概ね平坦で水平に近い。堆積土下層は地山土由来とみられる褐色～黄褐色土であり、壁の崩落が想定される。以上から、これらはフラスコ状を呈する貯蔵穴と考えられる。

これらには底面に施設を持つものと持たないものがある。底面施設にはピットと周溝があり、ピットは中央に 1 基、壁寄りに 1 基、平面規模の大きいものにおいては複数認められる場合がある。周溝は 2 基で部分的に認められた。また、底面に多数の礫が出土する状況が 2 基で認められた。

堆積土中からは、縄文時代中期末の大木 10 式や後期初頭の門前式の特徴をもつ土器が主体的に出

土し、わずかに中期中葉の土器が出土した。土坑同士には重複もないことから、これらは縄文時代中期末から後期初頭にかけてのほぼ同時期のものと考えられる。

3区SK11は溝状を呈する土坑で落とし穴の可能性がある。SK6と重複しこれより古いことから、貯蔵穴群より古い時期の遺構である。

(2) ピット

貯蔵穴群と同じ区域に分布し、貯蔵穴より新しいものが複数認められることから、貯蔵穴群より新しい時期のピット群と考えられる。また、3区については柱穴と考えられるものが含まれ、分布にもまとまりがあることから、建物跡の可能性がある。

第11表　高谷遺跡土坑一覧表

区	遺構№	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	特徴
3区	SK 1	楕円形	2.1	1.9	24	底面中央付近にピット
	SK 2	円形	1.6	-	30	底面中央付近にピット、底面～底面直上に多量の礫や礫石器
	SK 3	不整円形	1.6	-	20	
	SK 4	円形	1.8	-	75	底面に周溝
	SK 5	楕円形	0.9	0.8	20	小型
	SK 6	円形	1.6	-	54	底面壁際にピット
	SK 7	不整円形	1.8	-	30	底面北側にピット・周溝
	SK 8	不整円形	1.3	-	30	小型
	SK 9	円形	2.7	-	25	底面にピット2基か
	SK 10	楕円形	2.3	2	68	
	SK 11	溝状	0.7以上	0.5		SK6より古い。落とし穴か。
4区	SK 1	楕円形	0.8	0.6	5	
	SK 2	楕円形	1.9	1.6	70	
	SK 3	円形	2.0	-	40	底面中央に円形のピット。底面から円礫数点が出土
	SK 4	楕円形	1.8	1.4	60	底面中央に円形のピット、底面西壁際から多量の礫
	SK 5	楕円形 (?)	1.9	?	50	底面中央に円形のピット、西半部が調査区外
	SK 6	楕円形	2.0	1.7	20	
	SK 7	楕円形 (?)	1.3以上	?	34	大部分が調査区外

第12表　高谷遺跡出土縄文土器観察表（図示資料）

遺物図版		写真図版	調査区	遺構	層位	器種	型式	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴
24	2	15-1	3区	SK2	埋2・3	壺	大木10	—	—	—	隆線区画文、頸部と体下部に橋状把手、磨消縄文（LR）
	3	15-2	3区	SK2	埋3	深鉢	大木10?	—	—	—	やや内傾して外反、沈線区画文
	6	15-3	3区	SK4	埋2	深鉢	大木10	—	—	—	口縁やや内傾、波状口縁、隆線文
	7	15-4	3区	SK4	埋3	深鉢	大木10?	—	—	—	口縁わずかに外傾、沈線区画文、充填縄文(摩滅)
	8	15-5	3区	SK4	埋3	深鉢	大木9～10	—	—	—	幅広の浅い沈線文、縄文(LR縦回転)
	9	15-6	3区	SK4	埋3	深鉢	大木10	—	7.0	—	隆線区画文、磨消縄文(RL縦回転)
	15	15-10	3区	SK7	中～下層	壺?	大木10?	—	—	—	隆帯、刺突列
25	1	15-11	3区	SK9	1層	深鉢	門前	—	—	—	口縁:無文帯、頸部:鎖状隆帯、体部:沈線区画文(O字状文?)・撚糸文(R)
	12	15-13	3区	SK10	3～9層	深鉢	大木9～10	—	—	—	隆帯区画文
	13	15-14	3区	SK10	2層	深鉢	大木10	—	—	—	口縁部無文、隆帯、縄文(摩滅)
	14	15-15	3区	SK10	2層	深鉢	大木10?	—	—	—	沈線区画文、縄文(LR縦回転)
	15	15-16	3区	SK10	2層	深鉢	大木9～10	—	—	—	沈線区画文、磨消縄文?(LR縦回転)
	16	15-17	3区	SK10	2層	深鉢		—	—	—	縄文(LR縦回転)
	17	15-18	3区	SK10	2層	深鉢	?	—	—	—	縄文(LR)
26	1	15-20	4区	SK2	5層	深鉢	門前	—	—	—	鎖状隆帯
	2	15-21	4区	SK2	1層	深鉢	門前	—	—	—	隆帯上に2個一対の刻み
28	1	15-22	4区	SK3	堆積土	注口付鉢	大木10	—	—	—	注口下端に隆帯
	2	15-23	4区	SK3	1層	深鉢	大木10?	—	—	—	沈線区画文、縄文(摩滅)
	3	15-24	4区	SK3	1層	深鉢	大木10?	—	—	—	口縁部無文、隆帯
	6	15-25	4区	SK4	3・6～8層	深鉢	門前	—	—	—	隆帯の中央に沈線
	7	15-26	4区	SK4	3・6～8層	深鉢	門前	—	—	—	口縁ほぼ垂直 隆帯の中央に沈線、交点に刺突
	8	15-27	4区	SK4	3・6～8層	深鉢	門前?	—	23.0	—	縄文(磨滅)、内面にコゲ
29	1	15-28	4区	SK5	1～5層	深鉢	門前	—	—	—	口縁部:突起直下にボタン状貼付、沈線区画文 縄文(摩滅)
	2	15-30	4区	SK5	1～5層	深鉢	大木10?	—	—	—	沈線文(円文?)、刺突充填?縄文
	3	15-29	4区	SK5	1～5層	深鉢	?	—	13.0	—	縄文(摩滅、底面に網代痕
30	1	15-31	4区	SK6	2層	深鉢	?	—	—	—	撚糸文(L)
	2	15-33	4区	SK6	4層	深鉢	?	29.6	—	—	縄文(摩滅)
	3	15-35	4区	SK6	2～7層	深鉢	大木10?	—	—	—	沈線区画文、撚糸文(摩滅)
	4	15-34	4区	SK6	1層	深鉢	大木8b	—	—	—	渦巻文

第13表　高谷遺跡出土縄文土器観察表（写真のみ掲載）

写真図版		調査区	遺構	層位	器種	型式	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴
15	7	3区	SK4	埋3	深鉢	大木10	—	—	—	沈線区画文、磨消縄文(LR)
	8	3区	SK4	埋3	深鉢	大木8b	—	—	—	隆沈文、縄文(RL縦回転)
	9	3区	SK4	埋4	深鉢	大木8b	—	—	—	頸部で括れ体部が張る器形、隆沈文、縄文
	12	3区	SK9	2層	深鉢	大木10?	—	—	—	沈線文、縄文(LR縦回転)
	19	3区	SK10	2層	小型深鉢	?	—	—	—	無文
	32	4区	SK6	底面	深鉢	?	—	15.0	—	無文

第14表　高谷遺跡出土石器観察表（図示資料）

遺物図版		写真図版	調査区	遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
24	1	16-1	3区	SK1	2層	石鏃	1.48	1.33	0.36	0.4	黒曜石	凹基
	4	16-2	3区	SK2	2・3層	石鏃	1.48	1.71	0.29	0.5	頁岩	先端わずかに欠損(折れ)
	5	17-3	3区	SK2	埋土3層	砥石	14.64	5.12	2.03	223.9	砂岩	接合
	10	16-32	3区	SK4	2層	石匙	3.90	1.86	0.59	4.6	頁岩	先端欠損(折れ)
	11	16-4	3区	SK6	3層	石鏃	1.38	1.78	0.40	0.9	メノウ	両カエリ端部欠損
	12	16-5	3区	SK6	1層	石鏃	1.47	1.58	0.31	0.5	黒曜石	先端欠損(折れ)
	13	16-37	3区	SK6	7層	微細剥離痕剥片	2.60	2.08	0.89	4.4	頁岩	両側縁に微細剥離
	14	17-1	3区	SK6	埋土8層	石棒	27.0	7.90	8.86	2910	砂岩	円柱状、敲打→研磨で整形、被熱→割れ
	16	16-6	3区	SK7	上層	石鏃	1.86	1.25	0.34	0.5	頁岩	
	17	17-2	3区	SK7	底面	棒状石製品	28.57	3.21	1.64	227.8	ホルンフェルス	元々棒状の石の一部を磨って整形したもの
25	2	16-7	3区	SK9	1層	石鏃	1.74	1.44	0.28	0.6	頁岩	
	3	16-8	3区	SK9	1層	石鏃	1.96	1.58	0.29	0.7	黒曜石	
	4	16-9	3区	SK9	2層	石鏃	1.61	1.42	0.25	0.6	頁岩	カエリ片側端部欠損(折れ)
	5	16-10	3区	SK9	2層	石鏃	1.71	1.91	0.48	1.4	頁岩	破損品
	6	16-11	3区	SK9	1層	石鏃	2.08	1.02	0.35	0.7	頁岩	細長い、側縁下部膨らむ
	7	16-20	3区	SK9	2層	石錐	2.57	1.71	0.91	3.1	頁岩	
	8	16-21	3区	SK9	1層	石錐	2.53	0.70	0.38	0.7	頁岩	両端錐
	9	16-38	3区	SK9	1層	二次加工剥片	1.62	2.49	0.62	2.4	頁岩	
	10	16-39	3区	SK9	1層	微細剥離痕剥片	4.04	2.86	1.13	14.6	頁岩	
	11	17-10	3区	SK9	底面直上	石皿	22.6	18.66	5.42	1740	凝灰岩	脚付、上面中央凹む、片側欠損
	18	16-13	3区	SK10	2層	石鏃	2.37	1.53	0.30	0.8	頁岩	
	19	16-14	3区	SK10	10～12層	石鏃	2.16	1.13	0.37	0.7	頁岩	カエリ片側端部欠損(折れ)
	20	16-24	3区	SK10	2層	石錐	2.27	1.56	0.55	1.3	メノウ	先端欠損(折れ)
	21	16-25	3区	SK10	2層	石錐	3.26	1.65	0.62	2.3	頁岩	先端欠損(折れ)
	22	16-30	3区	SK10	2層	尖頭器	3.63	2.13	0.99	7.7	頁岩	
	23	16-35	3区	SK10	2層	楔形石器	2.70	1.77	0.81	3.3	頁岩	小型のスクレイパー?
26	3	16-16	4区	SK2	1層	石鏃	2.68	1.69	0.55	2.0	頁岩	凸基
	4	16-26	4区	SK2	1層	石錐	3.04	1.86	0.78	3.3	頁岩	
	5	16-36	4区	SK2	1層	楔形石器	1.95	1.40	0.65	1.9	メノウ	小型、全周調整剥離
	6	16-40	4区	SK2	2層	削器	4.33	3.67	1.13	17.4	頁岩	先端欠損(折れ)
	7	16-47	4区	SK2	10・11層	磨製石斧	11.60	5.01	2.39	234.2	頁岩	
	8	17-11	4区	SK2	12層	石皿・凹石	32.96	26.6	4.10	4820	砂岩	大型板状、両面に磨面、上面に凹み3箇所、被熱→一部割れ
	9	17-12	4区	SK2	10・11層	石皿	21.50	27.14	5.72	3700	凝灰岩	上面に顕著な焼面、被熱→割れ
28	4	16-17	4区	SK3	1層	石鏃	1.94	1.39	0.31	0.7	頁岩	
	5	16-41	4区	SK3	1層	二次加工剥片	2.48	2.30	0.70	4.3	頁岩	小型のスクレイパー?
	9	16-42	4区	SK4	堆積土	二次加工剥片	2.34	1.55	0.71	2.3	頁岩	
	10	16-43	4区	SK4	3・6～8層	二次加工剥片	1.79	2.15	1.01	2.8	頁岩	半分欠損(折れ)
	11	16-44	4区	SK4	堆積土	二次加工剥片	1.61	1.32	0.35	0.5	黒曜石	半分欠損(折れ)
	12	16-46	4区	SK4	2・4・5層	二次加工剥片	4.07	3.57	1.58	21.7	頁岩	一側縁に2次加工サイドスクレイパー?
29	4	16-33	4区	SK5	2層	スクレイパー	2.35	4.26	1.39	12.9	メノウ	
	5	16-48	4区	SK5	6～9層	磨製石斧	9.27	5.06	2.58	214.1	砂岩	
	6	17-4	4区	SK5	1～5層	敲石	12.78	3.18	1.71	118.3	砂岩	先端のみ使用

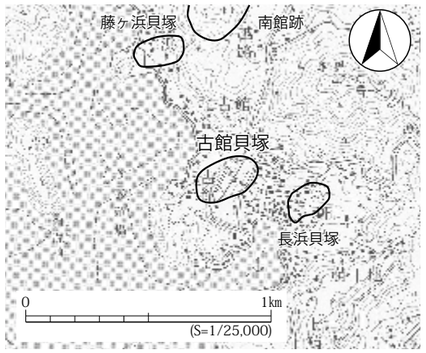
第15表　高谷遺跡出土石器観察表（写真のみ掲載）

写真図版		調査区	遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
16	3	3区	SK5	2層	石鏃	2.19	1.88	0.65	2.2	メノウ	
	12	3区	SK9	3層	石鏃	2.09	1.34	0.17	0.6	頁岩	失敗品?
	15	3区	SK10	2層	石鏃	2.13	1.9	0.59	2.5	頁岩	先端欠損(折れ)
	18	4区	SK5	1層	石鏃	1.48	1.47	0.27	0.7	メノウ	
	19	3区	SK6	2・3層	石錐	2.09	1.87	0.56	2.2	頁岩	先端欠損(折れ)
	22	3区	SK9	1層	石錐	2.14	1.16	0.52	1.1	頁岩	先端欠損(折れ)
	23	3区	SK9	2層	石錐	1.91	1.53	0.65	1.9	頁岩	先端欠損(折れ)
	27	4区	SK2	1層	石錐	2.47	1.84	0.57	2.1	頁岩	先端欠損(折れ)
	28	3区	SK9	2層	尖頭器	2.5	2.12	0.70	3.8	頁岩	石鏃より厚い
	29	3区	SK9	1層	尖頭器	2.8	1.84	0.85	4.3	頁岩	非対称
	31	4区	SK2	5層	尖頭器	3.03	2.17	0.80	4.5	赤色頁岩	赤色
	34	3区	SK10	2層	石核	1.63	2.15	1.00	4.7	頁岩	残核
	45	4区	SK6	2～7層	微細剥離痕剥片	2.51	1.88	0.46	2.6	頁岩	一側縁に刃こぼれ状微細剥離

写真図版		調査区	遺構	層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
16	49	3区	SK1	埋土1層	磨石	6.46	5.67	4.45	261.8	花崗閃緑岩	正面側面～側面に磨面
	50	3区	SK2	埋土2・3層	磨石・敲石	7.26	5.79	4.2	246.6	砂岩	片面に磨面 一部に敲打
	51	3区	SK9	2層	磨石・敲石・凹石	8.63	5.87	4.53	338.5	閃緑岩	
	52	3区	SK10	2層	磨石	5.2	4.95	2.75	106.5	花崗斑岩	小型 やや扁平な円形 両面に磨面
	53	3区	SK2	埋土2・3層	磨石・敲石・凹石	7.76	7.92	6.76	660	花崗閃緑岩	4箇所に4面の磨面
	54	3区	SK9	2層	磨石	12.37	9.33	6.28	1160	デイサイト	両面に磨面
	55	3区	SK2	埋土2・3層	磨石	15.12	8.52	5.61	1150	花崗岩	楕円形 やや扁平 両面に磨面
	56	3区	SK2	埋土2・3層	磨石・敲石	14.68	10.21	8.21	1950	砂岩	両面に磨面 片面端に敲打
	57	3区	SK4	埋土3層	磨石	14.59	9.17	7.65	1590	花崗閃緑岩	楕円形 両面に磨面 扁平ではない
	58	4区	SK2	6・8層	磨石	11.99	8.15	6.57	1000	砂岩	両面に磨面 被熱→ハジケ
	59	4区	SK2	7層	磨石	12.63	8.83	6.6	980	砂岩	両面に磨面→片面被熱→割れ
17	5	4区	SK6	2～7層	磨石	14.95	5.76	4.92	720	凝灰岩	角柱状 両面に磨面
	6	3区	SK2	埋土2・3層	石皿	16.7	18.6	8.22	3930	砂岩	大型 扁平 両面に磨面 被熱→割れ
	7	3区	SK4	埋土3層	石皿	18.45	8.06	10	2820	砂質凝灰岩	片面に磨面 石皿→被熱→割れ
	8	3区	SK7	中～下層	石皿	36.1	9.66	5.95	3360	凝灰岩	石No.2 長大 上面の平坦面に磨面
	9	3区	SK8	埋土2層	石皿・台石	24.7	21.7	13.3	11040	デイサイト	大型塊状 両面に磨面 上面の磨面凹む

第４章　古館貝塚

遺 跡 名：古館貝塚（宮城県遺跡地名表登載番号 63017）
所 在 地：気仙沼市唐桑町鮪立
調査原因：個人住宅建設
調査主体：気仙沼市教育委員会
調査協力：宮城県教育委員会
調査期間：平成 24 年 7 月 20 日～ 8 月 1 日
調 査 員：鈴木實夫、幡野寛治、
　　豊村幸宏・小淵忠司（宮城県支援）
対象面積：467㎡
調査面積：105㎡



第 31 図　古館貝塚の位置

1．調査に至る経緯

古館貝塚は、唐桑半島の付け根に位置し、内湾に突き出た半島状の鞍部に立地する（第 31 図）。昭和 43 年に鼎が浦高等学校により発掘調査が行われ、縄文時代中期末から後期初頭にかけての遺物が多数出土している。今回の調査は個人住宅 1 戸を新築する事業に伴い実施した。調査対象地は遺跡中央部に当たり、現況は畑地である。

2．調査の概要

住宅建設区域に 2 本の東西方向トレンチ（T1・2）を設定し、擁壁設置個所に 1 本の南北方向トレンチ（T3）を設定して、重機と人力により確認調査を行った（第 32 図）。その結果、T1・2 では地山面まで削平が及んでいるものの、T3 では遺構が残存することを確認した。T3 の区域については、工法の変更が困難であることから、引き続いて本発掘調査を実施した。

地表面下 0.2 m前後で見出される明黄褐色粘質シルトの地山面において、土坑 4 基、ピット 2 基を検出した（第 33 図）。検出したすべての遺構について、断面観察を行った上で完掘し、撮影および平面図作成を行って調査を終了した。遺物は縄文土器・石器が整理用コンテナ 3 箱分出土した。

3．調査の成果

【SK1 土坑】

平面形は直径 1.7m の比較的整った円形である。残存深さは 40cm で、壁は鋭角～垂直気味に立ち上がり、南東辺でオーバーハングする。底面は水平である。堆積土中から縄文時代中期中葉の大木 8b 式～後期前葉の南境式の特徴をもつ土器が出土した（第 34 図 1 ～ 8）。

【SK2 土坑】

当発掘区の 4 基の土坑の中で最も残存状態が良い。平面形は直径 1.5m の整った円形である。底面はほぼ水平である。残存深さは 66cm で、壁は鋭角～垂直に立ち上がり、オーバーハングしてフラスコ状を呈する。堆積土中から大木 8b 式～縄文時代後期初頭の門前式の特徴をもつ土器（第 34 図 9 ～ 18）、磨石 2 点（写真図版 19-28・31）が出土した。

【SK3 土坑】

他よりも小型で平面形は直径 1.2m のやや歪な円形である。残存深さは 22cm で、壁は垂直気味に立ち上がり一部でオーバーハングする。底面は水平で、中心から北西壁際に延びる浅い溝が伴う。遺物は出土していない。

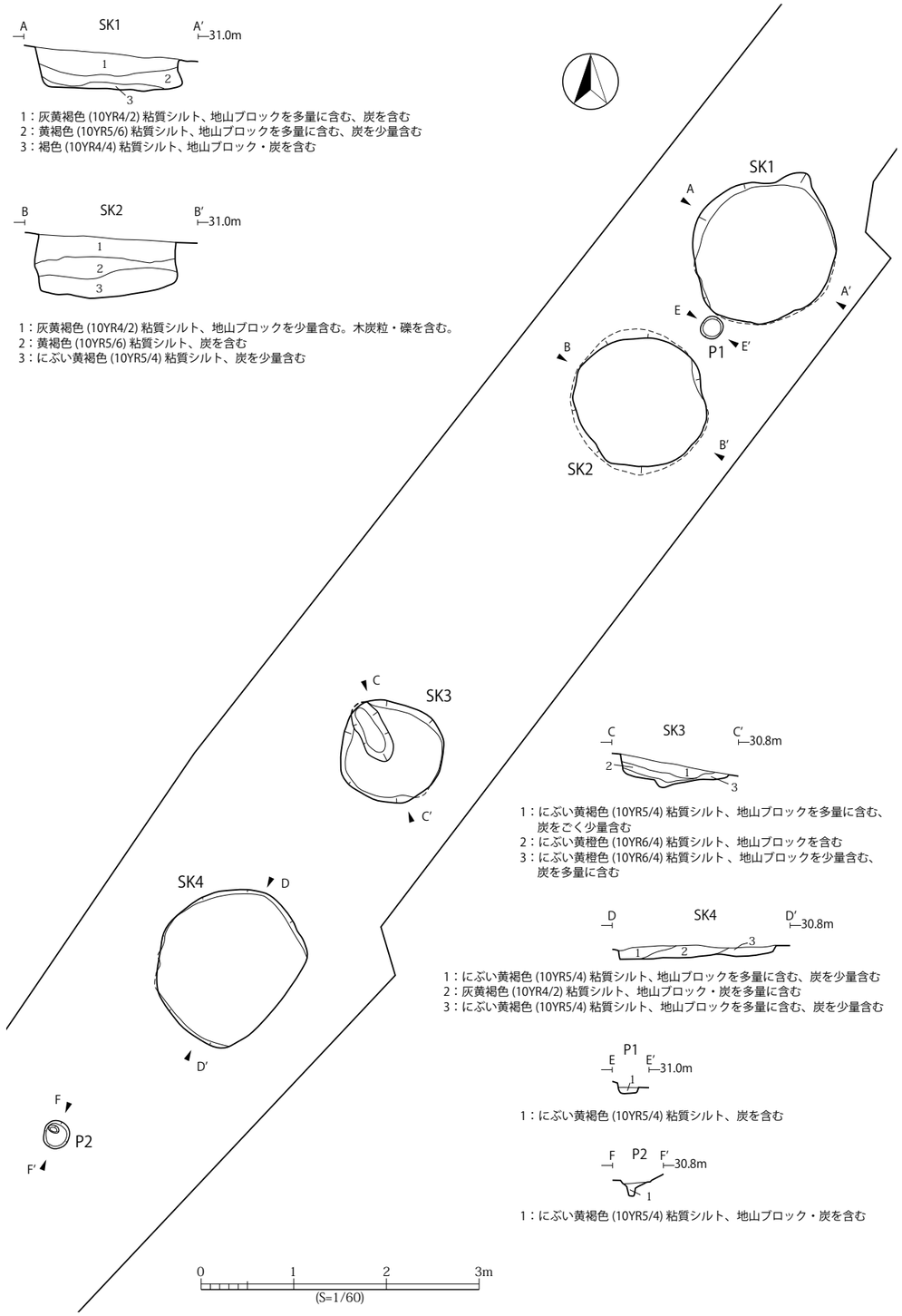
【SK4 土坑】

南東側で削平が底面以下まで及んでいるが、平面形は直径 1.7m の円形と推定される。底面はほぼ水平で、残存深さは 14cm で、壁は垂直に立ち上がる。堆積土中から大木 8b 式や南境式の特徴をもつ土器（第 35 図）、石棒 1 点（写真図版 19-34）、棒状の磨石 2 点（写真図版 19-32・33）、磨石・敲石類 2 点（写真図版 19-29・30）が出土した。

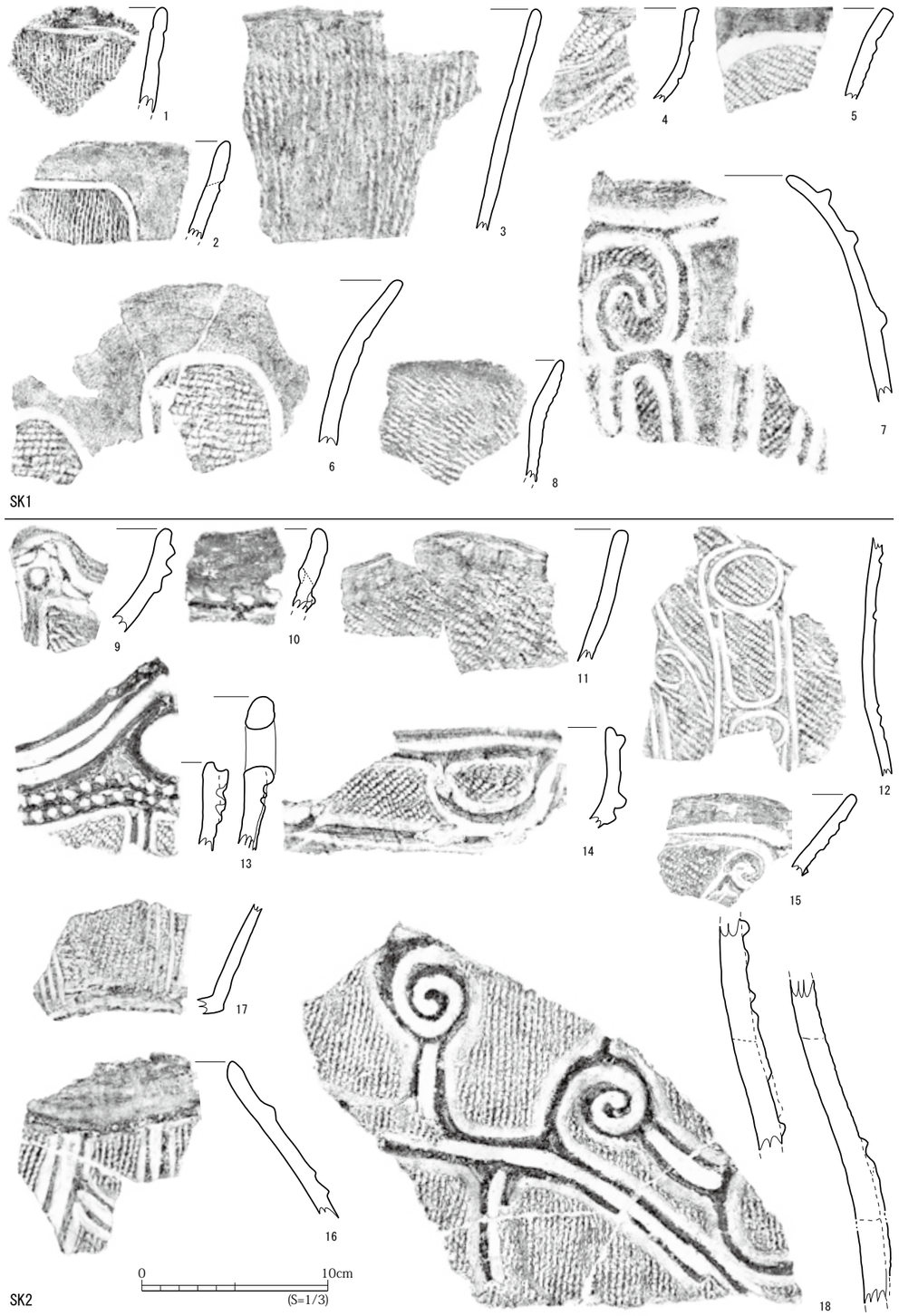
【ピット】

2 基検出した。P1 は直径 0.2 mの円形、P2 は直径 0.3 mの円形を呈する。残存状態は良好ではなく、

第 32 図　古館貝塚トレンチ配置図



第 33 図　古館貝塚 T3 遺構平面図・断面図



第 34 図　古館貝塚 SK1・2 出土遺物

第 35 図　古館貝塚 SK4 出土遺物

柱痕跡などは確認できなかった。P1 から貝殻片が出土した。

4．まとめ

SK1 ～ 4 土坑は、平面形が円形で、底面がほぼ水平、壁が鋭角～垂直に立ち上がるという共通した特徴をもつ。堆積土はいずれも黄褐色基調で、多くで地山ブロックを多量に含み、壁崩落の影響が推定される。以上から、これらはフラスコ状を呈する貯蔵穴と考えられる。規模は長軸 1.2 ～ 1.7m で、大型と小型がある。大型は 3 基で 1.5 ～ 1.7m にまとまり、底面施設は伴わない。小型は SK3 のみで底面に溝をもつ。

第 16 表　古館貝塚土坑一覧表

遺構No.	平面形	長軸（m）	短軸（m）	深さ（cm）	特徴
SK1	円形	1.7	1.6	40	
SK2	円形	1.5	1.4	66	
SK3	円形	1.2	－	22	底面に溝
SK4	円形？	1.7	1.4 以上	14	

堆積土中からは縄文時代中期中葉の大木 8b 式～後期前葉の南境式までの各型式の特徴をもつ土器が出土している。土坑同士には重複がないことからこれらは同時期の可能性が高く、後期前葉の貯蔵穴群と考えられ、中期中葉以降の包含層を掘り込んで構築されたが、包含層が削平により失われたと推定される。

第 17 表　古館貝塚出土縄文土器観察表（図示資料）

遺物図版	写真図版	遺構	層位	器種	型式	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特　　徴
34	1	19-1	SK1	1 層	深鉢	門前～南境	—	—	—	口縁部に狭い無文帯、沈線文、撚糸文 (R 縦回転)
	2	19-2	SK1	1 層	深鉢	大木 10 ～門前	—	—	—	沈線区画文、撚糸文 (R 縦回転磨消)
	3	19-3	SK1	1 層	深鉢	大木 10 ～門前？	—	—	—	わずかに外傾、撚糸文 (R 縦回転)
	4	19-5	SK1	3 層	深鉢	大木 10?	—	—	—	口縁内湾、口縁まで縄文、沈線区画文、磨消縄文 (RL 縦回転)
	5	19-4	SK1	1 層	深鉢	大木 9 ～ 10	—	—	—	沈線区画文、充填？縄文（RL 横回転）
	6	19-6	SK1	1 層	深鉢	大木 9 ～ 10	—	—	—	波状口縁、沈線区画文、磨消縄文 (LR 縦回転)
	7	19-9	SK1	1 層	深鉢	大木 9	—	—	—	渦巻・楕円文、隆帯→凹線、磨消縄文 (RL 縦回転)
	8	19-7	SK1	1 層	深鉢	大木 8a?	—	—	—	ややキャリパー風、縄文 (L 縦回転)
	9	19-11	SK2	1 層	浅鉢	門前式	—	—	—	鎮状隆帯、ボタン状貼付文、沈線区画文、磨消縄文 (摩滅)
	10	19-13	SK2	1・2 層	深鉢	大木 10	—	—	—	口縁部無文、隆帯とそれに沿う刺突列
	11	19-12	SK2	1 層	深鉢	大木 9?	—	—	—	口縁部無文、縄文（RL 横回転）
	12	19-14	SK2	1 層	深鉢	大木 9	—	—	—	沈線による楕円文・渦巻文、縄文 (LR 縦方向)、
	13	19-15	SK2	1・2 層	深鉢	大木 8b	—	—	—	波状口縁、口縁端部に沈線、波頂部に円形透かし、刺突列、隆沈文、縄文 (LR 縦方向)
	14	19-17	SK2	1 層	深鉢	大木 8b	—	—	—	隆沈文 , 縄文 (LR 横回転)
	15	19-16	SK2	1・2 層	深鉢	大木 8b?	—	—	—	緩い大波状口縁、沈線を沿わせた粘土紐貼付、渦巻文、縄文 (LR 縦方向)
	16	19-18	SK2	1・2 層	深鉢	大木 8b	—	—	—	波状口縁、口縁部無文、隆沈文、撚糸文 (L 縦方向)
	17	19-19	SK2	1 層	深鉢	大木 8b	—	—	—	3 条ないし 2 条 1 組の沈線を垂下、撚糸文 (L 縦方向)
	18	19-22	SK2	1 層	深鉢	大木 8b	—	—	—	隆沈線、渦巻文、撚糸文 (L 縦方向)
35	1	19-24	SK4	2 層	深鉢	南境	—	—	—	沈線文、ボタン状貼付文、盲孔、縄文 (RL 横回転)
	2	19-23	SK4	1 層	深鉢	南境	—	—	—	沈線文、縄文 (摩滅)
	3	19-25	SK4	2 層	深鉢	南境	—	—	—	区画沈線文、撚糸文 (R 縦方向)
	4	19-26	SK4	1 層	深鉢	大木 8b	—	—	—	隆沈文による渦巻文・楕円文、縄文 (RL 縦方向)

第 18 表　古館貝塚出土縄文土器観察表（写真のみ掲載）

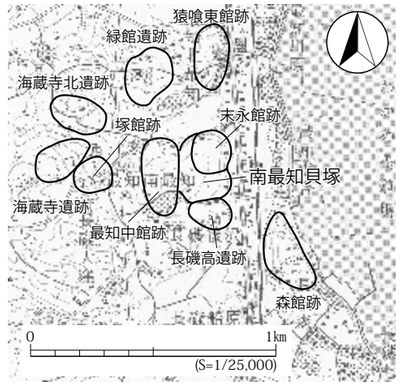
写真図版		遺構	層位	器種	型式	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特　　徴
19	8	SK1	1 層	深鉢	大木 9	—	—	—	隆帯区画文→凹線、撚糸文 (L 縦回転)
	10	SK1	1 層	深鉢	大木 10 ～門前？	—	—	—	わずかに外傾、撚糸文
	20	SK2	1・2 層	深鉢	大木 10 後	—	—	—	口縁部無文、口縁内傾
	21	SK2	1・2 層	深鉢	大木 8b	—	—	—	隆沈文、縄文 (RL 縦方向)

第 19 表　古館貝塚出土石器観察表（写真のみ掲載）

写真図版		遺構	層位	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量 (g)	石材	特　　徴
19	27	SK1	1 層	石棒	31.35	11.64	7.74	3940	凝灰岩	敲打と各面研磨で形を整えている、表面上部に凹み
	28	SK2	1・2 層	磨石	10.97	8.15	5.08	660	砂岩	楕円形、両面に磨面
	29	SK4	1 層	磨石・敲石	8.06	6.47	4.42	344	砂岩	円形
	30	SK4	1 層	磨石	5.85	5.25	5.72	323.1	砂岩	6 面体状、2 面に磨面
	31	SK2	1・2 層	磨石	9.71	4.14	3.25	206	凝灰岩	やや扁平な円筒状、片面に磨面
	32	SK4	1 層	棒状磨石	17	2.9	3.04	222.1	ホルンフェルス	平らに割れた面と側面に磨面、角棒状
	33	SK4	1 層	棒状磨石	18.3	4.73	2.27	276.1	凝灰岩	扁平な角棒状、両面と一側縁に磨面
	34	SK4	1 層	石棒	20.65	3.96	1.72	243	ホルンフェルス	未製品

第５章　南最知貝塚

遺 跡 名：南最知貝塚（宮城県遺跡地名表登載番号 59035）
所 在 地：気仙沼市最知南最知 46 番地
調査原因：平成 24 年度 1・2 次調査　個人住宅建設
調査主体：気仙沼市教育委員会
調査協力：宮城県教育委員会
調査期間：1 次　平成 24 年 6 月 13 日～ 6 月 19 日
　　2 次　平成 24 年 8 月 6 日～ 8 月 10 日
調 査 員：幡野寛治、三好秀樹・遠藤　武（宮城県支援）
対象面積：1 次　2,043㎡　　2 次　373㎡
調査面積：1 次　400㎡
　　2 次　155㎡（うち本発掘調査 130㎡）



第 36 図　南最知貝塚の位置

1．遺跡の概要

南最知貝塚は、最知南最知地内にあり、気仙沼湾に向かって延びる台地の先端部付近に位置する（第 36 図）。縄文時代の貝塚、古墳時代の集落跡として知られており、昭和 43 年に一部が市史跡に指定されている。昭和 45 年に鼎が浦高等学校が貝層の調査を行い、縄文時代前期末から中期中葉にかけての遺物を多数発見した。また、昭和 53 年に市教育委員会が行った調査では、縄文時代の竪穴建物跡と土坑墓、古墳時代後期の竪穴建物跡などを検出した（気仙沼市教育委員会 1980）。

2．調査に至る経緯

遺跡範囲の中央と南西端の 2 箇所で東日本大震災の被災者による個人住宅建築が行われることから確認調査及び一部で本発掘調査を実施した。中央が平成 24 年度 1 次調査地点で丘陵頂部平坦面から東斜面にかけての地点で貝層が分布するとされる範囲にかかり、貝塚と重複して登録されている末永館跡南部にあたる（第 37 図）。南西端が 2 次調査地点で丘陵南東斜面にあたる。現況はともに畑地である。

3．調査の概要

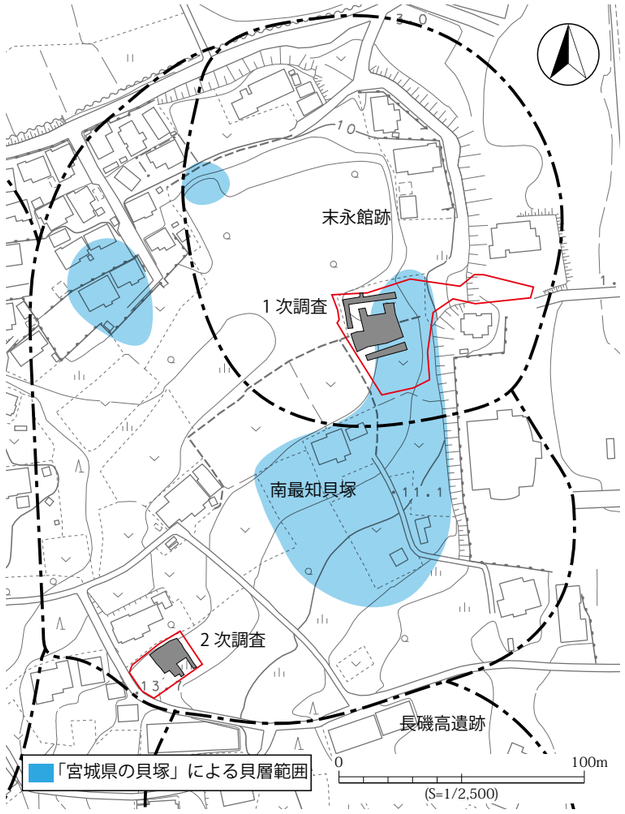
(1) 平成 24 年度 1 次調査

道路及び建物予定区域に T1 ～ T3 の調査区を設定し、重機による表土除去の後、遺構検出を行った。基本層序は表土、遺物包含層、地山となっており、地山及び遺物包含層上面から、溝跡 2 条、土坑 20 基、土器埋設炉・ピットなどの遺構を検出した（第 38 図）。遺物は土師器・須恵器・縄文土器・石器などが整理用コンテナ 2 箱分と少量の獣骨・貝片が出土した。以上の結果を受けて事業者と協議

を行ったところ、対象地内において遺構の損壊は避けられることとなった。なお遺構の性格把握のため溝跡の一部で掘り下げを行った。調査終了後、調査区を埋め戻し遺構は現地保存された。

(2) 平成 24 年度 2 次調査

遺構面まで掘削が及ぶ可能性のある区域に調査区を設定し、重機による表土除去の後、遺構検出を行った。表土直下で地山となり、地山面で竪穴建物跡 1 軒、溝跡 1 条、土坑 1 基、ピット 27 基を確認した（第 39 図）。遺物は土師器・須恵器・縄文土器など整理用コンテナ 2 箱分が出土した。調査結果を受けて、申請者、施工業者、設計業者と遺構の保存について協議を行ったところ、竪穴建物跡が発見された北西部区域 25㎡については、設計変更により保存されることとなった。保存区域の遺構については、遺構の性格を把握するための最小限の調査を行い、調査終了後は遺構面を養生した上で埋め戻した。保存区域外の 130㎡については本発掘調査を行った。



第 37 図　南最知貝塚調査箇所

4. 調査の成果

(1) 平成 24 年度 1 次調査地点

【SD1 溝跡】

T1 北部で検出した。東西方向に延びており、南辺部分を 22.0 mにわたり検出した。幅は判明しないが、3.7 m以上である。遺物は出土していない。位置関係から、発掘区の北に隣接する末永館跡主郭に伴う遺構の可能性が考えられる。

【SD2 溝跡】

T1 から T2 にかけて検出した。SD1 の南方約 4 mに平行して延びる溝である。東西 20.5 m分を検出した。最大幅は 4.5 mである。掘り下げを行った西端部における検出面からの深さは 1.7 mである。遺物は出土していない。SD1 と同様に、発掘区の北に隣接する末永館跡主郭に伴う遺構の可能性が考えられる。

【SI3 竪穴建物跡】

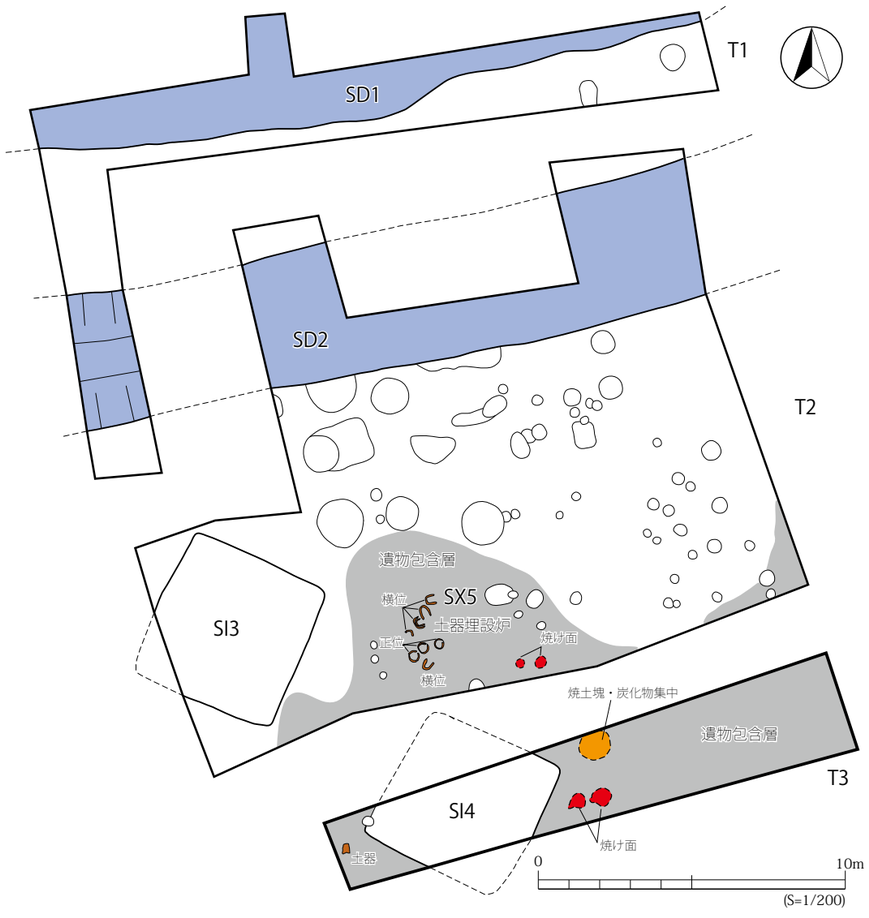
T2 の西端で検出した。西隅部分が調査区外である。平面形は東西 4.8 m、南北 5.0 mの方形である。非ロクロの土師器の甕（写真図版 21-1）が出土した。土器の特徴から奈良時代頃のものと考えられる。

【SI4 竪穴建物跡】

T3 の西半で検出した。検出部分から、平面形は東西 5.0 m、南北 4.8 mの方形と推定される。遺物は出土していないが、形状・規模及び方向を同じくする SI1 と同時期の建物跡である可能性が高い。

【SX5 土器埋設炉】

T2 の南部で 8 基の埋設土器が隣接して検出された。いずれも縄文土器深鉢とみられ、5 基が横位、3 基が正位である。いずれの土器の周囲にも被熱の影響がみられ、炉跡と考えられる。掘り下げを行なっていないため、詳しい埋設・重複状況、土器型式などは不明である。



第 38 図　南最知貝塚平成 24 年度 1 次調査遺構配置図

【土坑】

平面形が円形や方形のものが見つかっている。円形のものは直径 1.1 ～ 1.6m にまとまり、形態・規模から縄文時代の貯蔵穴の可能性がある（写真図版 21-4）。

【焼面・ピット】

遺物包含層の上面及び周辺を中心に検出された。これらは土器埋設炉群とともに、包含層を掘り込んで構築された竪穴建物跡の床面施設の可能性も考えられる。

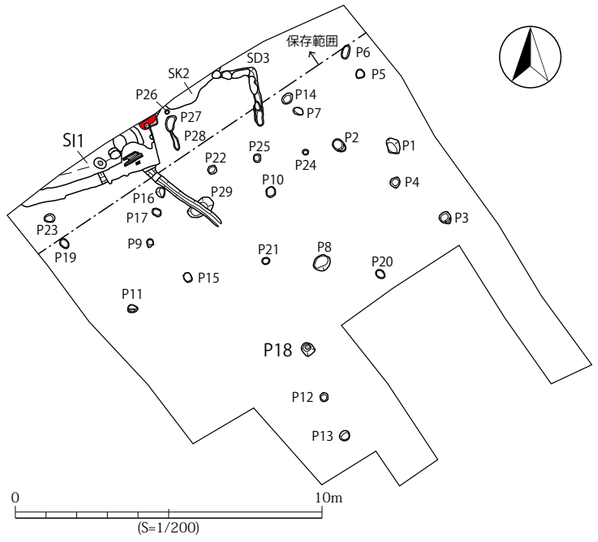
【遺物包含層】

T2 の南半から T3 にかけて分布する灰褐色土層である。T2・T3 では遺構検出時に多数の縄文土器・石器が出土しており、それらの多くはこの包含層中のものと考えられる。土器は縄文時代前期末～中期中葉のもので（写真図版 21-2・3・5・8 ～ 22）、層の形成時期を示している。石器は、石核（写真図版 21-23）、小型の打製石斧（写真図版 21-24）、石皿（写真図版 21-26）、磨石（写真図版 21-30）、敲石（写真図版 21-25）、剝片が出土した。

（2）平成 24 年度 2 次調査地点

【SI1 竪穴建物跡】

調査区北西部で竪穴の南辺から南東角部を検出した。南辺は 4.7 mで、全体形状は一辺 5.0 m前後の方形になると推測される。床面の一部を露出させる程度まで掘り下げ、精査を行った。カマド、柱穴、周溝、貯蔵穴、外延溝などを検出し、中央寄りでは貼床を確認した。堆積土中からロクロ土師器高台坏（第 40 図 1）が出土した。

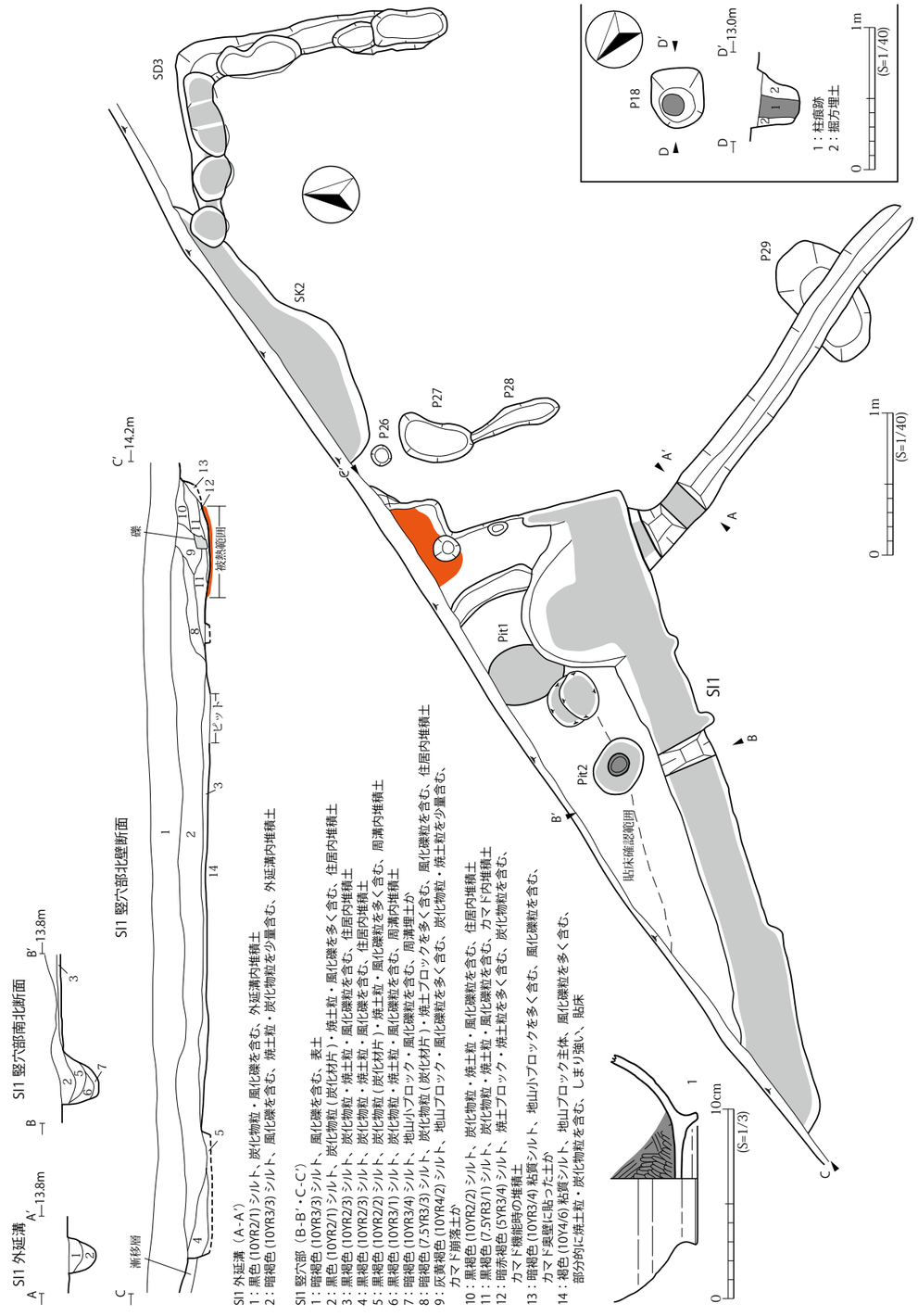


第 39 図　南最知貝塚平成 24 年度 2 次調査遺構配置図

［カマド］南東隅から 1.5 m北の東辺壁際で、カマド火床とみられる被熱面を検出した。規模が一辺 5.0 mであるとすると、カマドは東辺の中寄りに位置する。奥壁が外側に張り出していることから、屋外に排煙する構造をとっていたものとみられる。奥壁には貼土が認められる。袖の構造については判然としないが、被熱面の南端に直径 20cmの窪みが認められ、カマド袖石の抜けた跡である可能性がある。堆積土中から須恵器坏（写真図版 21-28）、土師器甕（写真図版 21-29）が出土した。

［柱穴］床面において、Pit1・2 を検出した。位置から主柱穴の南東隅柱の可能性がある。Pit1 は長軸 50cm、Pit2 は長軸 40cm の楕円形を呈し、Pit2 で直径 16cm の柱痕跡が認められる。

［周溝］南壁際で検出した。幅 40cmで西辺に延びると見られる。断ち割り部における深さは、床面から 25cm、堆積土は自然堆積で、壁材の痕跡などは認められない。



第 40 図　南最知貝塚平成 24 年度 2 次調査 SI1 ほか

［貯蔵穴］南東隅付近、カマドに向かって右側で検出した。上端は周溝と連続しているが、重複関係は不明である。平面形は直径 1.0 mの円形とみられる。堆積土上面から板状の炭化材が出土し、穴を覆う蓋材の可能性が考えられる。

［外延溝］南東隅付近から南東へ延びる。3.0 mを検出し、上幅 25 ～ 30cm、深さは 20cm である。調査対象地は南東に向かい緩やかに下る地形であり排水機能をもつものと推定される。

〔時期〕出土土器から 9 世紀前半頃と判断される。

【SK2 土坑】

調査区北端で検出した。検出部分の最大長が 2.2 mを測る大型の土坑であるが、発掘区外にさらに広がるとみられ、全体形状と規模は不明である。東に隣接する SD3 との関係は判然としない。詳細不明の土器小片 1 点が出土した。

【SD3 溝跡】

発掘区北端で検出した。L 字状に総長で 3.1 mを検出した。溝底面からはピットを 6 基が近接して検出され、一部ピット底面まで掘り下げを行った。柱抜き取り痕か柱痕跡の可能性があり、堆積土中からは縄文前期のものとみられる土器片が出土していることから、竪穴建物の周溝および壁柱穴の可能性も考えられる。

【ピット群】

柱穴の可能性のある小型の穴を 26 基検出した。多くは直径 30㎝前後の不整な円形を呈する。残存状態は良好ではなく、検出面からの深さが 20㎝に満たないものが大半を占める。遺構内堆積土は、地山ブロック混じりの黒褐色シルトを基本とする。P18 では柱痕跡が認められた。建物を構成するようなまとまりは確認されなかった。P1 から詳細不明の土器片が 1 点出土した。

5．まとめ

1 次調査地点では、末永館跡に伴う堀とみられる溝跡、奈良時代とみられる竪穴建物跡、縄文時代前期末～中期中葉とみられる土器埋設炉、土坑群、2 次調査地点では、平安時代の竪穴建物跡などを検出した。南最知貝塚は縄文時代の貝塚および古墳時代の集落跡として知られる遺跡であるが、今回 2 地点で新たに古代の遺構を検出した。丘陵上にはこの時期の遺構も広く分布していることが推定される。また、気仙沼市域では、古代の遺構の発見例は稀で、この時期の様相を考える上で貴重な成果である。

第 20 表　南最知貝塚出土土器観察表（図示資料）

遺物図版		写真図版	調査区	遺構	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特　　徴
40	1	21-27	2 次	SI01	堆積土	土師器	高台坏	—	7.0	—	ロクロ土師器，内面黒色処理

第 21 表　南最知貝塚出土土器観察表（写真のみ掲載）

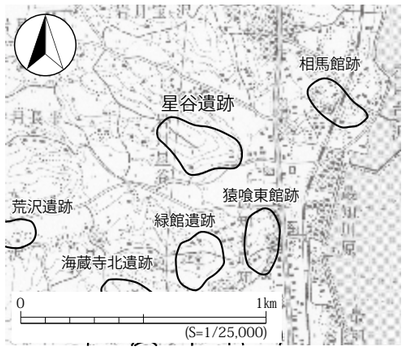
写真図版		調査区	遺構	層位	種別	器種	型式	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特　　徴
21	1	1 次	T2	SI1 検出	土師器	甕		—	—	—	
	2	1 次	T2	検出面	縄文土器	深鉢		—	—	—	隆帯
	3	1 次	T2	検出面	縄文土器	深鉢		—	—	—	沈線 , 縄文 (LR 縦回転)
	4	1 次	T2	土坑	縄文土器	深鉢		—	—	—	縦位貼付文
	5	1 次	T2	検出面	縄文土器	深鉢		—	—	—	口縁部肥厚 , 貼付文 , 不明縄文
	6	1 次	T3	検出面	須恵器	甕	?	—	—	—	
	7	1 次	T3	検出面	須恵器	甕	?	—	—	—	
	8	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢		—	—	—	口縁内面に稜 , 小波状粘土紐貼付文 , 縄文 (LR 横回転)
	9	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	大木 8a	—	—	—	結節縄文 (LR 縦回転)
	10	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	大木 7b	—	—	—	波頂部突起 縦位隆帯上に爪による連続刺突
	11	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	大木 7b	—	—	—	連続弧状沈線文 口縁内側に稜 , 縄文 (LR 横回転)
	12	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	?	—	—	—	横位押圧縄文 (LR), 結節縄文 (LR 横回転)
	13	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	大木 7a	—	—	—	折返し口縁形状
	14	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	大木 7a	—	—	—	折返し口縁形状 , 縄文 (L 縦回転)
	15	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	大木 7a	—	—	—	金魚鉢形 多条 (3 本一組) 沈線山形文 隆帯上に三角形彫去
	16	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	?	—	—	—	No.130 と同一か？櫛歯状工具による
	17	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	大木 7a	—	—	—	結節縦回転、縄文 (LR)
	18	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	大木 7a	—	—	—	結節縄文 (LR 横回転)
	19	1 次	T3	検出面	縄文土器	浅鉢	?	—	4.2	—	無文
	20	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	大木 6	—	—	—	口縁部肥厚
	21	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	大木 6	—	—	—	貼付文
	22	1 次	T3	検出面	縄文土器	深鉢	大木 6	—	—	—	半裁竹管による幾何学文
	28	2 次	SI01	カマド内堆積土	須恵器	坏	?	—	—	—	
	29	2 次	SI01	カマド内堆積土	土師器	甕		—	—	—	

第 22 表　南最知貝塚出土石器観察表（写真のみ掲載）

写真図版		調査区	遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特　　徴
21	23	1 次	T3	検出面	石核	6.4	7.85	3.32	188.5	頁岩	
	24	1 次	T3	検出面	打製石斧	8.9	6.44	2.78	213.4	頁岩	上下端打ち欠き、下辺に (使用による ?) 微細剥離
	25	1 次	T3	検出面	敲石	7.24	4.89	2.55	147.6	デイサイト	
	26	1 次	T3	検出面	石皿	10.59	7.21	5.4	850	砂岩	厚板状、両面に磨面、割れ
	30	2 次	SI1	検出面	磨石	8.94	6.12	4.26	344.1	デイサイト	楕円形、両面に磨面

第６章　星谷遺跡

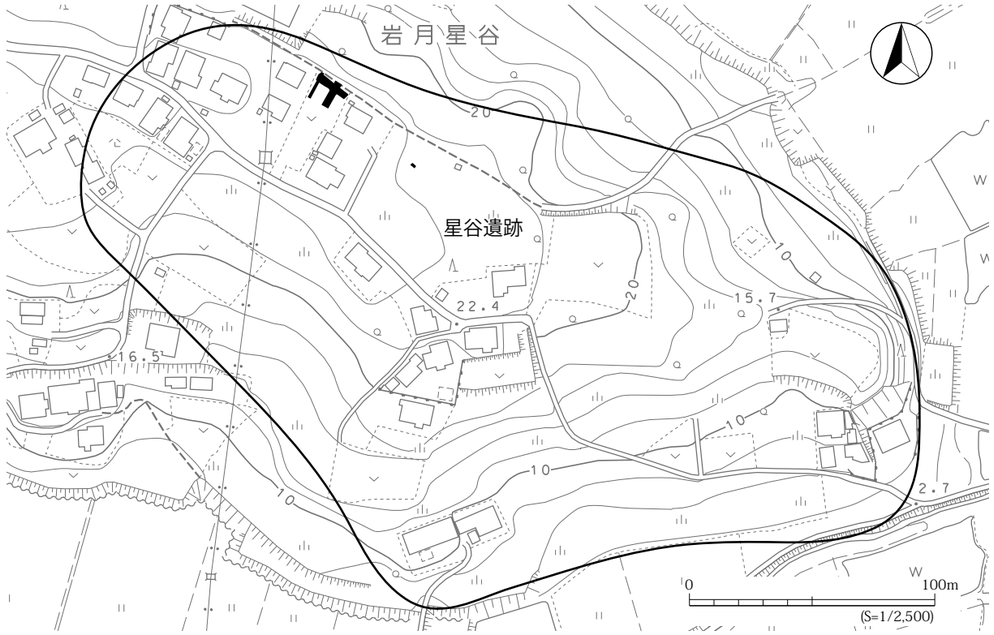
遺 跡 名：星谷遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号 59104）
所 在 地：気仙沼市岩月星谷 92-1
調査原因：個人専用住宅建設
調査主体：気仙沼市教育委員会
調査協力：宮城県教育委員会
調査期間：平成 24 年 9 月 21 日～ 10 月 1 日
調 査 員：幡野寛治、三好秀樹・遠藤　武（宮城県支援）
対象面積：313.86㎡
調査面積：45㎡



第 41 図　星谷遺跡の位置

１．調査に至る経緯

星谷遺跡は岩月星谷に所在し、気仙沼市の南部、岩倉山（294 m）から気仙沼湾に向かって延びる標高約 25 mの丘陵上に位置する（第 41 図）。個人住宅１戸の新築に伴い、平成 24 年 9 月 22 日に確認調査を実施した。対象地は遺跡北端部の平坦面から北斜面にあたり（第 42 図）、北斜面周辺から縄文時代の遺物包含層が確認された。この箇所が擁壁設置により壊されることとなり本発掘調査を行った。



第 42 図　星谷遺跡調査箇所

２．調査の概要

擁壁設置部分に調査区を設定し調査を行った。基本層序は表土、遺物包含層、旧表土、地山である。地山面で竪穴建物跡１棟、土坑１基を検出した（第 44 図）。遺物は縄文土器・石器が整理用コンテナ２箱分出土した。

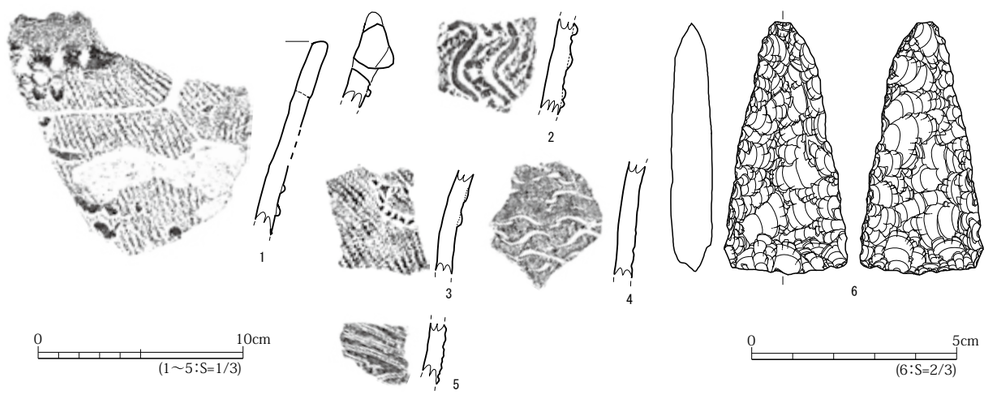
３．調査の成果

【遺物包含層】

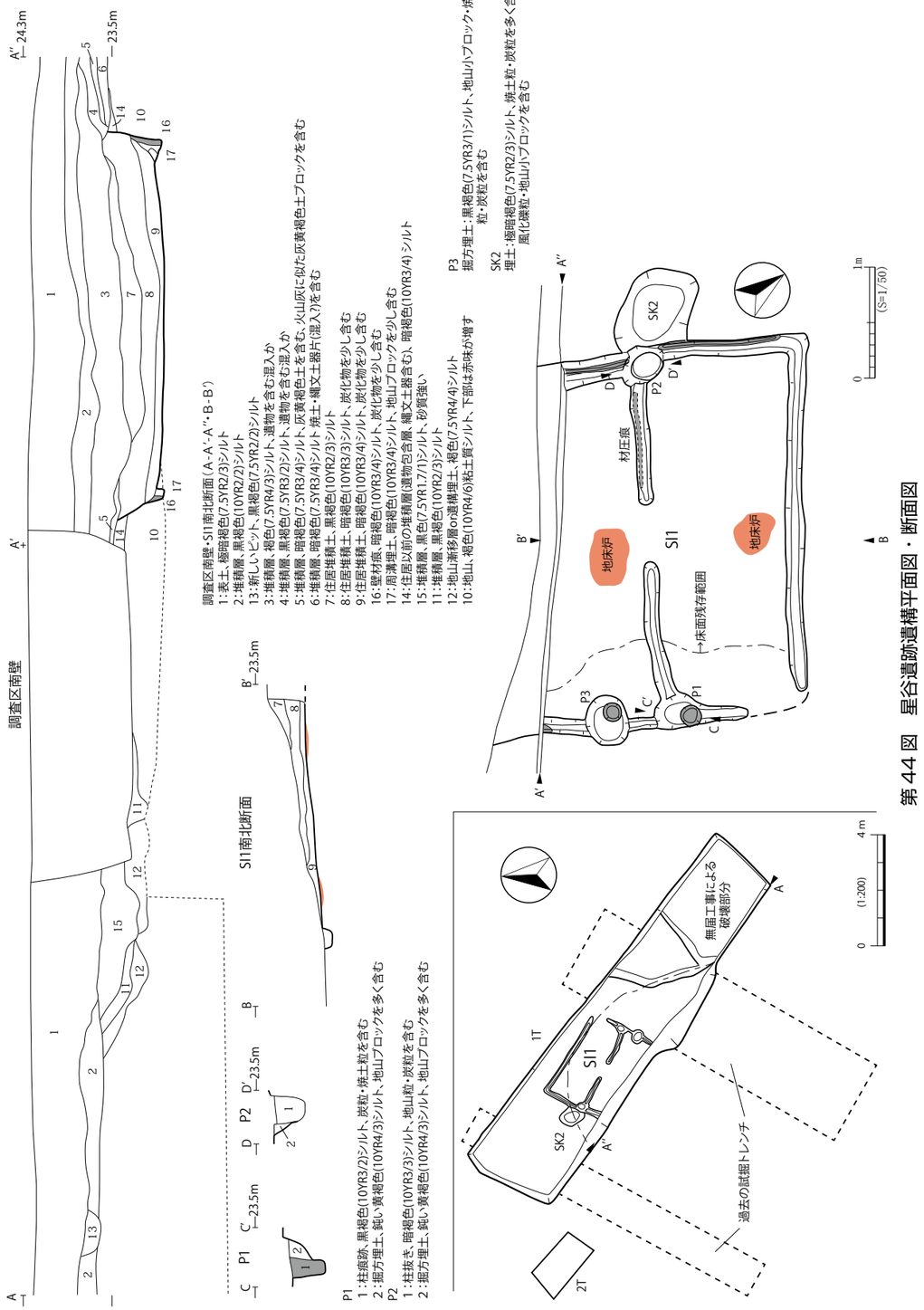
調査区の中央部周辺に分布する。断面図２～６層は後世に削平されたのち堆積した層と考えられ、遺物を含むが混入とみられる。これより下層部分が本来の遺物包含層である。東側では厚さ 30cm であるが、西側では削平により残存状況は部分的である。遺物の含有量は少ない。層中から、縄文時代前期前葉～後葉の深鉢型土器（第 43 図１～５）、石篦（第 43 図６）、磨石・敲石（写真図版 22-7・8）、石棒とみられる石製品破片（写真図版 22-9）が出土した。

【SI1 竪穴建物跡】

調査区西寄りの箇所で北端部を検出した。包含層との前後関係は判然としない。平面形は東西約 3.5m、南北 2.2m 以上の長方形で、壁は垂直に立ち上がり、深さは調査区南壁で 40cm である。床面はほぼ水平で、上面から柱穴３基（P1 ～ 3）、周溝、東西方向の溝跡２条、地床炉２基を検出した。柱穴はいずれも壁際に位置し、長軸 45cm の楕円形を呈し、深さは 30 ～ 40cm である。P1・2 では直径 18cmの柱痕跡が認められ、P3 では柱を抜き取った痕跡が認められる。竪穴の内側では柱穴は見つかっていないため、これらが主柱穴と考えられる。周溝は幅 15 ～ 20cm、深さ 10cm で、一部に幅 5cm 程の壁材痕が認められる。溝は P1、P2 から竪穴中軸に向かって延び、西側の溝では底面に材の圧痕が認められ、間仕切りと考えられる。地床炉は中軸上に約 1m の間隔を開けて並ぶ。火床範囲は北側が 40 × 30cm、南側が 50 × 35cm である。遺物は（第 45 図１～ 10）、床面直上および堆積土中から縄文土器（第 45 図２～４・６～ 10）、打製石斧（第 45 図５）が出土した。土器はいずれも大木５式の範疇で捉えることができ、遺構の時期は縄文時代前期後葉と考えられる。



第 43 図　星谷遺跡遺物包含層出土遺物



調査区南壁・SI1南北断面（A-A'-A''・B-B'）
1:表土、極暗褐色(7.5YR2/3)シルト
2:堆積層、黒褐色(10YR2/2)シルト
3:堆積層、褐色(7.5YR4/3)シルト、遺物を含む混入か
4:堆積層、黒褐色(7.5YR3/2)シルト、遺物を含む混入か
5:堆積層、暗褐色(7.5YR3/4)シルト、灰黄褐色土を含む、火山灰に似た灰黄褐色土ブロックを含む
6:堆積層、暗褐色(7.5YR3/4)シルト 焼土・縄文土器片(混入)を含む
7:住居堆積土、黒褐色(10YR2/3)シルト
8:住居堆積土、暗褐色(10YR3/3)シルト、炭化物を少し含む
9:住居堆積土、暗褐色(10YR3/4)シルト、炭化物を少し含む
16:壁材痕、暗褐色(10YR3/4)シルト、炭化物を少し含む
17:周溝埋土、暗褐色(10YR3/4)シルト、地山ブロックを少し含む
14:住居以前の堆積層(遺物包含層、縄文土器含む)、暗褐色(10YR3/4)シルト
15:堆積層、黒色(7.5YR1.7/1)シルト、砂質強い
11:堆積層、黒褐色(10YR2/3)シルト
12:地山漸移層or遺構埋土、褐色(7.5YR4/4)シルト
10:地山、褐色(10YR4/6)粘土質シルト、下部は赤味が増す

P1
1:柱痕跡、黒褐色(10YR3/2)シルト、炭粒・焼土粒を含む
2:掘方埋土、鈍い黄褐色(10YR4/3)シルト、地山ブロックを多く含む
P2
1:柱抜き、暗褐色(10YR3/3)シルト、地山粒・炭粒を含む
2:掘方埋土、鈍い黄褐色(10YR4/3)シルト、地山ブロックを多く含む
P3
掘方埋土:黒褐色(7.5YR3/1)シルト、地山小ブロック・焼土粒・炭粒を含む
SK2
埋土:極暗褐色(7.5YR2/3)シルト、焼土粒・炭粒を多く含む 風化礫粒・地山小ブロックを含む

第 44 図　星谷遺跡遺構平面図・断面図

（1 ～ 5：堆積土、6 ～ 10：床面直上）

第 45 図　星谷遺跡 SI1 竪穴建物跡出土遺物

【SK2 土坑】

SI1 の西辺に隣接して検出された。平面形は長軸 85cm、短軸 60cm の楕円形である。遺物は出土していない。SI1 との関係は不明である。

4．まとめ

遺跡が立地する丘陵の丘陵頂部平坦面北辺を調査し、竪穴建物跡と遺物包含層を検出した。竪穴建物跡は平面形が長方形で壁際に柱を配置する構造で、内部には間仕切りをもち、中軸上に地床炉が複数並ぶとみられ、縄文時代前期後葉の長方形の大型竪穴建物跡の可能性がある。丘陵頂部平坦面周辺にはこの時期の住居が分布し集落が形成されていたと推定される。平坦面から斜面にかけては、縄文時代前期前葉～後葉頃の遺物包含層が分布すると推定されることから、集落の時期は前期前葉まで遡る可能性がある。

第 23 表　星谷遺跡出土土器観察表（図示資料）

遺物図版		写真図版	遺構	層位	器種	型式	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特　　徴
43	1	22-1		包含層	深鉢	大木 5	—	—	—	鋸歯状隆帯，粘土紐貼付による鋸歯状文，穿孔，撚糸文 (L 縦回転)
	2	22-2		包含層	深鉢	大木 4 ～ 5	—	—	—	粘土紐貼付による梯子状文，縄文 (Lr? 横回転)
	3	22-3		包含層	深鉢	大木 2b ～ 3	—	—	—	刻みのある粘土紐貼付文，縄文 (RL 横回転)
	4	22-4		包含層	深鉢	大木 2b	—	—	—	S 字状連鎖沈文
	5	22-5		包含層	深鉢	大木 2a	—	—	—	木目状撚糸文 (L)
45	1	22-10	SI1，他	検出面	深鉢	前期中葉～末葉	12.2	—	—	撚糸文 (L)
	2	22-11	SI1	堆積土	深鉢	大木 5 ～ 6	—	—	—	刺突
	3	22-12	SI1	堆積土	深鉢	大木 5 ～ 6	—	—	—	刻みのある横位隆帯
	4	22-13	SI1	堆積土	深鉢	大木 5	—	—	—	半裁竹管による縦位・斜位沈線文，縄文 (RL 横回転)
	6	22-14	SI1	床面直上	深鉢		—	—	—	半裁竹管による山形文，縄文 (摩滅)
	7	22-15	SI1	床面直上	深鉢		—	—	—	沈線文，刺突列
	8	22-16	SI1	床面直上	深鉢	大木 4 ～ 5	—	—	—	口縁内面に粘土紐貼付による渦巻文 (剥落)
	9	22-18	SI1	床面直上	深鉢	大木 4 ～ 5	—	—	—	折返し粘土紐による鋸歯状文，縄文 (Lr? 横回転)
	10	22-17	SI1	床面直上	深鉢		—	14.0	—	無文

第 24 表　星谷遺跡出土石器観察表（図示資料）

遺物図版		写真図版	遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特　　徴
43	6	22-6		包含層	石篦	6.12	2.96	1.02	18.6	頁岩	
45	5	22-19	SI1	堆積土	打製石斧	13.2	7.6	2.6	350		腹面縁辺に剥離あり、背面自然面に敲打

第 25 表　星谷遺跡出土石器観察表 (写真のみ掲載)

写真図版		遺構	層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特　　徴
22	7		包含層	磨石・敲石	7.37	6.42	5.33	356.4	砂岩	両面に磨面、片面に敲打
	8		包含層	磨石	8.91	7.63	3.82	410	デイサイト	両面に磨面
	9		包含層	石製品 (石棒 ?)	6.48	1.7	0.71	9.3	ホルンフェルス	破片

参考・引用文献（第 1 ～ 6 章まで）

阿部　恵・遊佐五郎　1978「長者原貝塚」南方町文化財調査報告書第 1 集

稲野裕介ほか　1983『滝ノ沢遺跡 (1977 ～ 1982 年度調査)』北上市文化財調査報告第 33 集

大崎市教育委員会　2008『東要害貝塚』宮城県大崎市文化財調査報告書第 3 集

加藤　孝　1951「宮城県上川名貝塚の研究　－東北地方縄文式文化の編年学的研究（一）－」『宮城学院女子大学研究論集 1』pp.138-199

加藤　孝　1956「陸前国大松澤貝殻塚の研究」その (一)・その (二)『宮城学院女子大学研究論文集』9・10

興野義一　1968「大木式土器理解のために (Ⅲ)」考古学ジャーナル 18 号 pp.8-10

興野義一　1968「大木式土器理解のために (Ⅳ)」考古学ジャーナル 24 号 pp.17-19

興野義一　1969「大木式土器理解のために (Ⅴ)」考古学ジャーナル 32 号 pp.6-9

興野義一　1970「大木式土器理解のために (Ⅵ)」考古学ジャーナル 48 号 pp.20-22

気仙沼市教育委員会　1980『南最知遺跡発掘調査概報』気仙沼市文化財調査報告書第 2 集

小井川和夫・阿部　恵　1980「宇賀崎貝塚」『金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎 1 号墳他』宮城県文化財調査報告書第 67 集　pp.55-182

東北歴史資料館　1989「宮城県の貝塚」東北歴史資料館資料集第 25 集

丹羽　茂　1981「大木式土器」『縄文文化の研究』Ⅱ 雄山閣

藤沼邦彦ほか　1969『埋蔵文化財緊急発掘調査概報－長根貝塚－』宮城県文化財調査報告書第 19 集

宮城県鼎が浦高等学校社会班　1965『気仙沼周辺遺跡の概要及び大島磯草貝塚・大浦浦島貝塚発掘調査報告』

宮城県教育委員会　1986『小梁川遺跡遺物包含層土器編　七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 117 集

宮城県教育委員会　1987「中ノ内 A 遺跡」・「中ノ内 B 遺跡」『中ノ内 A 遺跡・本屋敷遺跡他　東北横断自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 121 集

宮城県教育委員会　2003「嘉倉貝塚」宮城県文化財調査報告書第 192 集

八巻正文ほか　1979『大木囲貝塚　－昭和 52 年度環境整備調査報告』七ヶ浜町文化財調査報告書第 4 集

第 7 章　磯草貝塚から出土した動物遺存体

松崎哲也・山﨑　健（奈良文化財研究所）

1．整理対象遺物（分析資料）の限定

磯草貝塚の平成 24 年度 1 次調査において、T3 から縄文時代前期末葉～中期初頭の貝層が検出された。貝層は土壌ごと採取され、気仙沼市教育委員会で 4mm 目と 1mm 目フルイによる水洗選別作業が実施された。出土した動物遺存体は整理用コンテナ 13 箱分（土壌選別終了段階）におよぶが、奈良文化財研究所に支援要請が来た時点で、分析に残された時間が 1 ヵ月程度しか残されていなかったため、整理対象遺物を限定して作業を簡略化することで対応した。

分析対象は、磯草貝塚における動物利用の時期的変遷を検討できる必要最小限の資料に限定し、出土した動物遺存体のうち、A2' 層と C 層（大木 6 式）、A2 層（大木 6 式新段階）、13 層（大木 7a 式古段階）、7 層と 8 層（大木 7a 式）のみを対象とした。分析資料は、①現場で採集された資料（以下、「現場採集資料」）と、貝層を水洗選別して得られた資料のうち、② 4mm 目フルイの面上で回収された資料（以下、「4mm 目フルイ資料」）、③ 1mm 目フルイの面上で回収された資料（以下、「1mm 目フルイ資料」）に大別できる。分析対象とした層位について、現場採集資料はすべての資料、4mm 目フルイ資料は原則として各層土嚢 2 袋分のみを抽出して分析した。7 層のみ、土嚢 1 袋分の量が多かったため、土嚢 1 袋分を分析している。また 7 層の現場採集資料については、「7・8 層」とラベルに書かれた現場採集資料も含まれていた。なお、1mm 目フルイ資料は、時間的制約から本報告では参考で触れる程度に留めざるを得なかった。

2．同定・記載

動物遺存体組成の時期的変遷を把握するため、各層ごとに骨と貝を分けて、それぞれの質量を電子天秤で計量した。同定は現生骨格標本との比較によりおこない、比較標本は環境考古学研究室の所蔵標本を用いた。貝類 1,289 点、フジツボ類 61 点、ウニ類 14 点、魚類 672 点、鳥類 7 点、哺乳類 19 点の合計 2,062 点を同定した。同定された分類群は 61 分類群である。出土した動物遺存体の種名表を第 26 表、一覧を第 27 ～ 34 表に示す。種名の記載は、西村編（1992、1995）、奥谷編（2000）、阿部監修（2008）、日本鳥学会編（2012）、中坊編（2013）に従った。

貝類は 28 分類群を同定した。アサリが最も多く見られ、イシダタミ、クチバガイ、スガイ、ニシキウズガイ科、コシダカガンガラが次いで出土した。生態を考慮すると、砂質・砂泥質に生息するアサリやクチバガイ、岩礁・礫に生息するイシダタミ、スガイ、ニシキウズガイ科、コシダカガンガラが多く出土している。フジツボ類ではチシマフジツボが多く出土し、種は不明であるがウニ類も出土した。

魚類は 19 分類群を同定した。マグロ属やマダイ、タイ科が多く、アイナメ属、カツオ、メバル科が次いで出土している。また、ネズミザメ科の歯を素材とした垂飾が 1 点出土した。マグロ属にはク

第 26 表　磯草貝塚から出土した動物依存体の種名一覧

棘皮動物門	Echinodermata
ウニ綱	Echinoidea sp.
脊椎動物門	Verterata
軟骨魚綱	Chondrichthyes
板鰓亜綱	Elasmobranchii spp.
アオザメ	Isurus oxyrinchus
硬骨魚綱	Osterchthyes
アナゴ科	Congridae sp.
ニシン科	Clupeidae sp.
メバル科	Sebastidae spp.
アジ科	Carangidae sp.
ブリ属	Seriola sp.
タイ科	Sparidae sp.
マダイ	Pagrus major
ベラ科	Labridae sp.
アイナメ属	Hexagrammos sp.
サバ科	Scombridae spp.
サバ属	Scomber sp.
マグロ族	Thunnini spp.
ソウダガツオ属	Auxis sp.
マグロ属	Thunnus sp.
カツオ	Katsuwonus pelamis
サワラ属	Scomberomorus sp.
カレイ科	Pleuronectidae sp.
カワハギ科	Monacanthidae sp.
フグ科	Tetraodontidae sp.
鳥綱	Aves
キジ科	Phasianidae sp.
カモ亜科	Anatinae sp.
カイツブリ科	Podicipedidae sp.
ウ科	Phalacrocoracidae sp.
哺乳綱	Mammalia
イヌ科	Canidae sp.
ニホンジカ	Cervus nippon
クジラ目	Cetacea sp.
軟体動物門	Mollusca
腹足綱	Gastropoda
ニシキウズガイ科	Trochidae spp.
クボガイ	Chlorostoma lischkei
コシダカガンガラ	Omphalius rusticus
イシダタミ	Monodonta labio
スガイ	Turbo cornatus coreensis
ウミニナ	Batillaria cumingii
タマキビ	Littorina brevicula
エゾタマガイ	Cryptonatica andoi
アッキガイ科	Muricidae spp.
ヒレガイ	Ceratostoma burnetti
チヂミボラ	Nucella lima
レイシガイ	Thais bronni
イボニシ	Thais clavigera
アカニシ	Rapana venosa
二枚貝綱	Bivalvia
カリガネエガイ	Barbatia virescens
イガイ	Mytilus coruscus
ムラサキインコ	Septifer virgatus
アズマニシキ	Chlamys farreri nipponensis
ホタテガイ	Patinopecten yessoensis
マガキ	Crassostrea gigas
ウソシジミ	Felaniella usta
ウバガイ	Pseudocardium sachalinense
ミルクイ	Tresus keenae
クチバガイ	Coecella chinensis
マルスダレガイ科	Venaroida spp.
オニアサリ	Protothaca jedoensis
カガミガイ	Phacosoma japonicum
アサリ	Ruditapes philippinarum
ウチムラサキ	Saxidomus purpurata
オオノガイ	Mya arenaria oonogai
節足動物門	Arthropoda
顎脚綱	Maxillopoda
フジツボ亜目	Balanomorpha spp.
チシマフジツボ	Semibalanus cariosus

ロマグロ、キハダ、メバチなどが含まれる。より沿岸性が強いのはクロマグロで、三陸海岸では初夏から秋に来遊する。推定体長は 1m 程度のものから、2m 以上の個体も認められる。タイ科魚類の中で、科以下に同定できたのはマダイだけであるため、タイ科と同定した資料もマダイのものである可能性が高い。生態を考慮すると、マグロ属やカツオなど季節的に回遊する魚種、マダイ、アイナメ属やメバル科など深浅移動はあるが基本的に沿岸部で定住する魚種が多く出土していた。

鳥類はキジ科、カモ亜科、カイツブリ科、ウ科の 4 分類群、哺乳類はニホンジカ、イヌ科、クジラ目の 3 分類群を同定したが、出土量はわずかである。ニホンジカの角を素材とした釣針や垂飾、クジラ目の肋骨を素材とした鯨骨製品が出土した。

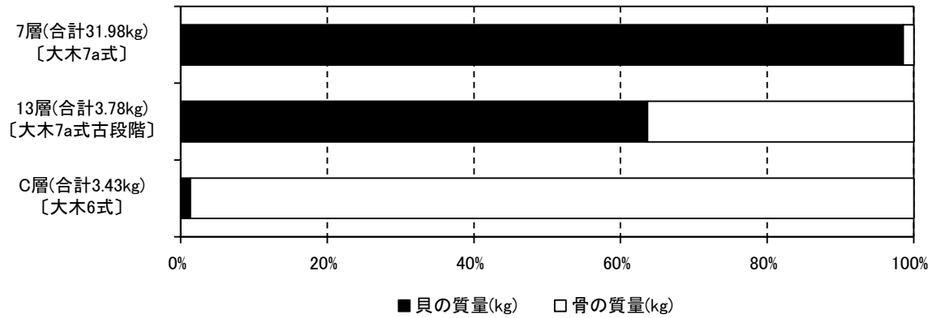
3．動物利用の時期的変遷

前期末葉～中期初頭における動物利用の時期的変遷を検討する。動物遺存体組成は、骨と貝の質量比と大分類群の同定破片数比で表した（第 46・47 図）。質量比組成と同定破片数比組成はともに、骨の出土量が減少して貝の出土量が増加するという共通した傾向を示した。同定破片数比で動物骨の内容をさらに検討すると、C 層（大木 6 式）は魚骨が廃棄されていたが、13 層（大木 7a 式古段階）では魚骨が減少して、7 層（大木 7a 式）では貝類が廃棄されるという様相となる。各時期を通して、全体的に哺乳類や鳥類の出土量は非常に少なかった。

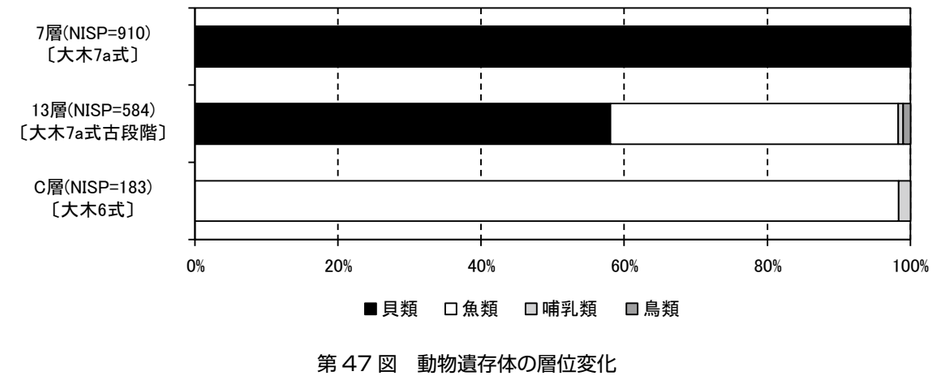
4．採貝活動

下層の C 層（大木 6 式）では貝類の出土量が非常に少ないため、中層の 13 層（大木 7a 式古段階）と上層の 7 層（大木 7a 式）で採貝活動を検討する。両層ともアサリが約 40％程度を占める点で共通するが、上層の 7 層（大木 7a 式）では砂・砂泥底に生息する貝類がやや増加していた（第 48 図）。

磯草貝塚と同じ気仙沼湾岸に所在する南最知貝塚では、前期末葉～中期初頭（大木 6 ～ 7a 式期）の調査区はクボガイ・スガイ・イシダタミといった巻貝類が主体の貝層であったが、中期初頭（大木 7a ～ 8a 式期）の調査区はアサリなどの二枚貝類が主体の貝層となっており、遺跡周辺の海岸が岩礁域から砂泥域に変化したと指摘されている（宮城県鼎が浦高等学校社会班 1971）。前期末葉～中期初頭における貝類組成の変化は、少なくとも磯草貝塚だけではなく、気仙沼湾に共通した傾向であった可能性があり、海退現象による影響が示唆される。



第 46 図　質量の層位変化

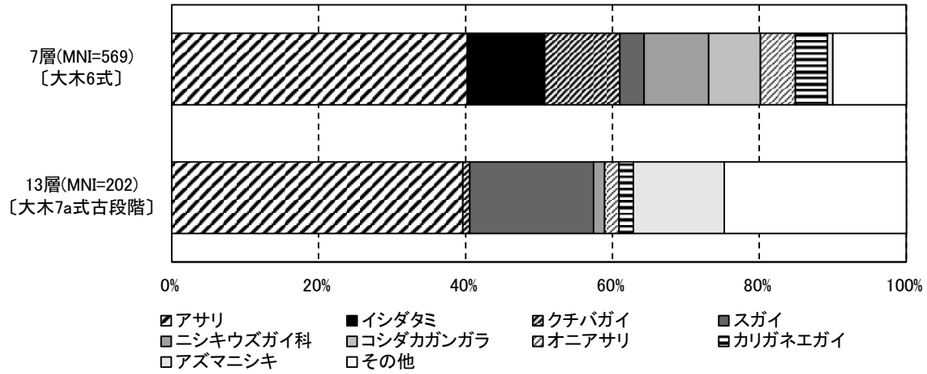


第 47 図　動物遺存体の層位変化

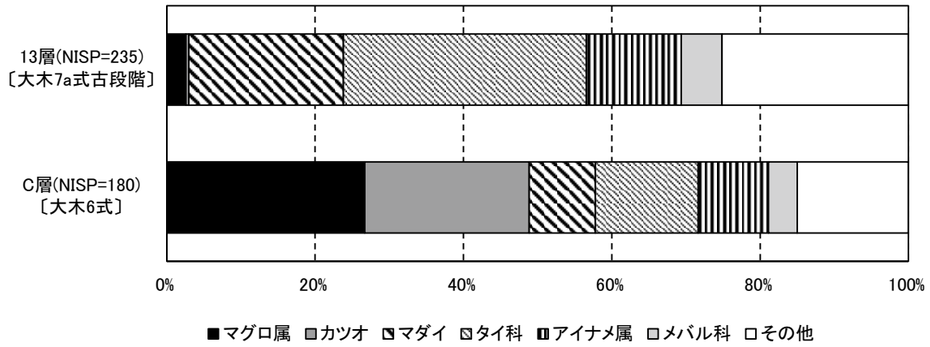
5．漁撈活動

4mm 目フルイ資料における魚類組成をみると、下層の C 層（大木 6 式）ではマグロ属やカツオが非常に多く出土したが、中層の 13 層（大木 7a 式古段階）ではマグロ属やカツオが激減して、上層の 7 層（大木 7a 式）になると魚類の出土量自体が減少して同定可能資料は 0 点であった（第 49 図）。現場採集資料では C 層（大木 6 式）は資料が採集されていないため、その上層である A2 層（大木 6 式）と A2' 層（大木 6 式新段階）の資料を分析したところ、A2 層（大木 6 式）で 114 点、A2 層（大木 6 式新段階）で 116 点と出土量が多く、とくにマグロ属とマダイが卓越した。しかし、13 層（大木 7a 式古段階）では 8 点､7･8 層（大木 7a 式）では 19 点と現場採集資料の出土量が激減した（第 33 表）。

なお、詳細な分析はできなかったが、1mm 目フルイ資料ではニシン科やカタクチイワシなどが見られ、大型魚類を対象とした漁撈活動だけでなく、小型魚類を対象とした漁撈活動もおこなわれていたことが確認できる。



第 48 図　貝類組成の層位変化



第 49 図　魚類組成の層位変化

6．まとめ

磯草貝塚では、前期末葉～中期初頭の貝層が検出された。全体として、採貝活動（貝類）や漁撈活動（魚類）が活発であるのに対し、狩猟活動（哺乳類・鳥類）は低調であった。

前期末葉の大木 6 式期では、マグロ属・マダイ・カツオの 3 種を中心とした漁撈活動を活発におこなう一方で、採貝活動は低調であった。本稿では、時間的制約から 1mm 目フルイ資料を分析できなかったが、小型魚類を対象とした網漁などもおこなっていたことは確認できる。

中期初頭の大木 7a 式古段階の時期では、魚類の出土量が減少して、貝類の出土量が増加した。採貝活動はアサリを主体とし、漁撈活動はマダイを主体となって、マグロ属やカツオの出土量は激減する。

さらに中期初頭の大木 7a 式期になると、魚類がほとんど出土しなくなった。アサリを主体とする採貝活動は継続するが、砂泥底に生息する貝類がやや増加しており、海退現象に伴う遺跡周辺の海洋環境の変化が示唆される。

魚骨層や骨をほとんど含まない貝層のように、漁撈活動や採貝活動といったある特定の生業活動に特化することが大きな特徴といえる。こうした廃棄の様相からは、通年的に定住した集落形態ではな

く、作業場なども含む短期的な居住形態が示唆される。三陸海岸では、縄文時代前期後半にマグロ属が層をなすほど集中して出土することが知られており、例えば岩手県大船渡市の蛸の浦貝塚では、縄文時代前期末葉（大木６式期）に比定される層で「マグロの骨がぎっしりと詰まった層が厚さ５～10cm ほどで２枚見られた」との記載が見られる（大船渡市立博物館編 1987）。今後、他遺跡との比較を踏まえて、磯草貝塚の様相を評価する必要があろう。

7．今後の課題

復興関連調査の中で、整理対象資料を最小限に限定して報告をおこなった。貴重な資料群であるが、整理作業を簡略化せざるを得ない状況のため、将来の様々な活用に向けて今後の課題を明示しておきたい。

・4mm 目フルイ資料は、各層とも土嚢２袋分のみを抽出したため、今後は分析資料を増やして、本報告で得られた同定結果が各層や各時期を代表するものなのかを検証する必要がある。

・1mm 目フルイ資料の分析を実施することができなかった。三陸海岸は、縄文時代の貝塚が高密度で分布する地域として知られているが、貝塚調査で水洗選別作業が一般的になる以前の調査であり、現場採集資料の情報しか分からない遺跡が多い。磯草貝塚の 1mm 目フルイ資料は、三陸海岸における生業活動を検討する上で重要な情報となる。

・骨に認められる痕跡について、分析・報告することができなかった。大量に出土したマグロ属の骨の中には、解体痕跡とともに、刺突の際に残された可能性のある痕跡も認められた。銛頭を用いた漁撈活動が盛んとなる前の段階における、マグロ漁の実態を示す貴重な資料といえよう。

第 27 表　哺乳類・鳥類の観察表（現場採集資料）

層名	時期	大分類	種名	部位	部分	左右	癒合状況	備考
7 層	大木 7a	哺乳綱	ニホンジカ	角	-	-	-	装飾品（ヘアピン）
13 層	大木 7a 古段階	哺乳綱	ニホンジカ	角	-	-	-	釣針
13 層	大木 7a 古段階	哺乳綱	不明	不明	-	-	-	骨針
A2 層	大木 6 新段階	鳥綱	カイツブリ科	尺骨	骨幹部～遠位端	右	癒合	
A2 層	大木 6 新段階	哺乳綱	ニホンジカ	角	-	-	-	
A2 層	大木 6 新段階	哺乳綱	ニホンジカ	角	-	-	-	加工痕あり
A2 層	大木 6 新段階	哺乳綱	不明	四肢骨	骨幹部	-	-	幼獣
A2´ 層	大木 6	哺乳綱	イヌ科	椎骨	仙椎	-	癒合	イヌ？
A2´ 層	大木 6	哺乳綱	ニホンジカ	椎骨	軸椎	-	癒合	
A2´ 層	大木 6	哺乳綱	ニホンジカ	角	-	-	-	加工痕あり
A2´ 層	大木 6	哺乳綱	不明	不明	-	-	-	
A2´ 層	大木 6	哺乳綱	不明	肋骨	骨幹部	-	-	海獣類
層位不明	時期不明	哺乳綱	クジラ目	肋骨	骨幹部	-	-	鯨骨製品

第 28 表　哺乳類・鳥類の観察表（4mm 目フルイ資料）

層名	時期	大分類	種名	部位	部分	左右	癒合状況	備考
13 層	大木 7a 古段階	鳥綱	ウ科	烏口骨	遠位端	右	癒合	
13 層	大木 7a 古段階	鳥綱	カモ亜科	烏口骨	遠位端	右	癒合	
13 層	大木 7a 古段階	鳥綱	キジ科	烏口骨	遠位端	右	癒合	
13 層	大木 7a 古段階	鳥綱	不明	肩甲骨	骨幹部	左	-	
13 層	大木 7a 古段階	鳥綱	不明	不明	-	-	-	
13 層	大木 7a 古段階	鳥綱	不明	不明	-	-	-	
13 層	大木 7a 古段階	哺乳綱	ニホンジカ	角	-	-	-	加工痕あり
13 層	大木 7a 古段階	哺乳綱	ニホンジカ	橈骨	遠位端	右	癒合	
13 層	大木 7a 古段階	哺乳綱	ニホンジカ	尺骨	遠位端	左	癒合	
13 層	大木 7a 古段階	哺乳綱	不明	不明	-	-	-	中手 / 中足骨？
C 層	大木 6	哺乳綱	ニホンジカ	角	-	-	-	加工痕あり
C 層	大木 6	哺乳綱	ニホンジカ	遊離歯	上顎 P4	右	-	
C 層	大木 6	哺乳綱	中型哺乳類	椎骨	椎体板	-	未癒合骨端	

第 29 表　貝類の集計表（現場採集資料）

種名		7 層 大木 7a （左 / 右）	A2´ 層 大木 6 （左 / 右）	総計 （左 / 右）	生息域 （熊谷 2001）
二枚貝綱	アズマニシキ	0 / 3		0 / 3	岩礁・礫
	マガキ	1 / 1		1 / 1	岩礁・礫
	ミルクイ	1 / 0		1 / 0	砂・砂泥質
	クチバガイ	1 / 0		1 / 0	砂・砂泥質
	オニアサリ	4 / 0		4 / 0	砂・砂泥質
	カガミガイ	0 / 1		0 / 1	-
	アサリ	2 / 3		2 / 3	砂・砂泥質
	ウチムラサキ	1 / 6		1 / 6	砂・砂泥質
	オオノガイ	0 / 3		0 / 3	砂・砂泥質
	ホタテガイ	1 / 0		1 / 0	砂・砂泥質
総計		11 / 17		11 / 17	
腹足綱	クボガイ	2		2	岩礁・礫
	コシダカガンガラ	5		5	岩礁・礫
	イシダタミ	2		2	岩礁・礫
	イボニシ	2		2	岩礁・礫
	アカニシ		1	1	砂・砂泥質
総計		11	1	12	

第 30 表　貝類の集計表（4mm 目フルイ資料）

種名		7 層 大木 7a （左 / 右）	13 層 大木 6 （左 / 右）	総計 （左 / 右）	生息域 （熊谷 2001）
二枚貝綱	カリガネエガイ	25 / 24	4 / 1	29 / 25	-
	イガイ	2 / 5	4 / 2	6 / 7	岩礁・礫
	ムラサキインコ	3 / 0		3 / 0	岩礁・礫
	アズマニシキ	4 / 4	25 / 25	29 / 29	岩礁・礫
	マガキ		18 / 19	18 / 19	岩礁・礫
	ウソシジミ	1 / 2		1 / 2	-
	ウバガイ？	1 / 0		1 / 0	砂・砂泥質
	クチバガイ	58 / 51	2 / 1	60 / 52	砂・砂泥質
	オニアサリ	25 / 27	4 / 1	29 / 28	砂・砂泥質
	カガミガイ		1 / 1	1 / 1	-
	カガミガイ？		0 / 1	0 / 1	-
	アサリ	229 / 226	46 / 80	275 / 306	砂・砂泥質
	ウチムラサキ	0 / 1	8 / 3	8 / 4	砂・砂泥質
	マルスダレガイ科		7 / 7	7 / 7	
	オオノガイ	0 / 1		0 / 1	砂・砂泥質
	二枚貝不明		1 / 1	1 / 1	-
総計		348 / 341	120 / 142	468 / 483	
腹足綱	クボガイ	6		6	岩礁・礫
	コシダカガンガラ	40		40	岩礁・礫
	イシダタミ	60		60	岩礁・礫
	ニシキウズガイ科	50	3	53	-
	スガイ	19	31	50	岩礁・礫
	スガイ蓋	9	34	43	岩礁・礫
	ウミニナ		2	2	砂・砂泥質
	タマキビ	6	2	8	岩礁・礫
	エゾタマガイ？	1		1	砂・砂泥質
	ヒレガイ	1		1	岩礁・礫
	チヂミボラ		1	1	岩礁・礫
	レイシガイ	2		2	岩礁・礫
	イボニシ	21	2	23	岩礁・礫
	アカニシ		1	1	砂・砂泥質
	アッキガイ科	5		5	-
	巻貝不明	1	1	2	-
総計		221	77	298	

第 31 表　フジツボ類・ウニ類の集計表（4mm 目フルイ資料）

種名	部位	7 層 大木 7a	13 層 大木 7a 古段階	総計
チシマフジツボ	殻板	7	49	56
フジツボ亜目	殻板	1	4	5
ウニ綱	殻板	1	13	14
総計		9	66	75

第 32 表　フジツボ類・ウニ類の質量表（4mm 目フルイ資料）

種名	部位	7 層 大木 7a	13 層 大木 7a 古段階	総量
チシマフジツボ	殻板	0.68g	5.23g	5.91g
フジツボ亜目	殻板	0.05g	0.36g	0.41g
ウニ綱	殻板	0.03g	0.53g	0.56g
総質量		0.76g	6.12g	6.88g

第 33 表　魚類の集計表（現場採集資料）

種名	部位	7・8 層 大木 7a （左 / 右）	13 層 大木 7a 古段階 （左 / 右）	A2 層 大木 6 新段階 （左 / 右）	A2′ 層 大木 6 （左 / 右）	総計
板鰓亜綱	椎骨		1		1	2
ニシン科	舌顎骨				1 / 0	2
	腹椎				1	
アナゴ科	鋤骨			1		1
メバル科	主上顎骨			0 / 1		2
	角骨			0 / 1		
ブリ属	主上顎骨			0 / 1		3
	歯骨			1 / 0		
	方骨			1 / 0		
タイ科	副蝶形骨		1	1		52
	角舌骨				0 / 2	
	上舌骨			1 / 0		
	前鰓蓋骨			0 / 1		
	間鰓蓋骨		1 / 0	1 / 2	1 / 1	
	肩甲骨			1 / 0		
	後側頭骨			2 / 2		
	上擬鎖骨		1 / 0	1 / 0	1 / 1	
	遊離歯			2	4	
	腹椎			3	3	
	尾椎		1	5	13	
マダイ	前頭骨			1	3	68
	上後頭骨				1	
	口蓋骨			1 / 0	0 / 1	
	主上顎骨			1 / 4	2 / 1	
	前上顎骨			5 / 4	1 / 1	
	歯骨		0 / 1	2 / 5	4 / 1	
	角骨				1 / 1	
	方骨				1 / 0	
	舌顎骨			2 / 0	0 / 1	
	前鰓蓋骨		1 / 0	3 / 1	1 / 0	
	主鰓蓋骨			4 / 5	2 / 2	
	擬鎖骨				1 / 0	
	第一腹椎			1		
	腹椎			2		
アイナメ属	主上顎骨			0 / 1		2
	歯骨			0 / 1		
マグロ族	前鰓蓋骨			1 / 0	1 / 0	2
マグロ属	主上顎骨			1 / 2	1 / 1	111
	前上顎骨			2 / 2		
	歯骨	0 / 1		0 / 1	4 / 3	
	下舌骨	1 / 0		1 / 1	0 / 2	
	角舌骨			5 / 1	1 / 0	
	上舌骨			1 / 0	0 / 1	
	角骨			1 / 2		
	方骨	0 / 1		3 / 1	1 / 1	
	外翼状骨			2 / 0		
	前鰓蓋骨	1 / 0		1 / 0	1 / 0	
	主鰓蓋骨				1 / 0	
	擬鎖骨	0 / 1				
	肩甲骨			2 / 0	1 / 1	
	腹椎		1	2	7	
	尾椎	14		3	12	
	椎骨			5	14	
カツオ	主上顎骨			1 / 1		6
	椎骨				4	
サワラ属	腹椎			1		1
不明				2	3	5
総計		19	8	116	114	257

第 34 表　魚類の集計表（4mm 目フルイ資料）

種名	部位	13 層 大木 7a 古段階 （左 / 右）	C 層 大木 6 （左 / 右）	総計
板鰓亜綱	椎骨	3		3
アオザメ	遊離歯	1		1
アナゴ科	腹椎	5		5
メバル科	鋤骨	1		20
	主上顎骨	0 / 1		
	前上顎骨	1 / 0	1 / 0	
	歯骨	2 / 0		
	舌顎骨	2 / 0		
	主鰓蓋骨	0 / 2		
	腹椎	1	6	
	尾椎	3		

種名	部位	13 層 大木 7a 古段階 （左 / 右）	C 層 大木 6 （左 / 右）	総計
ブリ属	主上顎骨	1 / 1		6
	歯骨	1 / 1		
	腹椎	1		
	尾椎	1		
ブリ属？	前上顎骨	1 / 0		1
アジ科	後鱗	1		3
	腹椎	2		
タイ科	副蝶形骨	1	2	102
	鋤骨	1	1	
	主上顎骨		0 / 1	
	歯骨		1 / 1	
	角舌骨	4 / 0	1 / 1	
	上舌骨	5 / 0		
	前鰓蓋骨	0 / 1		
	間鰓蓋骨	1 / 0		
	肩甲骨	4 / 2		
	後側頭骨	4 / 3	0 / 1	
	上擬鎖骨	2 / 0	0 / 1	
	遊離歯	2		
	腹椎	15	9	
	尾椎	32	6	
マダイ	前頭骨	1	2	65
	上後頭骨		1	
	口蓋骨	4 / 0	2 / 0	
	主上顎骨	3 / 4		
	前上顎骨	4 / 4	1 / 1	
	歯骨	4 / 5	0 / 1	
	角骨	2 / 4	1 / 3	
	方骨	3 / 1	0 / 2	
	舌顎骨	2 / 0		
	前鰓蓋骨	3 / 0		
	主鰓蓋骨	1 / 1	1 / 0	
	骨瘤	1		
	第一腹椎	1		
	腹椎	1	1	
ベラ科	歯骨		0 / 1	2
	腹椎	1		
アイナメ属	口蓋骨	1 / 1		49
	主上顎骨	1 / 1		
	方骨	2 / 0	0 / 1	
	舌顎骨	0 / 2	1 / 0	
	主鰓蓋骨	1 / 0		
	第一腹椎	2		
	腹椎	11	3	
	尾椎	8	12	
サバ科	尾椎	2		2
サバ属	前鰓蓋骨			5
	第一腹椎		1	
	腹椎		1	
	尾椎		3	
ソウダガツオ属	尾椎		1	2
	椎骨		1	
マグロ族	尾椎	1	2	3
マグロ属	角骨		1 / 0	54
	前鰓蓋骨	0 / 1	0 / 1	
	擬鎖骨			
	肩甲骨		0 / 1	
	腹椎	4	9	
	尾椎	1	18	
	椎骨		18	
マグロ属？	方骨		1 / 0	1
カツオ	舌顎骨		0 / 1	41
	腹椎		4	
	尾椎		12	
	椎骨	1	23	
カレイ科	方骨	0 / 1		10
	腹椎	1		
	尾椎	8		
カワハギ科	第一背鰭棘		1	4
	腹椎	1	1	
	尾椎	1		
フグ科	前上顎骨		0 / 1	5
	方骨			
	腹椎	1		
	尾椎	3		
種不明		20	13	39
総計		235	180	415

謝辞

本報告にあたり、鵜山真委、田中香里、中島美穂子、吉田昭代（50音順、敬称略）のご協力を得ました。記して、感謝の意を表します。

引用文献

阿部永監修　2008『日本の哺乳類　改訂2版』東海大学出版会
大船渡市立博物館編　1987『蛸の浦貝塚』大船渡市立博物館調査研究報告
奥谷喬司編　2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会
熊谷賢　2001「動物遺存体」『中沢浜貝塚発掘調査報告書―平成9年度発掘 骨角器・自然遺物編―』陸前高田市文化財調査報告書第23集、pp.37-97
中坊徹次編　2013『日本産魚類検索―全種の同定―』第3版、東海大学出版会
西村三郎編　1992『原色検索日本海岸動物図鑑［I］』保育社
西村三郎編　1995『原色検索日本海岸動物図鑑［II］』保育社
日本鳥学会編　2012『日本鳥類目録　改訂第7版』日本鳥学会
宮城県鼎が浦高等学校社会班　1971『気仙沼市南最知遺跡発掘調査報告』

写真図版

1 次調査対象地全景（南西から）

1 次調査トレンチ全景（北東から）

T3 全体（東から）

T3 東・貝層検出状況（南から）

T3 調査区北部（旧調査区部分南壁）

T3-13・A 層検出状況

T3-A2 層土器出土状況

T3-A2’ 層土器・骨出土状況

写真図版 1　磯草貝塚発掘現場（1）

T3-B 下層マグロ椎骨出土状況

T3-C 層　No.5 土器出土状況

T3 北側深堀り部堆積状況

T2 北側（南から）

T5 西壁（東から）

T5 南部　包含層検出状況（西から）

T6 貝層・包含層検出状況（南から）

T7 北壁（南から）

写真図版２　磯草貝塚発掘現場（2）

写真図版３　磯草貝塚出土土器（1）

写真図版４　磯草貝塚出土土器（2）

写真図版５　磯草貝塚出土土器（3）

写真図版６　磯草貝塚出土土器（4）

写真図版７　磯草貝塚出土土器（5）

写真図版８　磯草貝塚出土土器（6）

写真図版９　磯草貝塚出土土器（7）

写真図版 10　磯草貝塚出土土製品・石器・骨角器

1：アサリ、2：オニアサリ、3：ウチムラサキ、4：オオノガイ、5：マガキ、6：アズマニシキ、7：カガミガイ、8：カリガネエガイ、9：ウソシジミ、10：イガイ、11：クチバガイ、12：タマキビ、13：イシダタミ、14：スガイ、15：クボガイ、16：コシダカガンガラ、17：イボニシ、18：アカニシ、19～23：マグロ属（19：腹椎、20～22：尾椎、23：歯骨）、24～27：マダイ（24：第一椎骨、25：前上顎骨、26：主上顎骨、27：歯骨）、28：アナゴ科鋤骨、29：ブリ属歯骨、30：ベラ科歯骨、31・32：カツオ（31：椎骨、32：主上顎骨）、33：ソウダガツオ属尾椎、34：カレイ科尾椎、35：アジ科腹椎、36：サバ属尾椎、37：カワハギ科第一背鰭棘、38：板鰓亜綱椎骨、39：サワラ属腹椎、40：フグ科前上顎骨、41・42：アイナメ属（41：尾椎、42：方骨）、43：メバル科歯骨、44・45：ニホンジカ（44：角、45：橈骨）、46：カイツブリ科尺骨、47：キジ科烏口骨、48：カモ亜科烏口骨、49：ウ科烏口骨

写真図版 11　磯草貝塚出土動物遺存体

3 区全景（北東から）

3 区 SK2 底面礫群出土状況（南西から）

3 区 SK2・3（東から）

3 区 SK4 断面（東から）

3 区 SK4 土器出土状況

3 区 SK4（東から）

3 区 SK6・11（南東から）

3 区 SK7（南東から）

写真図版 12　高谷遺跡発掘現場（1）

3 区 SK7 底面礫出土状況（東から）

3 区 SK8（南から）

3 区 SK9 遺物出土状況

3 区 SK9 石皿出土状況（南から）

3 区 SK10 断面（南東から）

3 区 SK10（南から）

3 区調査風景（南から）

4 区全景（南東から）

写真図版 13　高谷遺跡発掘現場（2）

4 区 SK2 断面（北から）

4 区 SK2 完掘（南から）

4 区 SK3（北東から）

4 区 SK4 底面礫群出土状況（東から）

4 区 SK5 断面（北東から）

4 区 SK6（東から）

4 区 SK7 断面（北東から）

4 区調査風景（北西から）

写真図版 14　高谷遺跡発掘現場（3）

写真図版 15　高谷遺跡出土土器

写真図版 16　高谷遺跡出土石器（1）

写真図版 17　高谷遺跡出土石器（2）

遺跡遠景（東から）

調査区全景（南西から）

SK1 完掘（南から）

SK2 断面（南から）

SK2 完掘（東から）

SK1・2、P1 完掘（北東から）

SK3 完掘（南東から）

SK4 完掘（北東）

写真図版 18　古館貝塚発掘現場

写真図版 19　古館貝塚出土遺物

1 次 T1 全景（東から）

1 次 T2 全景（西から）

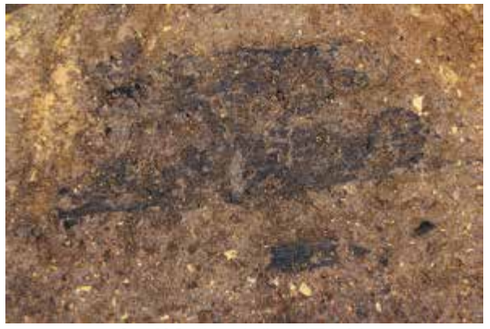
1 次 T2 土器埋設炉群（東から）

1 次 T2 土器埋設炉詳細

2 次全景（南から）

2 次 SD3 掘り下げ状況（東から）

2 次 SI1 床面検出状況



2 次 SI 貯蔵穴内炭化材（西から）

写真図版 20　南最知貝塚発掘現場

写真図版 21　南最知貝塚出土遺物

対象地全景（北から）

調査区全景（西から）

南壁および SI1 掘り下げ状況（北西から）

SI1 完掘状況（南から）

写真図版 22　星谷遺跡発掘現場・出土遺物

報告書抄録

ふりがな	けせんぬましんさいふっこうかんれんいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書 1
副書名	平成 24 年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財発掘調査事業に伴う個人住宅関連遺跡発掘調査
シリーズ名	気仙沼市文化財調査報告書
シリーズ番号	10
編著者名	森　幸一郎・平木場秀男・西村　力・古田和誠
編集機関	気仙沼市教育委員会
所在地	〒 988-8502　気仙沼市魚市場前 1 番 1 号　TEL 0226-22-3442
発行年月日	西暦 2017 年 12 月 22 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積	調査起因
いそくさかいづか 磯草貝塚	けせんぬまし 気仙沼市 いそくさ 磯草	042056	59001	38 度 52 分 15 秒	141 度 36 分 15 秒	（平成 24 年度 1 次） 2012.10.17 ～ 10.25 （平成 24 年度 2 次） 2013.03.07 ～ 03.08	（平成 24 年度 1 次） 24㎡ （平成 24 年度 2 次） 110㎡	個人住宅建設
たかやいせき 高谷遺跡	けせんぬまし 気仙沼市 まつざきたかや 松崎高谷	042056	59109	38 度 52 分 10 秒	141 度 34 分 36 秒	(3 区) 2012.05.23 ～ 06.12 (4 区) 2013.03.21 ～ 03.26	(3区) 235㎡ (4区) 141㎡	個人住宅建設 （道路）
こだてかいづか 古館貝塚	けせんぬまし 気仙沼市 からくわちょう 唐桑町 しびたち 鮪立	042056	63017	38 度 53 分 31 秒	141 度 38 分 19 秒	2012.07.20 ～ 08.01	51㎡	個人住宅建設
みなみさいちかいづか 南最知貝塚	けせんぬまし 気仙沼市 さいち 最知 みなみさいち 南最知	042056	59035	38 度 50 分 57 秒	141 度 34 分 45 秒	（平成 24 年度 1 次） 2012.06.13 ～ 06.19 （平成 24 年度 2 次） 2012.08.06 ～ 08.10	（平成 24 年度 1 次） 198㎡ （平成 24 年度 2 次） 155㎡	個人住宅建設
ほしやいせき 星谷遺跡	けせんぬまし 気仙沼市 いわつきほしや 岩月星谷	042056	59104	38 度 51 分 29 秒	141 度 34 分 31 秒	2012.09.21 ～ 10.02	40㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
磯草貝塚	貝塚	縄文時代	貝層	縄文土器、石器、土偶、骨角器 動物遺存体	
高谷遺跡	散布地	縄文時代	貯蔵穴・土坑	縄文土器、石器	
古館貝塚	貝塚	縄文時代	貯蔵穴	縄文土器、石器	
南最知貝塚	貝塚 集落	縄文時代 奈良・平安時代 中世	竪穴建物跡、土器埋設炉、土坑 溝跡	縄文土器、石器、須恵器 土師器	
星谷遺跡	集落	縄文時代	竪穴建物跡、土坑	縄文土器、石器	

要約　磯草貝塚では縄文時代前期末葉～中期初等の貝層が検出され、前期初頭～中期中葉・晩期の土器・石器・土偶・骨角器が出土した。高谷遺跡では縄文時代中期末～後期初頭の貯蔵穴群が検出され、中期中葉～後期初頭の土器・石器が出土した。古館貝塚では縄文後期前葉とみられる貯蔵穴 4 基が検出された。南最知貝塚では縄文時代前期～中期の土器埋設炉・土坑、奈良・平安時代の竪穴建物跡、隣接する末永館跡に関連する堀とみられる溝跡が検出された。星谷遺跡では縄文時代前期とみられる竪穴建物跡と前期前葉～後葉の遺物包含層が検出された。

気仙沼市文化財調査報告書第 10 集

気仙沼市震災復興関連遺跡発掘調査報告書 1

平成 24 年度東日本大震災復興交付金埋蔵文化財
発掘調査事業に伴う個人住宅関連遺跡発掘調査

発　行　日　2017 年 12 月 22 日
編集・発行　気仙沼市教育委員会
〒 988-8502　宮城県気仙沼市魚市場前 1 番 1 号
印　　刷　三陸印刷株式会社
〒 988-0141　宮城県気仙沼市松崎柳沢 228-100
TEL　0226-22-0319